

# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 2

## 昭和60年度発掘調査報告

若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目116番地点）  
北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目374番4地点）  
名越ヶ谷 遺跡（大町三丁目1367番4地点）

昭和61年3月

鎌倉市教育委員会

## 序 文

鎌倉市教育委員会

教育長 尾崎 實

市内には、数多くの遺跡が残っています。それは単に鎌倉が中世武家社会の中心であったからだけではなく、この地で漁業と生活を営み続けてきた先祖の歴史の証左であると思います。

しかし、近年の都市の近代化の波の中でこうした祖先の遺産の保存についても様々な問題が生じてきています。

私は行政としてこの問題を真摯に受け止め遺跡の保存に努めたいと存じます。

なお、本書は昭和60年度に鎌倉市が国庫の補助を受け発掘調査を実施し、その成果をまとめたものです。今後の“鎌倉”研究に大きく貢献するものと思います。

この調査に当りご協力を戴いた関係各位にお礼申し上げます。

## 例 言

1. 本書は昭和60年度国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査にかかる  
発掘調査報告書である。
2. 本書は、以下に掲げる遺跡の調査報告書を収録したものである。
  - 1) 若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目116番地点）
  - 2) 北条泰時・時頼邸跡（吉ノ下一丁目374番4地点）
  - 3) 名越ヶ谷遺跡（大町三丁目1367番地点）
3. 発掘調査は鎌倉市教育委員会文化財保護課が行った。
4. 各調査地における調査期間等は別表を参照されたい。

## 目 次

序 文	i
例 言	ii
目 次	iii
I はじめに	1
II 調査の概説	5
1. 若宮人跡周辺遺跡群	5
例言	6
目次	7
第一章 調査地点の位置と歴史的環境	9
第二章 調査の概要	12
第三章 発見された遺構と遺物	15
第四章 調査のまとめ	47
2. 北条泰時・時頼邸跡	69
例言	70
第一章 歴史的環境	71
第二章 調査の経過	73
第三章 検出遺構	74
第四章 出土遺物	76
第五章 まとめ	81
3. 名越ヶ谷遺跡	87
例言	88
第一章 歴史的環境	89
第二章 調査の経過	92
第三章 検出遺構	93
第四章 出土遺物	96
第五章 まとめ	106

# I、はじめに

## 1. 若宮大路周辺遺跡群

鎌倉市小町一丁目116番地に所在する。当遺跡は中世鎌倉のメインストリートである若宮大路の周辺に形成された武家・公家等の館を中心とした遺跡群であり、鎌倉における中世遺跡群のうち、最も中心となる遺跡である。

昭和59年6月、RC造4階建のテナントビルの建築計画について事前相談があり、当該計画では坪掘文化財に対する影響が予想されるため、事前の発掘調査が必要であろう旨回答し、原因者負担で実施するよう指導した。また坪掘を実施し、埋蔵文化財の状況を把握したい旨指導を行った。7月～11月に事業者による周辺住民対応が行われ、この結果12月3・4日になって坪掘を行った。12月14日、坪掘の結果に基づき協議を行い、当該設計では発掘調査が必要であろう旨報告した。一方事業者側から周辺住民との協議によりRC3階建の事務所併用住宅に変更した旨報告があった。昭和60年1月19日、事業者から3月に工事を開始したい旨の申し出があったため、重ねて原因者負担で調査を実施するよう指導を行った。これに対し、調査には協力するが、調査経費の全額負担は難しい旨回答があった。このため公費負担できるか否か、文化庁・県文化財保護課と協議する旨回答した。これにより県文化財保護課と協議したところ、事業者が個人であり、事務所併用住宅の建設であることから、昭和60年度の国庫補助を受け、市教育委員会で対応するよう、また事業者から部分の協力を得るよう指導があった。このため、工事日程の調整をするよう事業者に要請した。2月22日、文化庁記念物課による昭和60年度国庫補助金に関するヒアリングに際し、文化庁・県文化財保護課と協議したところ、昭和60年度早々に国庫補助対応で調査を実施するよう指導があった。2月18日、県文化財保護課と実施について協議を行い、これにより事業者に昭和60年度国庫補助事業として当委員会で発掘調査を実施する旨回答した。あわせて日程の調整を行った。3月、事業者と協議し、4月に事前工事着手、5月初旬に発掘調査開始で協議が終った。4月1日、「上木工事等のための発掘に関する届出書」の提出があり、県文化財保護課に送付したところ、4月15日付で県教育長名で発掘調査を実施するよう通知があった。これにより4月22日、事業者と協力の範囲について協議を行い、5月2日、協力の範囲、調査期間等について協議が終り、5月13日～7月1日の間に発掘調査を実施することとなった。このため5月13日～7月1日まで発掘調査を実施した。

## 2. 北条泰時・時頼邸跡

鎌倉市雪ノ下一丁目374番2、375番2に所在する。当遺跡は北条泰時・時頼の館跡あるいは若宮幕府跡の一例とも推定され、鎌倉における中世遺跡の中でも、最も重要なものの一つである。

昭和60年3月、当該地にアパート建設に伴い、建築確認申請による事前相談があった。構築に対

する若干の影響が予想されるため、「土木工事等のための発掘に関する届出書」の提出を指導したところ、3月15日付で届出書が提出されたので神奈川県教育委員会文化財保護課へ送付したところ、4月4日付で県教育長から掘削工事について市教育委員会職員が立会うこととした旨の通知があった。ところが4月30日、設計事務所から、掘削深度をさげ、G.L. 90cmに変更したい旨連絡があったため、早速協議を再開した。この結果当委員会で坪堀りを行い、その結果により再度協議を行うこととなった。5月15日、坪堀りを行ったところ、発掘調査が必要であると判断されたため、設計事務所、施工業者と協議を行い、設計変更をするよう指導した。16日・17日、設計事務所と協議を行ったが、設計変更には応じられない旨の回答があったため、県文化財保護課と協議したところ、事業者が個人であり、小規模なアパート建設であることから、事業者による発掘調査経費の負担は困難であるとの判断に到り、国庫補助事業として、当委員会で発掘調査を実施するよう指導があった。また既提出の届出書については取下げるよう指導があった。昭和60年5月20日、取下書、新届出書の提出があり、5月21日付県教育委員会教育長名で発掘調査を実施するよう通知があった。これにより5月23日、設計事務所と協議を行い、5月27日～6月8日までの間に発掘調査を実施することで協議が整った。このため5月27日から6月7日まで発掘調査を実施した。

### 3. 名越ヶ谷遺跡

鎌倉市大町三丁目1367番4に所在する、当遺跡は北条氏のうち名越氏を名のる一族の館・間注所執事三善善信邸跡推定地等を含み、国指定史跡名越切通に隣接した中世遺跡である。

昭和60年3月、個人専用住宅の建築計画について事前相談があり、地下室の計画があるところから埋蔵文化財に対する影響が予想されるので、計画を変更するよう指導を行った。4月、敷地が狭く、風致地区であるため高さ制限があり、部屋の確保ができない。このため地下室をつくり土地の有効利用を計りたい旨の回答があったが、重ねて地下室部分の設計変更を指導した。5月、地下室の建設について設計変更の意志がない旨、回答があった。このため5月21日、県文化財保護課と協議したところ、国庫補助事業として当委員会で発掘調査を実施するよう指導があった。これにより「土木工事のための発掘に関する届出書」の提出を指導したところ、5月30日付で提出があり、県文化財保護課宛送付したところ、6月19日付県教育委員会教育長名で発掘調査を実施するよう通知があった。これにより事業者と協議し、8月1日～9月14日の間に発掘調査を実施することで協議が整った。しかし、事業者に依頼した事項に事が遅延したため8月15日から9月28日まで発掘調査を実施した。



昭和60年度の緊急発掘調査地点( )内は県済跡番号

昭和60年度調査地点一覧表

No.	遺跡名	所在地	原因者	調査原因	遺跡種類	調査面積	現地調査期間
1	若宮大路周辺 遺跡群(No242)	小町一丁目116番地	出所重信	事務所併用住宅	館	230m <sup>2</sup>	5月13日 7月1日
2	北条泰時・時頼 邸跡(No282)	芦ノ下一丁目374番地2	山本武子	アパート	館	94m <sup>2</sup>	5月27日 6月7日
3	名越ヶ谷遺跡 (No231)	大町三丁目1367番地4	青藤茂之	専用住宅	館	62m <sup>2</sup>	8月15日 9月28日

## II. 調査の概況

### 1. 若宮大路周辺遺跡群

小町一丁目116番地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市小町一丁目116番における、川所重信の事務所併用住宅建設工事に伴う発掘調査の報告である。
2. 本報の執筆、図版作成、および編集には馬淵和雄があたった。
3. 本報で使用した写真は、遺構・遺物とも馬淵が撮影した。
4. 調査体制は以下のとおり。

担当者　　馬淵和雄（鎌倉市教育委員会嘱託）

調査員　　浜口康・田代郁夫

調査補助員　園部雅之・藤田美樹

5. 出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

6. 発掘調査、および資料整理に際しては、以下の諸氏・諸機関から貴重な御教示と援助を賜った。記して感謝の意を表する。（順不同・敬称略）

鎌倉考古学研究所・清水信行・江島秀木・今泉潔・服部実喜・土橋理子・伊藤正義・清水菜穂

# 目 次

## 本 文 目 次

例 言	6
目 次	7
第一章 調査地点の位置と歴史的環境	9
第二章 調査の概要	12
1. 調査方法	12
2. 調査経過	12
第三章 発見された遺構と遺物	15
第一節 中世	15
1. 遺構	15
2. 遺物	23
第二節 古代その他	36
1. 奈良・平安時代の遺構	36
2. 縄文時代の遺物	46
第四章 調査のまとめ	47
1. 中世	47
2. 奈良・平安時代	50

## 表 目 次

表 I 土壙一覧	27
----------	----

## 挿 図 目 次

図 1 鎌倉駅周辺の主な発掘調査地点	10	図 16 土壙18	21
図 2 調査地点の位置	11	図 17 上壙21	21
図 3 調査区設定図	13	図 18 土壙22	22
図 4 中世遺構全図	14	図 19 柱穴99出土遺物	24
図 5 上層断面(4軸上)	15	図 20 柱穴117出土遺物	24
図 6 建物1	16	図 21 柱穴138出土遺物	24
図 7 建物2	17	図 22 他の柱穴出土遺物	25
図 8 建物3	17	図 23 上壙・溝出土遺物	27
図 9 建物4	18	図 24 井戸1出土遺物	28
図 10 溝1・2断面	18	図 25 井戸2出土遺物	29
図 11 井戸1	19	図 26 井戸3出土遺物	29
図 12 井戸2	20	図 27 上部包含層出土遺物	31
図 13 井戸3	20	図 28 下部包含層出土遺物	33
図 14 土壙2	21	図 29 扰乱層等からの採集遺物	35
図 15 土壙7	21	図 30 古代遺構全図	37

図31 1・2号住居址	38	図36 挖立柱建物2	42
図32 3・4号住居址	38	図37 挖立柱建物2(柱穴15)出土遺物	42
図33 3号住居址出土遺物	39	図38 柱穴25出土遺物	43
図34 4号住居址出土遺物	40	図39 遺構外採集遺物	44
図35 挖立柱建物1	41	図40 石錘	46

### 図版目次

図版1-1 南半部全景(東から)	11-2 白磁
1-2 北半部全景(東から)	11-3 青白磁
図版2-1 全景(西から)	11-4 黄釉
2-2 東南隅土丹版築面 (東から)	11-5 高麗青磁
図版3-1 南半部西壁際遺構検出状況 (北から)	図版12-1 涼美(窯)
3-2 北半部遺構検出状況 (東から)	12-2 同上(捏ね鉢)
12-3 山茶碗系捏ね鉢	
図版4-1 土壙2(西から)	図版13-1 常滑(窯)
4-2 土壙7(東から)	13-2 同上(窯)
4-3 土壙18(東から)	図版14-1 同上(捏ね鉢)
14-2 濑戸	
図版5-1 溝1(北から)	14-3 山茶碗
5-2 溝2(北から)	14-4 瓦質雜器、その他
図版6-1 井戸1(西から)	図版15-1 かわらけ(手捏ね成形)
6-2 井戸2十層断面図(西から)	15-2 同上(ロクロ成形)
6-3 井戸3(南から)	図版16-1 足瓶
図版7-1 青磁(図28-4)出土状況	16-2 板草履
7-2 かわらけ(図28-21) 出土状況	16-3 漆器類
7-3 漆椀(図28-24)出土状況	図版17-1 土師器坏
図版8-1 古代第3地点全景(西から)	17-2 同上壺
8-2 3・4号住居址(東から)	図版18-1 同上甕
図版9-1 挖立柱建物1(西から)	18-2 同上瓶足
9-2 堀立柱建物2(西から)	18-3 同上台付甕
図版10-1 青磁(蓮弁文・無文)	18-4 須恵器甕
10-2 同上(飼花文)	18-5 同上坏
図版11-1 同上(櫛描文)	18-6 上師器質土器坏
	18-7 灰釉陶器坏
	18-8 石錘

## 第一章 調査地点の位置と歴史的環境

小町一丁目116番地遺跡は、国鉄鎌倉駅の北方約100m、若宮大路の西方約140mにあり、「若宮大路周辺遺跡群」(県遺跡台帳番号242)の中央部やや北西よりに位置している。「中の下馬」があつたといわれる若宮大路二ノ鳥居の、ほぼ並びにある。

本地点周辺(鎌倉駅周辺)の発掘調査は、近年の都市開発に伴なって急激に増加しており、上たるものだけでも20箇所余りを数える。この付近が頼朝による鎌倉開府直後から開けていた場所であったのは言うまでもないが、これら発掘調査によって、中世以前にも人々の居住していたことが次第に明らかになってきた。その代表的な例が、本地点から約400m西南西にある御成小学校用地内の遺跡であって、ここでは中世の遺構の下から、奈良時代と平安時代の大規模な遺構群が検出されている。うち、奈良時代の遺構は、表に「橋五斗 天平正年七月十四日」、裏に「郷長丸子」<sup>1)</sup>と書かれた木簡が出土したことから鎌倉郡衙と推定される。また、平安時代にも五基の大型基壇が並んでおり、奈良・平安時代を通じて、御成小学校付近が、この辺りの中心であったことが判る。駅周辺は、御成小学校用地遺跡の前面(東)に当るが<sup>2)</sup>、御成町806-3番地地点・藏屋敷遺跡<sup>3)</sup>・千葉地東等の遺跡群から奈良・平安時代の堅穴住居社その他の遺構が検出されており、それ以外の多くの遺跡でも遺物は採集されているので、奈良・平安時代にこの付近に大規模な集落が拡がっていたことは間違いない。

中世に入ると、前述のようにこの付近が当初から開けていたことは確実であるが、当地点に直接係わる文献資料は見当らない。鎌倉時代には市内に商業地が設けられ、町屋の設置は規制されているので、これに含まれていない当地点は、まず誰または屋敷地の一部であろうかと思われるが、具体的な人名については、今のところ推定する手だてがない。僅かに『吾妻鏡』建仁元年(1201)二月十日条に、懐島權守(大庭親能)の跡の、若宮大路西類焼亡の記事が参考になる程度である。

### 註

- 1 1984・1985年に発掘調査。主任調査員河野眞知郎氏他の御教示による。
- 2 舟木秀雄他【御成町806-3番地地点】鎌倉考古学研究会調査研究報告第2集 1982年10月
- 3 服部実喜他【藏屋敷遺跡】鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査委員会 1984年2月
- 4 1984年に発掘調査。調査に当った服部実喜氏他の御教示による。

図1 飲食駅周辺の主な発掘点



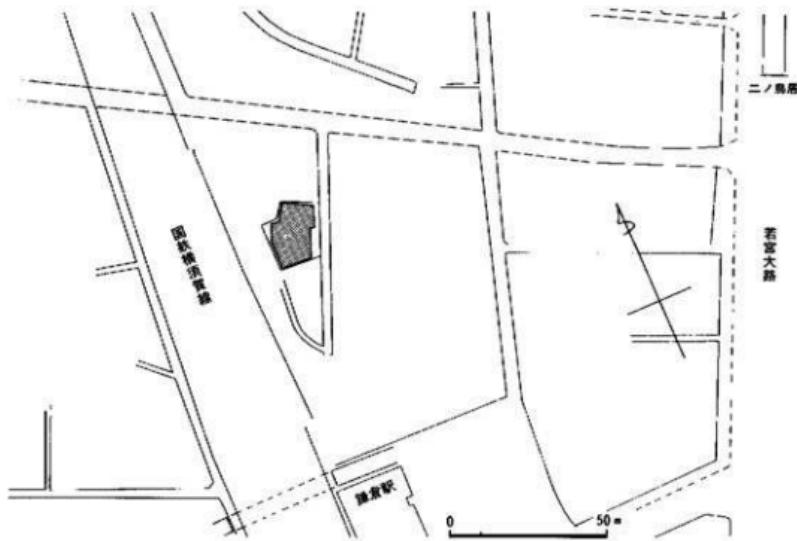


図2 調査地点の位置

図1 調査地点名

- |                          |                    |
|--------------------------|--------------------|
| 1. 小町一丁目116番地地点遺跡（調査地点）  | 11. 第2榎本ビル建設用地内遺跡  |
| 2. 千葉地遺跡                 | 12. 二ノ鳥居西遺跡        |
| 3. 御成町806-3所在遺跡          | 13. 小町二丁目345番2地点遺跡 |
| 4. 御成町11-2所在遺跡           | 14. 鎌倉郵便局用地内遺跡     |
| 5. 蔵屋敷東遺跡                | 15. 京急ビル建設用地内遺跡    |
| 6. 小町一丁目75番地1所在遺跡        | 16. 本覚寺遺跡          |
| 7. 伝藤内定員邸址（小町一丁目309番5地点） | 17. 乗訪東遺跡          |
| 8. 伝藤内定員邸址（中央公民館用地）      | 18. 「蔵屋敷東遺跡        |
| 9. 小町二丁目345番2地点遺跡        | 19. ドレメ学園建設用地内遺跡   |
| 10. 蔵屋敷遺跡                | 20. 御成小学校用地内遺跡     |

## 第二章 調査の概要

### 1. 調査方法

試掘調査によって、地表下約1.2m内外の深さまで近・現代の整地層が及んでいることが判明していたため、この深さまで重機で排土、以下は人力によった。調査対象面積は建築にかかる約230m<sup>2</sup>である。廃土は原則として場外搬出としたが、調査区中に約68m<sup>2</sup>の大きな擾乱層があったので、調査期間後半にはここをも廃土置場に充てた。

調査にあたっては、便宜上鶴岡八幡宮側を北と呼び、調査区外の北西に設けた任意の一点から東に向かって5m間隔で南北軸線を、南に向けて同じく5m間隔で東西軸線を配し、前者にはA～Dの、後者には1～6の呼称を付した。南北軸は若宮大路にはば平行させたため、正南北方位とは一致しない。軸方位N-33°E。各々の方眼区画の名称は、その北西角の軸交点による。

中世遺構の壁面精査中に、奈良・平安時代のものと思われる遺構が検出されたので、中世遺構の調査後、四箇所に任意の調査区を設けた。調査面積は約47.2m<sup>2</sup>である。

### 2. 調査経過

調査は5月13日から開始し、度々の雨と大量の湧水とで難波をきわめたが、7月1日をもって終了した。その間の経過については、以下に調査日誌の抜粋を記すこととする。

5月13日 曇り 機材搬入、仮設事務所設営。調査区中央東寄りから南域に至る大きな擾乱層から排土作業に入る。

5月17日 晴れ C・D-5付近から包含層を除き始める。

5月22日 晴れ B-3・4付近の包含層を除き始める。擾乱層全体を70cmほど掘削したが、さらに70cmほどの深さがあることが地中探査で判明し、土量の多さを考慮して以下の掘削を中止する。

5月23日 晴れ 遺構検出作業開始

5月30日 晴れ 遺構掘り上げ作業に入る。遠方方眼設置。

6月1日 晴れ C・D-5の土丹版築面の掘り下げ開始。

6月5日 晴れ C・D-2付近遺構検出作業。3・4-B・C付近遺構掘り上げ作業継続。

6月7日 晴れ B・C-3・4付近遺構掘り上げ作業継続。

6月11日 曇り 遺構掘り上げ作業継続。

6月15日 曇り 4軸上土層断面実測。C・D-5土丹版築面下の遺構検出作業。

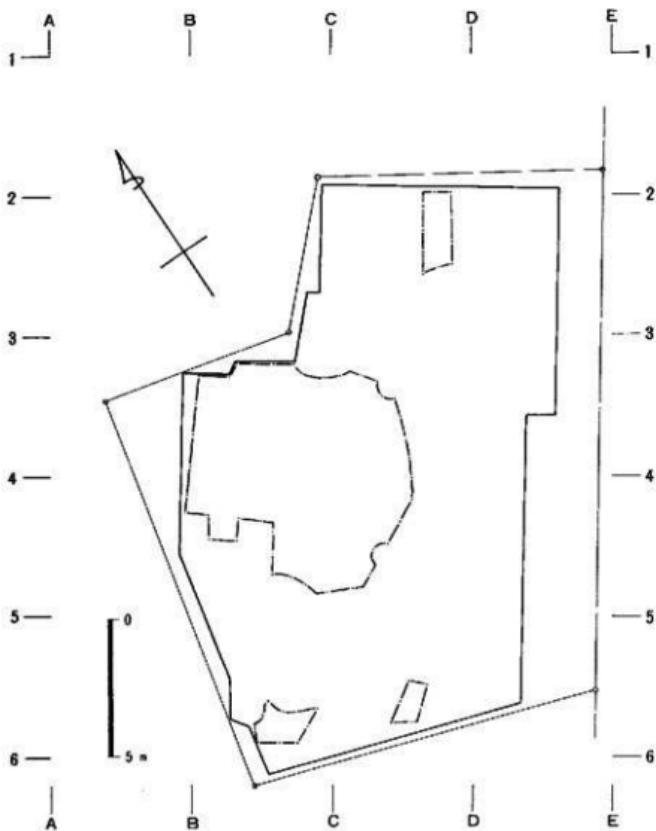


図3 調査区設定図(実線が中世、一点鎖線が古代)

6月21日 曇り時々雨 遺構掘り上げあらかた終了。調査区北側から平面実測開始。

6月24日 雨 平面実測。

6月26日 晴れ 全景写真撮影。終了後中世基盤層を掘り下げ、砂層上面で奈良・平安時代遺構を探査。

6月28日 雨 奈良・平安時代の遺構掘り上げ。

6月29日 曇りのち雨 奈良・平安時代の遺構掘り上げのかたわら平面実測。

6月30日 雨 平面実測。

7月1日 晴れ 全景写真撮影。午後機材撤収して調査を終える。

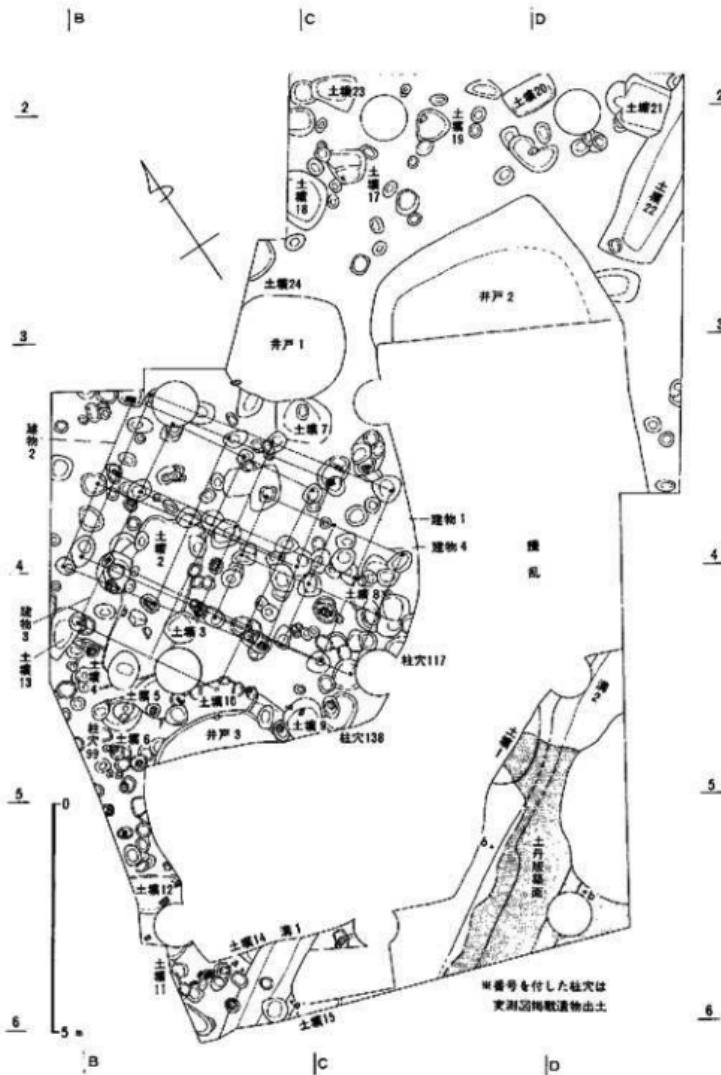


図4 中世遺構全図

## 第三章 発見された遺構と遺物

### 第1節 中世

#### 1. 遺構

地表下約1.2m前後にまで及んでいる近・現代の整地層を除くと、中世の包含層が現われる。この包含層は調査区南域で10~20cm、中央部や西寄りで5~10cm、北域で約5cm程の厚みがあり、中下部から北域は灰褐色砂質の單一層であるが、南域では上下二層に分層することができた。後者では上部包含層が灰褐色砂質上、下部包含層が暗褐色弱粘質上である。共に遺物片・炭化物等夾雜物を含む柔弱な土。

包含層を排除すると暗褐色粘質土上面に達する。中世の基盤層であるこの土は、鎌倉市街地平付を広く覆っており、遺物・炭化物等を殆んど含まず、きわめてしまりが強い。当地点では遺構もしくはこの層の上面から掘り込まれているが、人の往来による硬化などは明瞭には認められなかつた。遺構は大半がこの面上で確認されたため、新旧の判定は、平面上の切合関係に従つた。

調査区東南域では包含層下に破碎土丹（泥岩）の版築による整地層が認められたが、上面からは柱穴等の明瞭な遺構は検出できず、多数の遺構の切り込まれた中世基盤層上面とは様相を異にしてゐる。

遺構検出面の標高は、調査区北東隅付近で5.6~5.7m、中央部西寄の柱穴密集域で5.8~5.9m、南側で5.6m前後となっており、中央部西寄付近が他よりも20~30cm程高い。全体的には、約100m南方の藏屋敷跡第1調査区よりも50cm程度高い標高を示している。

当地点で検出した遺構は、掘立柱建物4棟を含む柱穴250口、溝2条、井戸3基、土塹24基である。掘立柱建物4棟はいずれも重複している。

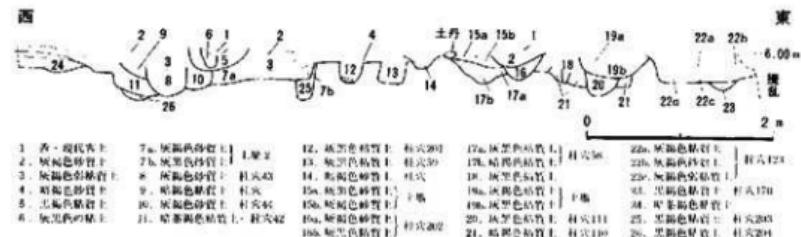


図5 土層断面図(4軸上)

### a. 挿立柱建物

#### 建物1(図6)

東西にさらに拡がる可能性はあるが、現状で $2 \times 2$ 間の建物である。B・C-3・4に位置している。4棟のなかでは、切合い関係からみて最も古い。

規模は桁行(東西)576cm、梁間(南北)390cm、柱間は各288cmと195cmである。これは尺寸では19.2尺(柱間9.6尺)と13尺(同6.5尺)となり、桁行がやや中途半端な数値を示すが、上部構造はおそらく19尺か20尺であろうと思われる。

柱穴平面形は不整円形で、径は40~70cmと一様ではない。底面の標高は5.30m~5.82mとこれも大きなばらつきがみられるが、梁間中央の棟通り列が、平均して深く掘られている。

9口の柱穴のうち2口に礎板が残る。

梁間方位N-58°-E。

#### 建物2(図7)

B-3・4にある $2 \times 2$ 間の建物。これも西側調査区外に延びている可能性がある。切合い関係からみて建物1に次いで古い。また土壇2より古い。

規模は桁行(東西)462cm(15.4尺)、梁間(南北)390cm(13尺)で、柱間は各231cm(7.7尺)と195cm(6.5尺)となり、ここでも桁行柱間が中途半端である。梁間柱間は建物1のそれに等しい。

柱穴径は44cmから60cmで、平面形は円乃至梢円である。検出面からの深さは大半10~20cm程度であるが南東隅の妻柱のみ35cmと深い。底面の標高は最も浅いものが5.85m、最深は南東隅妻柱で5.40mである。また断面形状も大半が皿状を呈するのに対し、南東隅の妻柱は逆台形の整った形状をしている。

9口のうち、北西・北東・南東隅の妻柱、南面棟持柱の4口に礎板が残っている。

梁間方位はN-58°-Eで、建物1と同じである。

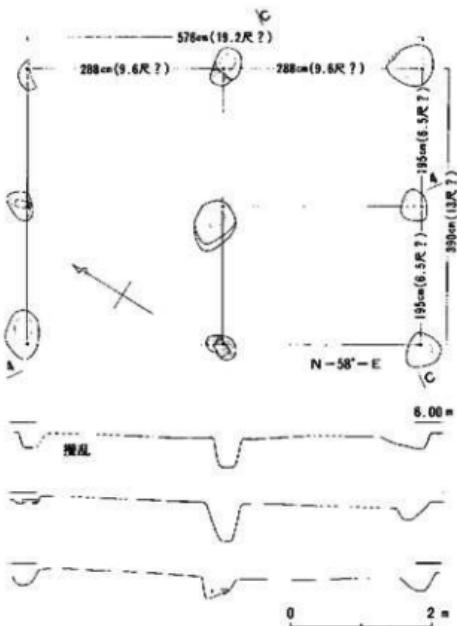


図6 建物1

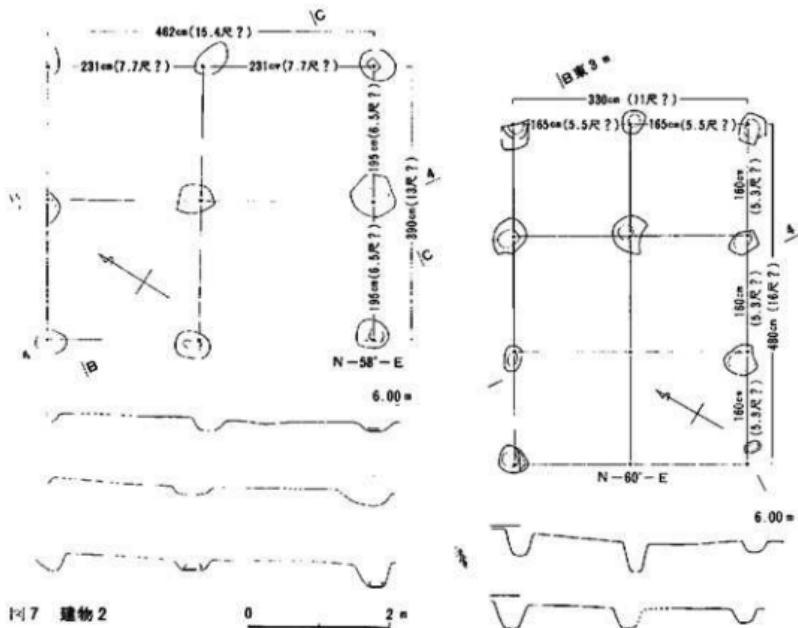


図7 建物2

0 2 m

### 建物3(図8)

B-3・4にある3×2間の建物。建物1・2より古しく、土壙2より古い。建物4との先後関係は、柱穴の切合がないため不明であるが、建物4の諸柱穴覆土には上層の砂質土塊が多く含まれているのに対し、該址柱穴覆土にはそれが余り認められないので、該址の方が古い可能性がある。

標特柱の南側2本の柱穴が土壙2に削り取られて消滅している。また南東隅の妻柱も土壙10のために消えているが、当該地点の約20cm北側に柱穴が認められるので、とりあえずこれを間に含めておいた。

規模は桁行(南北)480cm(16尺)、梁間330cm(11尺)、柱間は各160cm(5.3尺?)と165cm(5.5尺)である。

柱穴径は34cm~55cm、平面形は一様ではない。検出面からの深さは西側の側柱穴が40cm前後で、東側側柱列は20~25cm程、底面の標高は5.62m~5.36mである。断面形状は西側側柱列の柱穴が概ね底部のやや細くなった長方形を呈するのに対し、東側では正方形に近い形状を呈する。



図8 建物3

0 2 m

桁行方位N=60°—Eと、建物1・2、後述の同4に比べて2°程東に傾いている。

#### 建物4(図9)

2×2間の建物で、B・C—3・4に位置している。建物1・2より新しい。建物3との新旧は不明であるが、先述の如く、本址の方が新しい可能性がある。

規模は桁行(東西)348cm(11.6尺?)、梁間330cm(11尺)と、他の三棟に比べてふた回り程小さい。柱間は各174cm(5.8尺?)と165cm(5.5尺?)と、桁行が中途半端であることが判る。北側列柱の中央の穴が当該地点より10cm程西にずれており、本来のものではない可能性がある。

柱穴平面形は、多く他の遺構と切合って不明ではあるが、概ね不整の円形を呈する。直径は、位置のずれた北側列中央の一口が23cmと小さく、南東の妻柱が75cmで最大であり、他は50cm内外である。底面の標高は5.32~5.7m、確認面からの深さは15~50cmと大きな差がある。断面形状は直形と細長い逆台形状がある。

梁間方位N=58°—Eと、建物1・2と等しい。

#### b. 溝

##### 溝1(図10)

調査区南縁のやや西寄り、B—5に位置しており、南北に走っている。北側は擾乱層中で終結し、南側は調査区外に延びている。断面は両壁面中央部に浅い段を持つが、概ね逆台形の整った形状をしており、幅は上端が1m前後、下端が40~50cm、確認面からの深さ約70cmである。

底面の標高は、北端の擾乱層際が5.01m、調査区南壁際が4.93mと、北から南に向かって流れている。

主軸方位はN=60°—Eで、これは先述の掘立柱建物、後述の溝2のそれとはほぼ等しい。また、本址の主軸を延長すると土壇22の中心軸に重なる。

覆土は黒褐~灰褐色の粘質土で、土丹塗や遺物等夾雜物をあまり含まない。

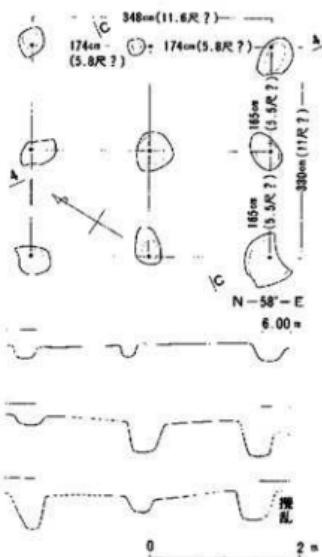


図9 建物4



図10 溝1・2断面

## 図2 (図10)

周在東南角近く、C・D 4・5にあり、両端は調査区外に延びている。上層の土丹版塗面を除いた、中世基盤層上面で検出した。

幅は、擾乱層等に東側を削り取られてやや不明瞭であるが、上端で150cm前後、下端で45~60cm程度である。断面形状は丸味のある逆台形を呈する。確認面からの深さは50cm前後、底面の標高は北壁付近で5.15m、南壁際で5.04mと、これも溝1同様北から南に向かって水が流れている。

中心軸の方位はN-60°-Eで、掘立柱建物群溝1・土壙22等と等しい。

沟上は暗褐色~暗青灰色粘質上で、木片が多く含む。出土遺物には、渥美甌口縁部1点がある他は少なかった。

## c. 井戸

### 井戸1 (図11・図版6)

C軸と3軸の交点付近にあり、西側の一部は調査区外に伸びている。約1m程掘り下げたところで、漏水による壁体の崩落が激しく、危険な状態となつたため、以下の掘削をあらめた。土壙7と切合つが、本址の方が古い。

南北に比べ東西のやや長い隅丸方形、または稍円形に近い平面形を呈する。直径は南北230cm、東西260cm以上を測り、深さは地中探査によれば確認面からは2m以上ある。壁面は切立つておらず、断面形状はほぼ箱型である。

井戸枠が検出されなかつたため、正確な主軸方位は不明であるが、北辺から想定すると短軸はN-50~55°-E程度であろうと思われる。覆土は最上層に暗褐色粘質の、遺物を多量に含む土が30~40cmの厚さで堆積しており、以下は青灰色の、木片を多く含む砂質土である。

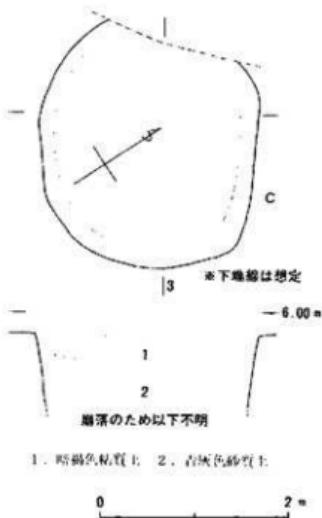


図11 井戸1

### 井戸2 (図12・図版6)

調査区北域、C・D 2にあり、南半は擾乱層によって破壊されている。この井戸も、上層断面実測の後東半の崩落が激しくなり、全掘不可能となった。出土遺物にやや後代の要素が認められるので、隣り合う土壙22、井戸1等より若干後代のものではないかと推察される。

規模は東西5.40m、南北3m以上と非常に大型で、深さは確認面から130cm程度である。平面形は北側の突出した隅丸方形を呈する。

底面に段状部が認められ、覆土の観察から、濱存はしていないものの、これが井戸枠を取めた痕跡であろうと思われた。この段状部は高差約20cm、平面形は西側が不明ではあるが、弧状を呈し、

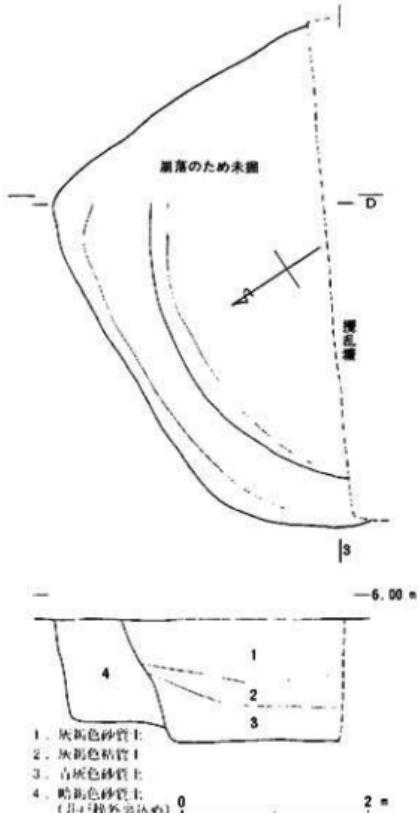


図12 井戸2

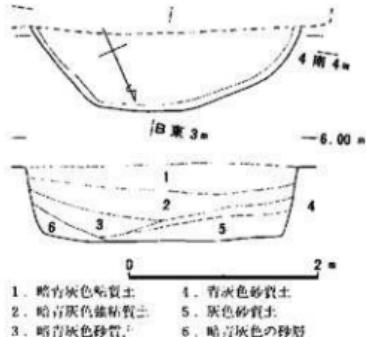


図13 井戸3

径(または一辺)4m近いものが想定できる。

方位は現代の磁北にはほぼ平行している。

覆土は、井戸枠内と思われる現状部の内側で灰褐色～青灰色の砂質上、井戸枠外の裏込めと思われるものが暗褐色砂質土である。

#### 井戸3(図13・図版6)

B-4にあり、これも南半部を擾乱層によって削り取られている。土塊10と切り合うが本体の方が古い。

規模は東西が現状で2.88m、実際は3m程度に及ぶものと思われる。平面形は円形を呈しよう。深さは確認面から80cmで、平坦な底面を有し、壁面は切立って、断面形は全体として箱形に近い。

この井戸からも井戸枠は検出されていない。

覆土は暗青灰色～青灰色の、主として砂質のもので、木片を多く含む。また、井戸上部には鎌倉石(角礫凝灰岩)切石、半人頭大土丹塊を多く含む土が、おそらく廃棄の際に、投げ込まれている。主軸方位は不明。

#### d. 土壌

検出した24基のうち、特徴的なものを詳述する。それ以外のものについては、表1を参照されたい。

#### 土壤2(図14・図版4)

B - 3・4にある浅い土壌。建物1・  
3・上壌3と重複しているが、建物  
1・2よりは新しく、同3・下壌3より  
古い。

南西隅と北東隅のやや突出した、四隅  
丸い平行四辺形に近い平面形をしてい  
る。長辺(南北)350cm、短辺153cm、底  
面は平坦で、確認面からの深さは25  
cm程度である。

土上は灰褐色砂質土で、青磁・かわら  
等を含む。

主軸方位はN-50°-E位である。性格不明。

#### 土壌7(図15・図版4)

B - 3 東寄りにある。井戸1と建物1と切合うが本址の方が新しい。

東西方向に長軸を持つ円形を呈する。長径130cm、短径100cm、確認面からの深さ約30cmを測り、  
平面形はやや深めの皿状、又は逆台形に近い。

土上は灰褐色砂質土で、炭化物をやや多く含む。

主軸方位N-46°-W(短軸方位N-44°-E)。性格は不明。

#### 土壌18(図16・図版4)

B - 2 東辺に位置している。西側は調査区外にあるため、全容は不明ながら、平面形は円形を構  
成すると思われる。短辺(南北)113cm、長径は現状で120cm、確認面からの深さ約30cmを測り、  
平面形は逆台形である。

土上は灰褐色砂質で、木片・炭化物等をやや多く含んでいる。

短軸方位N-69°-E。性格は不明ながら、先述の上壌7と似た様相を持っている。

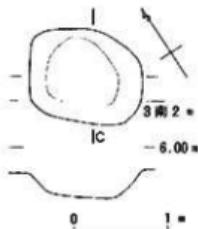


図15 土壌7

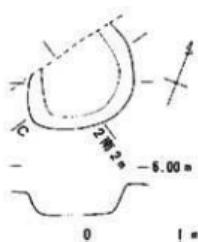


図16 土壌18

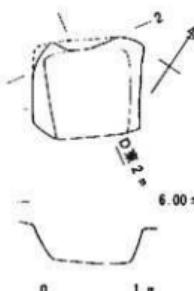


図17 土壌21

### 土壤21(図17)

調査区北東隅D-2にある方形土壌。土壌22と重複しているが、覆土に差異を見出せず、新旧を把むことはできなかった。或いは土壌22と一連の遺構である可能性がある。西側を柱穴196に、西南角を197に切られている。南北(短軸)114cm、東西は現状で106cm、確認面からの深さ約40cm程度である。断面形は整った逆台形を呈する。

覆土は青灰色粘質土で、夾雜物は少ない。

長軸方位N $40^{\circ}$ W(短軸方位N $50^{\circ}$ E)。

### 土壤22(図18)

調査区北東隅、D-2にあり、北側は調査区外にある。全容は不明ながら、現況では舟底形に近い。先述の通り(溝1の項)、溝1の主軸の延長上に本址の主軸があり、呼応する位置にあるので本址は土壌ではなく溝である可能性がある。土壌21との先後関係は不明である。幅約150cm、長さは不明。確認面からの深さ75~80cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

覆土は概ね青灰色に漂白されているが、下部に

植物繊維の腐蝕したような、明褐色の柔弱な土が堆積している。

長軸方位N $60^{\circ}$ E。

表1 土壌一覧

土壤No.	地区(Grid)	形状	(cm) 長さ×幅×深さ	軸方位	覆土	重複関係
1	C-4	椭円? (不明)	不 明	南北?	青灰色粘質土	殆ど擾乱に切られる
2	B-3,4	長方形	350×153×25 (70×70)	N-50°-E	灰褐色砂質土 上層:暗褐色(二合土層) 下層:暗褐色砂質土	P-26・27を切る。 P-31に切られる
3	B-4	円 形	72×66×46	(N-50°-E)		D-2を切る
4	B-4	長方形	106(?)×80×13	(N 20°-E)	暗褐色土 地山小塊混入	D-2, P-48, P-39, P-40を切る
5	B-4	方 形	95×80(?)×16	(N 40°-W)	上:暗灰褐色土 下:明褐色砂質土	D-2, D-6, P-49に切ら れ, P-46を切る
6	B-4	不定形	90×75×20	N 70°-E	灰褐色粘質土	D-5を切る
7	B-3	不整形	130×100×30	N-46°-W	灰褐色砂質土	P-83と切り合う
8	C-4	円 形	90×90×20	N 90°-E	黄褐色砂	P-119・120・122を切る
9	B-4	円 形	100×90×40	N-10°-W?	暗灰褐色砂質土	不 明
10	B-4	長方形?	100×70×50	N 50°-W	"	P-139を切る

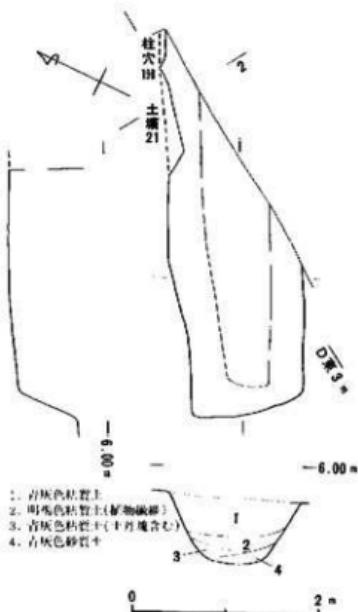


図18 土壌22

順 番 号	高さ (cm)	形 状	(cm) 長さ×幅×深さ	軸 方 位	覆 土	重複関係
11	B 5	横円?	100×?×12	N-20°-W	暗茶褐色土	P-151-149を切り、P-150は切られる
12	B 5	長方形	100×85×25?	N-85-E (東側)	明褐色砂質土	D-13を切る
13	B 5	不明	不明	不明	黒褐色土	D-12に切られる
14	B 5	円形?	?×?×25	不明	黒褐色土	溝と切り合が不明 (殆ど調査区外)
15	C 5	横円?	120×?×?	不明	暗茶褐色粘質土	(半分以上調査区外)
16	B-5	横円	115×104×34	N-85°-W	青灰褐色粘質土	無し
17	C-2	隅丸方形	80×75×18	N-35°-W	灰褐色粘質土	P-181と切り合が不明
18	B-2	内折円	120×113×30	N-21°-W	灰褐色砂質土	無し
19	C 2	隅丸三角形	80×65×20	N-20°-E	茶褐色粘質土	P-184を切る
20	C-2	長方形	120×70×20	N-60°-E	不明	無し
21	D 2	方 形	114×106×40	N-40°-W	青灰色粘質土	D-22と切り合が不明 P-196-197は切られる
22	D-2	舟底形?	?×150×80	N-60°-E	青灰色粘質土 明褐色砂質土	D-21-22, P-198と切り合が不明
23	C 2	方 形	100×70×18	N 80° W	不明	P-100と切り合が不明
24	B-2	不明 (方形?)	不明	不明	不明	半分以上調査区外

### e. 士丹版築面

川佐区南東溝、溝2の上面辺りで検出した。拳大~半人頭大の破碎士丹(泥岩)を突き固めて構成されている。厚さ15~20cm程度である。上面の標高は6m内外である。上面に多少の凹凸は確認されだが、柱穴等、明瞭に遺構と認められるものはなかった。

東辺の方方位はN-60°-E前後で、これは建物・溝等の他の遺構群と変わらない。

## 2. 遺物

包含層が薄く、井戸・溝等にも遺物は多く含まれていなかったため、遺物の出土量は總体に少なかった。

遺物の分類は層位と遺構別に依ったが、いずれも一括して投棄されたような状況ではなく、散発的な出土であった。そのせいか、其伴関係にやや混乱があるように思われる。

### a. 柱穴99出土遺物(図19)

二点の手探ねかわらけがある。

1 口径12.8cmの大型品。器高3.3cm。強いくびれが、体部下半を半周している。粘土は淡褐色で白色針状物質を含む。焼成良好で堅く締っている。2一口径8.4cm、器高2cmの小型品。外底面中央

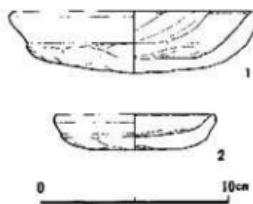


図19 柱穴99出土遺物

部に指頭による環状の凹みがある。胎土は黄褐色で粉っぽく、白色針状物質を多く含む。焼成良好。

b. 柱穴117出土遺物 (図20)

足駄一点が出土した。長さ24.8cm、幅10cm、高さ4.5cm。齒は削り出しによる。材質は、詳細は汚損がひどく不明ではあるが、針葉樹が用いられている。

c. 柱穴138出土遺物 (図21)

二点の常滑（捏ね鉢）と、一点のいわゆる山茶碗窯系の捏ね鉢が出た。いずれも口縁部片。

常滑捏ね鉢（1・2）

1一捏ね鉢口縁～体部上半片。口縁端部中央に凹帯が形成され、外縁が斜め上方に強くつまみ出

される。胎土は、表面で酸化して暗褐色を呈するが、胎芯では灰黒色に焼け、きめが粗く、長石粒子を多く含む。焼成良好。2一片口を持つ捏ね鉢口縁部。角型の端部で、外縁が強くつまみ出される。胎土は概ね灰黒色を呈し、外面は酸化して暗褐色になっている。きめ粗く、岩石質に焼き上る。焼成良好。

山茶碗窯系捏ね鉢（3）

外面の口縁直下に浅い凹帯が廻る。胎土は灰色で粗く、気孔・砂粒等を多く含む。焼成良好。

d. その他の柱穴出土遺物 (図22)

青磁（1～3）

三点とも同安窯系に属する。

1一瓶体部下半片。釉薬は淡灰緑色透明、素地は灰色を呈し、気孔を含むが堅緻である。焼成良好。柱穴52出土。2一皿体部片。復元径11.4cm。釉薬は淡青灰色ではば透明。器壁中位で内外とも1mm近い厚みがある。素地は灰白色で堅緻である。焼成良好。口縁端部に熔着痕か気泡のはぜたら

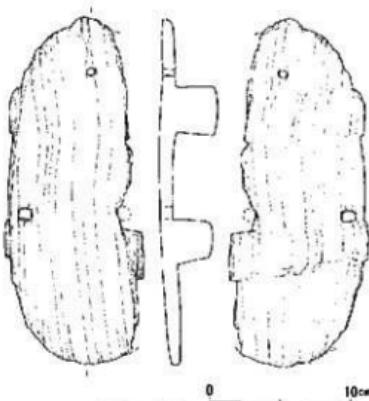


図20 柱穴117出土遺物

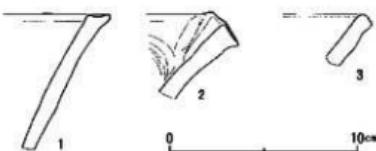


図21 柱穴138出土遺物

1 1・釉薬の剥落がみられる。柱穴141出土。3 皿体部-底部片。復元径10.8cm、同底径5cm。釉薬灰緑色透明。素地は灰白色で、微気孔を散見するが堅緻である。焼成良好。柱穴129出土。

#### 白磁(4・5)

4 玉縁鏡口縁部。やや尖り気味の端部を持つ。釉薬はやや灰味がかるが透明。素地は灰白色で平滑である。焼成良好。柱穴30から出土。5 皿底部片。復元底径4cm。内底面に片切形りによる2様を有する。外底面はヘラで釉薬を拭い取って露胎させている。釉薬は若干白濁する。素地は灰白色で堅緻。焼成良好。柱穴75より出土。

#### 常滑(6)

6 盤口縁部片。胎土は灰色で、気孔・大粒の砂粒等を含み、流紋が観察できる。内面は暗灰褐色、外面は黒色に近い色調を呈する。内面には、降灰の白斑がみられる。焼成良好。柱穴97出土。

#### 山茶碗(7)

7 底部片。低い、押しつぶされたような高台を持つ。胎土は砂質で、灰色を呈する。焼成良好。高台付に粗穀痕を残す。柱穴191出土。

#### 渥美(8・9)

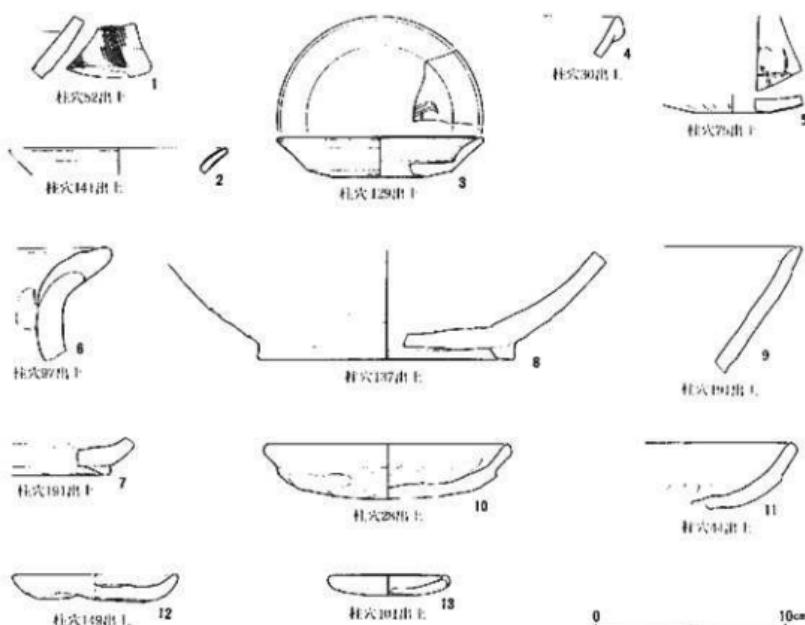


図22 その他の柱穴出土遺物

二点とも捏ね鉢。

8 一体部下半～底部片。復元高台径13.6cm。胎土は暗灰色で、やや砂っぽく、長石・砂粒を含む。焼成良好。柱穴137出土。9 一口縁～体部片。口縁端部はやや外側につまみ出され、若干尖り気味。胎土は灰色で砂質。砂礫を含む。焼成良好。柱穴191出土。

かわらけ (10～12)

三点のうち10・11は手捏ね、12がロクロによる成形である。

10一口径12.7cm、器高2.9cm。器壁上半部に強いナデが与えられ、体部中位に明瞭な段、またはくびれを有する。胎土は淡褐色で、白色針状物質を含む。焼成良好。柱穴28出土。11—これも体部上半に強いナデがみられる。胎土は、胎芯で灰色、器表で明褐色を呈し、白色針状物質を稀にしか含まない。焼成きわめて良好。柱穴44出土。以上二点はいずれも大型のもの。

12—ロクロ成形による小型のもの。二次焼成を受けて黒っぽく変色し、大きく変形している。口径8.7cm、器高1.5cm。胎土には白色針状物質が多くみられる。柱穴149出土。

白かわらけ (13)

いわゆる縁折れ形の小皿。復元口径6cm。器高1.1cm。胎土は、胎芯の一部で灰黒色を呈する他は肌色～黄白色で、きわめて精緻であり、白色針状物質を全く含まない。縁部は、円錐状の底部に胎土紐を貼り着けて形成される。焼成良好。柱穴101出土。

e. 溝2出土遺物 (図23-11)

11—縁美甕口縁部片。端部に強いナデを施して薄手に仕上げている。胎土は胎芯で黄白色。器表近くで灰色を呈し、非常にしまりが良く、流紋が観察できる。内面には黒～暗灰緑色の釉薬が塗られている。焼成良好。

f. 上塙1出土遺物 (図23-1・2)

端反と口元の、二点の白磁がある。

1—縁反碗口縁部。釉薬は白濁して、やや灰味を帯びる。素地は灰色がかった白色で、気孔が多くみられるが、堅く焼き締っている。焼成良好。2—口元皿、または碗の口縁一体部片。釉薬は多少白濁して灰色がかっている。外面に右上から左下へ、内面に左上から右下に走る貫人が認められる。素地は灰白色で結晶状。焼成良好。

g. 上塙2出土遺物 (図23-3～7)

青磁・瀬戸各一点とかわらけ二点を示す。

1—青磁縁連弁文碗口縁～体部上半片。復元口径16.4cm。幅広の連弁文を持ち、口縁部は僅かに外反する。釉薬は暗青緑色で半ば失透。素地は灰色、粘りが強く繰りが良い。焼成良好。内外面の一部に油煤らしき黒色の付着物がある。

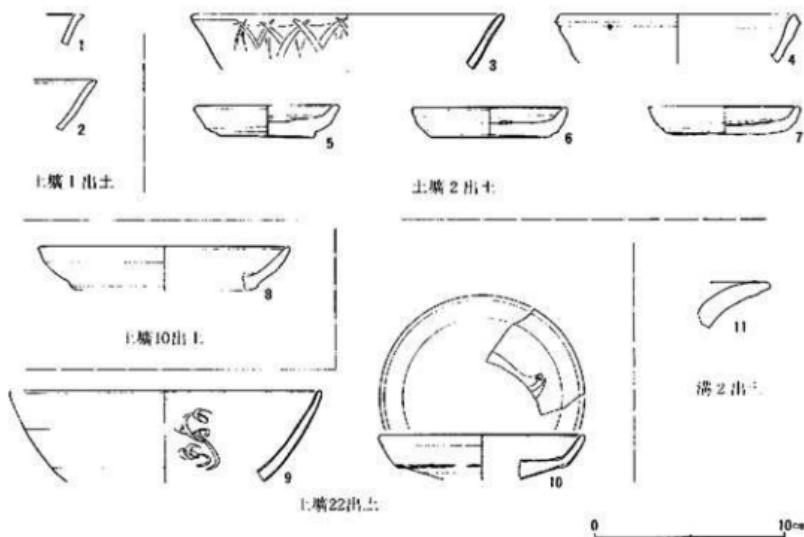


図23 土壙・溝出土遺物

4—海戸鉢直体部片。復元口徑12.4cm。口縁部に微かな花線が残り、端部は尖り気味。釉薬は灰白色できわめて薄く、刷毛塗りされているが殆ど剥落している。胎土は灰色で岩石質に焼け、やや気孔を多く含む。焼成良好。

5・6・7—ロクロ成型の小型かわらけ。5は口徑7.5cm、淡黄褐色の胎土で、体部下半で屈曲する器壁を持つものに対し、6・7はいずれも口徑8cm、淡褐色で砂質の胎土を持ち、斜め上方に伸びる貧弱な器壁を持つ。

#### h. 土壙10出土遺物 (図23—8)

8—ロクロ成型のかわらけ。復元口徑13.1cm、同底径9.5cm、器高2.3cm。浅くて器高の低い皿形を呈する。器壁は体部中位でやや内凹し、薄手の造りの口縁部を持つ。胎土は茶褐色で薄く、内外器表面のほぼ全面に剥落が認められる。白色針状物質が多く含まれる。焼成は普通。

#### i. 土壙22出土遺物 (図23—9・10)

二点はいずれも龍泉窯系割花文青磁。

9—碗口縁一体部下半片。内面にいわゆる飛雲文を持つ。復元口徑16.4cm。釉薬は淡灰緑色で気泡は若干見られるが、透明度は高い。素地は灰色で堅緻である。焼成良好。2—皿口縁～底部片。

復元口径10.8cm。内底面に片切形の文様の一部が窺える。釉薬は青緑色で、気泡を含むが透明。素地は灰白色で、きめ細かで堅硬である。焼成良好。体部下半の、器壁屈曲部に熔着を剥がしたらしい痕跡がある。

#### j. 井戸1出土遺物 (図24)

常滑・かわらけ・板草履芯がある。

##### 常滑 (1~3)

1 - 齋口縁部片。端部が細くつまみ出される。胎土は灰黒色を呈し、長石・砂粒を含み、流紋の観察できる粗いもの。内面に褐色の、外面に灰緑色の降灰が見られる。焼成良好。2 - これも齋口縁部片。端部上縁に凸帯が付く。胎土はきめが粗く岩石質で、長石・砂粒を多く含む。内面に淡緑色の降灰が見られる。焼成良好。3 - 齋口縁~頸部片。端部上縁に断面角型の凸帯が付く。胎土は灰色できめ粗く、砂粒等夾雜物を含む。表面は酸化現象で褐色を呈する。焼成良好。

##### かわらけ (4・5)

4 - ロクロ成形の小型。口径8.4cm、底径6.7cm、器高1.7cm。やや外反する器壁で、丸味ある口縁端部を有する。焼成良好で明褐色を呈する。5 - 手捏ね成形の大型。復元口径12.5cm。尖り気味の口縁端部を持ち、器壁の方が底部に比べて厚い。体部下半の棱は明瞭ではない。焼成良好。暗褐色を呈する。

##### 板草履芯 (6)

長さ36cm、幅9.2cm、厚さ2.5mm前後。ほぼ長楕円形を呈する。表面にはわらの圧痕を明確に留める。

#### k. 井戸2出土遺物 (図25)

青白磁・常滑・瀬戸がある。

##### 青白磁 (1)

全形は不明であるが器台の一種であろう。円盤状粘土板の両面に、釉薬の熔着によって円筒を貼り付けている。上側の円筒径(基部)6.3cm、下側円筒径(上端)7.4cm。釉薬は淡水青色で、気泡が多いが透明度は高い。素地は白色に近く、結晶状の割れ口を見せる。焼成良好。

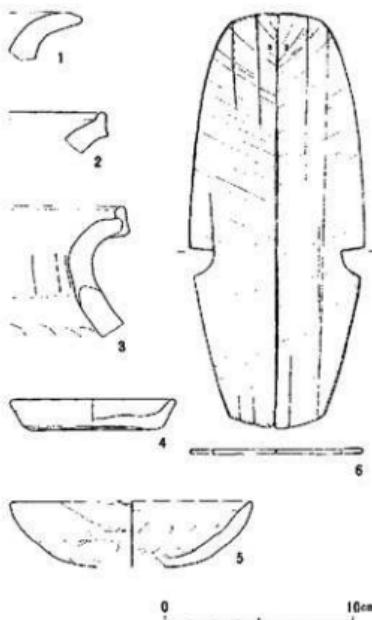


図24 井戸1出土遺物

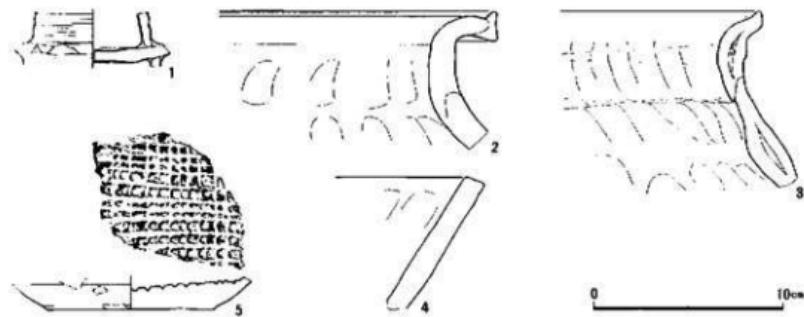


図25 井戸2出土遺物

#### 常滑（2～4）

2 - 齊口縁～頸部片。横に折れた口縁の端部に、やや上下に引き伸ばした縁唇が付く。器表・胎土とも淡灰褐色を呈する。岩石質に焼き上っている。中・上層から出土。3 - 齊口縁～肩部片。端部が僅かに上方を向く。胎土は灰色で、岩石質に焼き上っているが、気孔による大きな割離がある。引部外器表に降灰が顯著。中・上層から出土。4 - 條ね鉢口縁～体部片。片口部分の端が僅かに窪える。胎土は赤褐色で長石等の大粒粒子を多く含み、さめが粗い。焼成やや不良。これも中・上層から出土。

#### 瀬戸（5）

卸し皿底部片。復元底径8.9cm。底部は糸切り。釉薬は灰緑色透明。胎土は灰白色できめが細かい。焼成良好。中・上層から出土。

### 1. 井戸3出土遺物（図26）

#### 青磁（1）

刻花文碗口縁～体部上半片。復元口径16.8cm。内面に区画の界線が見られる。素地は白色に近くややきめが粗い。釉薬は黄ばんだ灰緑色で、透明度は高い。焼成やや不良。

#### 高麗青磁（2）

草花文の袋物体部片。黒土を葉と茎の部分に、白土を花または果実の部分に、象嵌している。釉薬は暗青緑色で、少し渋っている。素地は灰色で粘りが強く、夾雜物は少ない。焼成良好。

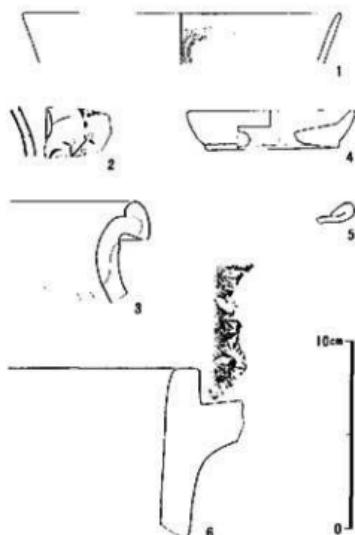


図26 井戸3出土遺物

### 常滑（3）

甕口縁～頸部片。口縁端部に丸い縫合跡が付く。胎土は灰色を呈し、夾雜物を多く含み、流紋が観察できる。口縁部上側に灰緑色の降灰がかかる。器表は酸化現象で暗褐色に焼けている。焼成良好。

### かわらけ（4）

ロクロ成形による小型品。底部が穿孔されている。口径8.8cm、底径7cm、器高2cm。孔径2.4cm（短径）～3.2cm（長径）。器壁は斜め上方に楔状に伸び、丸い端部を有する。胎土は赤褐色できめが粗く、やや砂質。焼成良好。

### 土鍋（5）

いわゆる伊勢系と呼ばれるものの口縁部片。端部を内側に折り込んでいる。胎土はきめ粗く、長石等を多く含むがしまりは良く、胎芯で灰黒色を、器表近くで黄白色を呈する。焼成良好。

### 手焼り（6）

口縁～体部片。鋲が付く。鋲の上面には丸い菊花の押印がある。胎土は瓦質で、夾雜物を多く含み、きめが粗く、灰白色を呈する。器表は黒～灰黒色にいぶされている。焼成良好。

## m. 上部包含層出土遺物（図28）

### 青磁（1～7）

1 鎬蓮弁文碗口縁～体部上半片。復元口径16.1cm。蓮弁は幅広で明瞭な稜は認められない。釉薬は灰緑色透明。素地は灰色で粘性強い。焼成は普通。2一鋤蓮弁文碗口縁～体部上半片。復元口径16cm。口縁端部に熔着痕がある。釉薬は淡青緑色半透明。素地は灰白色で堅敏である。焼成良好。

3 鎬蓮弁文碗口縁～体部下半片。復元口径12cm。鋤の棱線が明瞭に判る。釉薬は灰緑色で半透明。素地は灰色でやや岩石質。焼成良好。4一碗底部片。復元底径4.1cm。内底面中央部が窪む。釉薬は青灰色で失透状態。表面が二次焼成で荒れている。素地は灰色で岩石質、夾雜物は少ない。高台疊付は露胎。焼成良好。5一台形高台の碗底部。底径5.5cm。釉薬は暗青灰色で、貫入多く、失透している。素地は黄褐色で夾雜物少なく、岩石質を呈する。高台疊付から内側は露胎。焼成にややむらがある。6 これもがっしりとした幅広の高台部分。内底西中央部に「金玉満堂」の押印がある。復元底径5.8cm。釉薬は灰緑色半透明。素地は灰黒色と灰白色の二層に分れ、ややきめが粗く、岩石質に焼けている。高台疊付以内は無釉。焼成は普通。7一無文碗体部下半～底部。釉薬は灰緑色半透明。素地は灰色できめが細かい。これも高台部分無釉。焼成は良好。

### 黄釉（8）

鉄絵盤口縁～体部下半片。内面下半に草文の一部が見えている。口縁端部には熔着痕が残る。釉薬は黄緑色で失透。口縁部と外面下半は露胎。胎土は灰色で流紋が観察でき、白・褐色の粒子を多く含み、粘性が強い。焼成良好。

### 渥美（9）

甕口縁部片。口縁端部上側に浅い沈穂が残っている。胎土は灰色で砂質、気孔を多く含みきめが

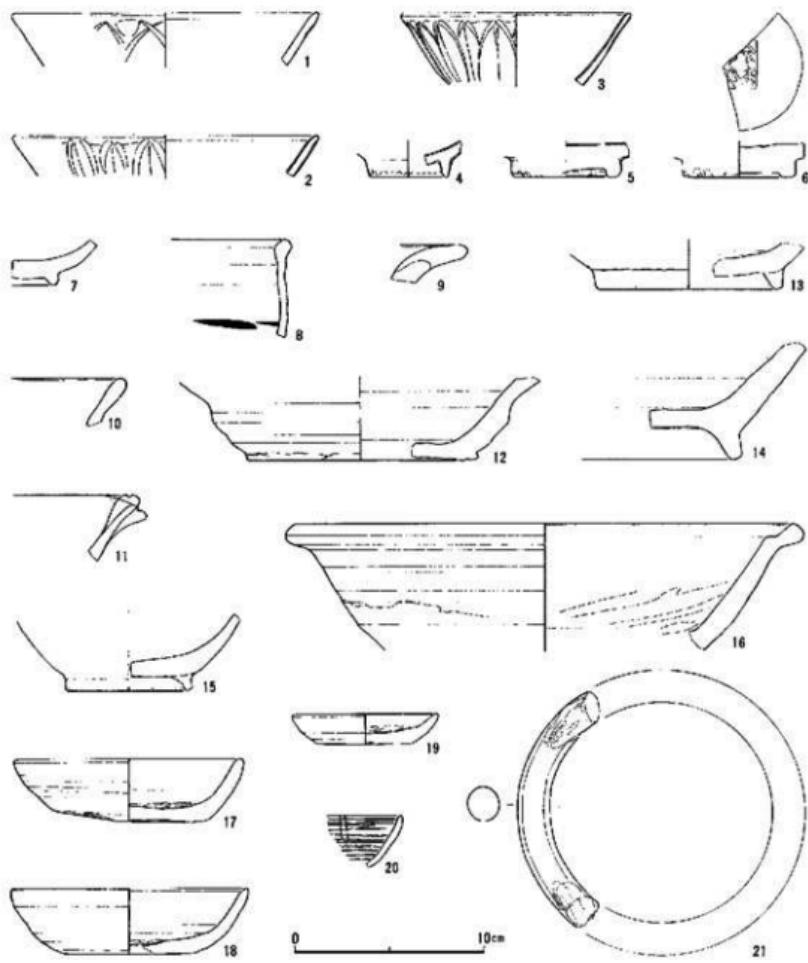


図27 上部包含層出土遺物

粗い。胎葉は灰黒～灰褐色を呈する。焼成良好。

山茶碗窯系捏ね鉢 (10~14)

10一口縁部片。やや肥厚する。胎土はきめが粗く、夾雜物を多く含み、灰黑色を呈する。焼成良好。11一片口を持つ口縁部片。やや肥厚し、端部に沈線が廻る。胎土は岩石質で、灰色を呈する。焼成やや不良。12一底部片。高台は見られない。体部下半にくびれを有する。底径12.2cm。胎土は

灰色で夾雜物を多く含み、岩石質に焼き上っている。外底面にはスノコのようなものの圧痕が残る。焼成は普通。13—底部片。底径9.7cm。脛付いちめんに熔着痕を残す。胎土は灰色で岩石質であるがきめは細かい。焼成良好。14—体部下半～底部片。高台は薄く、外傾している。胎土は大粒の砂礫を含み、灰色で、きめが非常に粗く、砂質である。焼成良好。

#### 山茶碗（15）

体部中位～底部片。底径6.8cm。高台内に糸切痕を残し、断面三角形の高台を持つ。胎土は灰色で、火雜物は見られるがきめ細かい。焼成良好。

#### 瀬戸（16）

折縁皿口縁～体部。復元口径26.4cm。口縁部はやや肥厚し、端部は丸い。淡灰綠色透明の灰釉が刷毛塗りされている。胎土は灰色で夾雜物は見られず、きめが細かい。焼成良好。

#### かわらけ（17～19）

三点いずれもロクロ成型のもの。

17—口径12cm、底径8cm、器高3.4cmの大型のもの。器壁は底部からなだらかに立上り、やや内側して丸味ある口縁端部にいたる。胎土は明褐色で砂質。焼成良好。18—口径12.8cm、底径7cm、器高3.4cmの大型品。器壁は薄手で内側し、尖り気味の口縁端部を持つ。胎土は明褐色で多少柔かく、気孔を多く含む。焼成良好。19—口径7.6cm、底径5cm、器高1.6cmの小型品。器壁は浅い角度で立上り、体部中位で上方に僅かに屈曲する。胎土は黄褐色を呈する。焼成良好。

#### 瓦器（20）

内面に横位の暗文と縁の界線を持つ。器表は灰黒色を呈し、胎土は灰白色のさわめて精緻なもの。焼成良好。

#### 不明瓦質製品（21）

おそらく環状で、脚のいくつか付いた、五徳のようなものであろう。径1.7cm、復元した環の（外径）15.2cm。遺存部分の二箇所に、脚部らしい接着痕が認められる。表面は灰白～灰色、胎土は灰白色で、微気泡を多く含む。焼成良好。

### Ⅳ. 下部包含層出土遺物（図28）

#### 青磁（1～7）

このうち1～5が龍泉窯系割花文、6・7が同安窯系のものである。

1—碗口縁～体部中位片。復元口径15.9cm。釉薬は灰綠色透明。素地は灰色できめ細かく、粘性がやや強い。焼成良好。2—碗体部下半片。釉薬は灰綠色透明。素地は灰色で、岩石質に近い。焼成良好。3—碗底部片。底径6.1cm。釉薬は淡灰青色で、気泡多くやや渋っている。素地は灰黒色に近い色調で岩石質に焼けている。焼成良好。4—飛雲文の碗。口径15.8cm、底径6cm、器高7.2cm。高台は薄手で、やや貧弱である。釉薬は灰綠色で、溶けきっていないためか、失透している。素地は灰白色できめが細かく、粘りが強い。焼成やや不良。5—飛雲文の碗体部下半～高台。底径6.4cm。

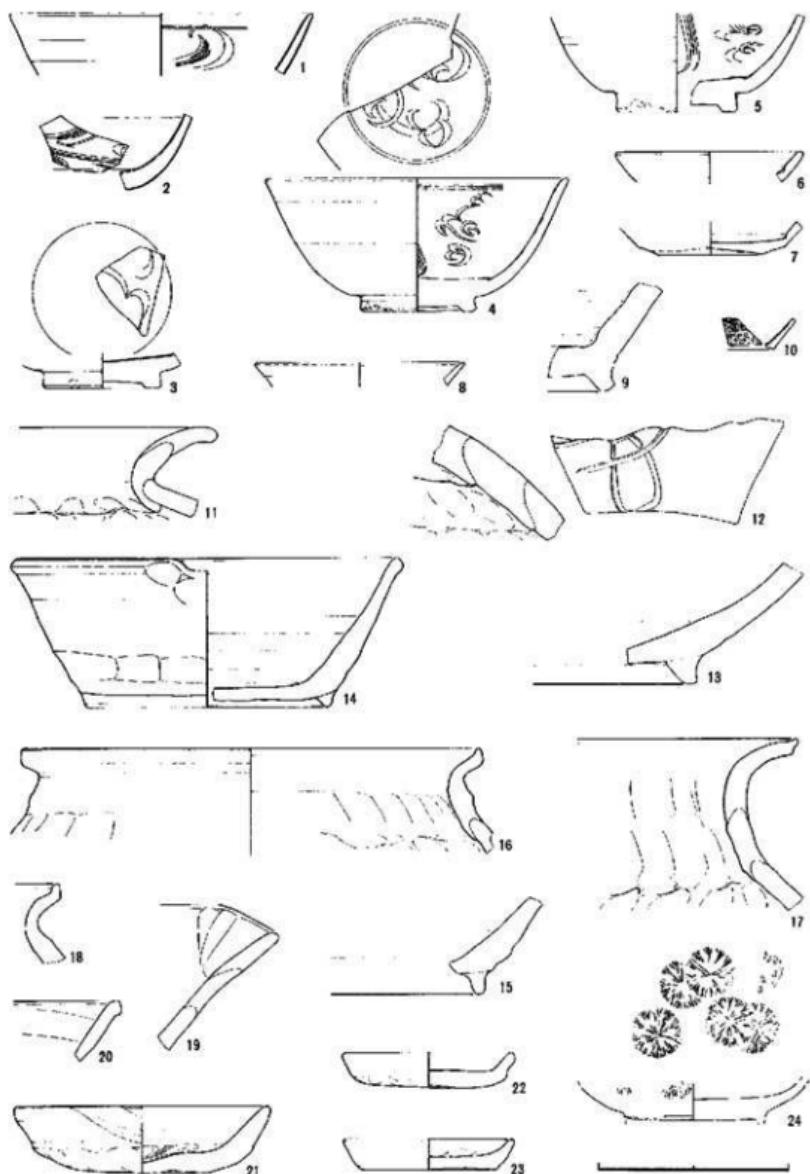


圖28 下部包含層出土遺物

釉薬は灰緑色透明。素地は岩石質で灰色を呈し、ややきめが粗い。焼成良好。

6—皿器壁部分。復元口徑9.7cm。釉薬は灰緑色透明。素地は灰色で、粘性強く、割れ口は光沢を帯びる。焼成は、ややむらはあるが良好。7—皿底部。内底面は無文。底径5.4cm。釉薬は灰緑色透明。腰部以下は霧濁で、煤と覚しき黒色の付着物がある。素地は灰白色できわめて粘性が強い。焼成良好。

#### 白磁（8・9）

8—一口兀げ皿口縁～体部上半片。口縁端部は尖り気味。復元口徑11cm。釉薬は僅かに白味を帯びるが透明。素地は乳白色で結晶状。焼成良好。9—四耳壺底部片。釉薬は微かに青味を帯びた透明のもの。素地は乳白色で結晶状。焼成良好。

#### 青白磁（10）

型押しの皿器壁～底部片。内面に雷文と細かな花文を持つ。雷文帯の上縁には環輪の痕跡と思われる黒色の付着物がある。釉薬は淡水青色で透明度が高い。素地は乳白色で結晶状、ややきめが粗い。焼成良好。

#### 渥美（11～13）

11—甕口縁～頸部。胎土は灰色で夾雜物はあまりみられず、きめ細かく締りが良い。釉薬は黒褐～灰褐色で、刷毛塗りされている。焼成良好。12—甕肩部片。窯印らしい線刻がある。胎土は灰～灰白色できめ粗く、気孔を多く含み流紋が観察できる。暗灰緑色の灰がいちめんにかかる。焼成良好。

13 こののみ捏ね体。体部下半～底部片。内底面はよく使い込まれて磨耗が激しい。胎土は灰色で気孔・砂粒ともに多く、砂質できめが粗い。焼成良好。

#### 山茶碗系捏ね鉢（14・15）

14一片口が付く。復元口徑20cm、底径12.4cm、器高7.9cm。口縁端部は丸く、外側直下が肥厚する。内底面は磨耗しており、点々と赤色顔料（紅殻？）の付着が認められる。胎土は灰色できめが粗く夾雜物が多く含まれている。焼成良好。15—14に比べ高台は薄く、高い。胎土は非常にきめが粗く、夾雜物・気孔を多く含む。焼成良好。

#### 常滑（16～20）

16—甕口縁～頸部片。復元口徑24cm。器壁は薄く、上方に短かく折れる端部を持つ。胎土は灰色を呈し、きめは粗いが良く締っている。器表は暗褐色で焼けており、頸部外面には淡緑色の灰がかかっている。焼成良好。17—甕口縁～頸部片。口縁端部は外上方に少しつまみ上げられる。胎土は灰黒色で砂質に近く、きめ粗く砂粒等を多く含む。内面下部には、黒色の付着物が認められる。焼成良好。18—壺の可能性がある。口縁～頸部片。口縁端部は上方に折れる。胎土は黄褐色できめ細かく、締りが良い。内外面に降灰が著しい。焼成は普通。

19 片口捏ね鉢口縁～体部中位片。胎土は胎芯で灰色、器表近くで灰黒色を呈し、きめは粗いが良く締まる。焼成良好。20—捏ね鉢口縁部片。口縁直下の外側が肥厚している。胎土は茶褐色を呈

し、きわめてきめが粗い。焼成良好。

#### かわらけ (21~23)

21・22が手捏ね成形で、23がロクロ成形のもの。

21一口径13.4cm、底径6.7cm、器高3.5cmの大型品。器肉は厚く、体部中位の稜はさほど強くない。内底面中央部が窪む。胎土は灰黄色できめが粗い。焼成良好。22一口径8.8cm、底径6cm、器高1.9cmの小型品。これも厚手の器肉で、体部中位にはくびれを有し、尖り気味の口縁端部を持つ。胎土はきめが粗く、灰黄色を呈する。焼成良好。

23一口径9.7cm、底径7.1cm、器高1.7cmの小型品。貧弱な、模状に斜め上方に伸びる器壁を持つ。胎土は赤褐色で、叩くと高い音を発する。焼成きわめて良好。

#### 漆器 (24)

碗体部下半～底部片。高台部分を欠くが、底径12.2cm前後。黒漆を全体に塗った後橙色の朱漆で花文を描く。花文は型刷りではなく手描きである。

### ○ 摂乱塙からの採集遺物 (図29)

長採品もこれに含めた。

#### 青磁 (1・2)

1一輪底部。高台内中央部に削り残しの突起が認められる。疊付には、砂礫の移動によると認められる太い条痕が残る。底径4.3cm。釉薬は青灰色で失透。素地は灰褐色で岩石質。焼成良好。外底面は露胎。同安窯系。2一連介文碗口縁～体部中位片。復元口径15.7cm。蓮弁は幅広で、釉薬中の気泡のため不明瞭。釉薬は暗緑色、無数の気泡を含む。素地は灰色で、夾雜物は少ないがややきめが粗い。焼成良好。

#### 常滑 (3~5)

3が捏ね鉢で、4・5が甕である。

3 口縁～体部中位片。器壁は直線的で、口縁部のみやや薄く、端部はほぼ丸い。胎土は様々の

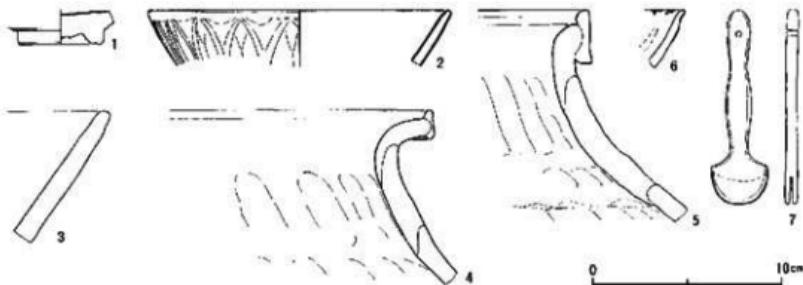


図29 摂乱塙等からの採集遺物

夾雜物を含み、きめがきわめて粗く、灰黒色を呈する。器表は暗褐色に焼けている。焼成良好。

4一口縁～肩部片。上方に折れる口縁端部を持つ。胎上は灰色で、火雜物は多いがしまり良く、気孔は殆ど見られない。外器表は厚い降灰で暗褐色を、内面は酸化現象で淡褐色を呈する。焼成良好。5一口縁～肩部。縁帶は幅が広く、殆んど頸部に貼り付いている。胎上は、胎芯部で灰黒色を、器表近くで灰色を呈し、岩石質できわめて堅く焼けている。内器表は灰黒色を、外器表は降灰で灰白色を呈する。焼成良好。

#### 瀬戸(6)

灰釉碗口縁～体部中位片。口縁直下にくびれを有する。外器表中位以下は露胎。胎裏は灰緑色を帯びるが透明で、貢入が多い。胎上は灰白色を呈し、きめが細かい。口縁部に油煤様の黒色の付着物がある。焼成良好。

#### 漆製品(7)

刷毛の柄の部分。長さ10.3cm、握りの部分の幅1.4cm、毛の装着部分の幅3cm、厚さ6mm。漆は黒漆で、全面に塗られている。

## 第2節 古代その他の

### 1. 奈良・平安時代の遺構と遺物

中世遺構の壁面精査中に奈良・平安時代のものと思われる落ち込みを検出したので、中世遺構の調査終了後に、該期の調査に当った。四箇所に調査区を設けた他、井戸等深い掘方を持つ中世遺構の壁面でも慎重な検出作業を行ったが、後述する諸遺構の他には検出し得ず、それ以上の拡張はしなかった。

遺構は概ね中世基盤層である暗茶褐色粘質土下層の、砂層漸移層上面で検出できたが、本来の切込み面はいまひとつ不明瞭で、今後古代遺構を調査する際、この点を明確にすることも課題であろう。該期の遺構は、竪穴住居址4軒、掘立柱建物2棟を含む柱穴39口である。

#### a. 1号住居址(図31)

調査区南東角近くに設けた第1地点で検出した。東側を中世遺構に、北側を攪乱層に切られて、西側の壁の一部しか検出し得なかった。確認面は青灰色の砂層上面である。

壁面はなだらかで(垂直軸から約30°傾斜)、壁高は現況で20cm前後、壁溝はなく、5~8cmの小柱穴が3穴検出された。壁から約30cmを距てた床面に、幅15~20cmの浅い溝があり、これは未確認ながら別の前代の住居址のものである可能性がある。

床面は柔かく、貼床等は認められなかった。覆土は黒褐色粘質土である。

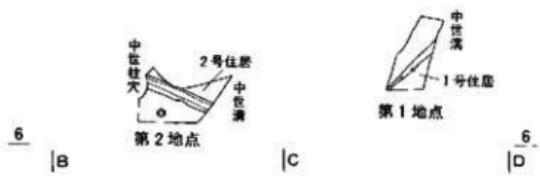
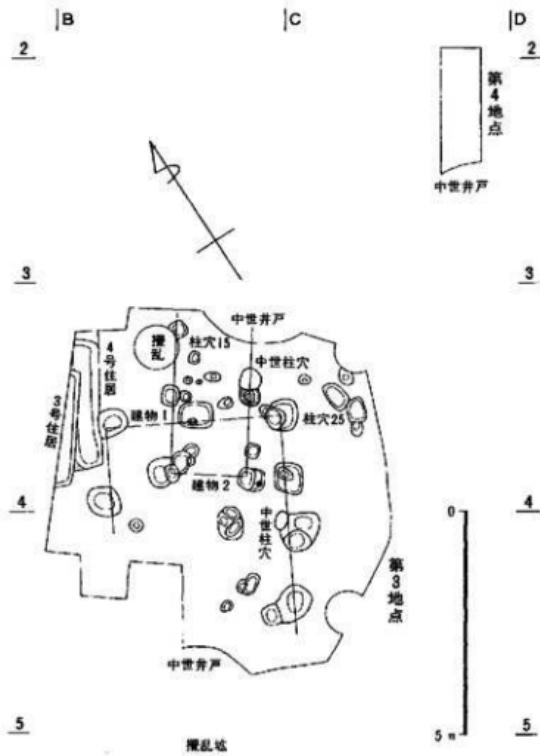


図30 古代遺構全図

主軸方位N—90°—E。

遺物

遺物の出土なし。

### b. 2号住居址（図31）

調査区南西角の第2地点で検出した。これも西・北・東側を中世遺構その他によって削られており、南壁の一部しか検出し得なかった。確認面は青灰色の砂層上面である。

上面は削平されていると思われるが、壁高は現況で10cm弱、壁は直線を成す。壁溝は幅24~27cm、断面は凹形を呈する。

床面は軟弱で、ここでも貼床等は認められなかった。覆土は粘土塊を含む黒褐色粘質土である。

主軸方位N—25°—W。

遺物

遺物の出土なし。

### c. 3号住居址（図32）

第3地点西端、調査区西壁際で、東壁部分のみを検出した。4号住居址と重複しているが、本址が新らしい。確認面は茶褐色粘質土下層である。

壁は直線的で、壁高は確認面から30cm前後である。壁溝は北辺と東辺の北半分、及び南辺に認められ、幅14~20cm、床面からの深さ8~17cmを測る。床下北寄には、平面形は不明ながら深さ25~28cmの土壤を有する。床面は貼床によって構築さ

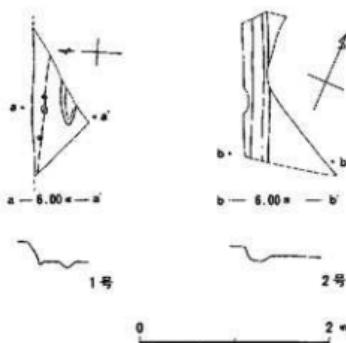


図31 1・2号住居址

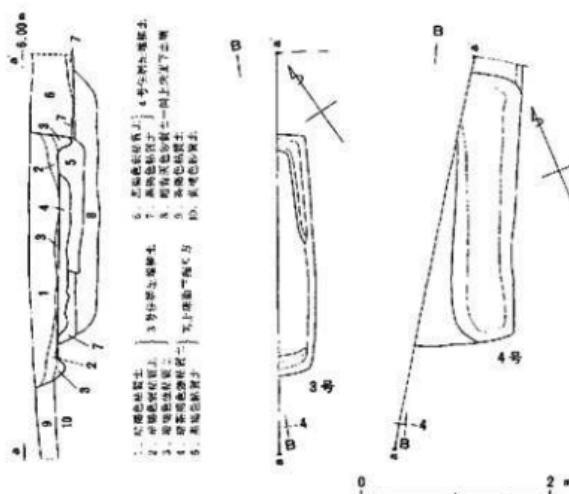


図32 3・4号住居址

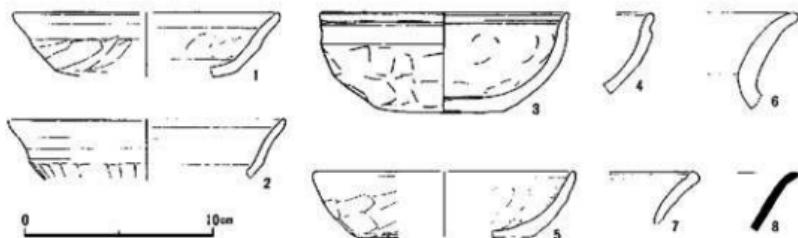


図33 3号住居址出土遺物

れているが、さほど硬化していない。覆土は概ね暗褐色粘質土で、下層ほど粘性が強い。

主軸方位N 35° E。

#### 遺物（図33）

1～5が上部器環、6・7が同甕、8が須恵器である。

1一復元口径13.8cm(近似値)。口縁部はやや外反し、端部は上方に向って尖る。体部上半の内外に横ナデ、下半外面にヘラ削りを施す。胎土は肌色軟質で粉っぽく、白色針状物質を含む。焼成は普通。2一復元口径14.5cm(近似値)。口縁部は外反し、端部のみ上方に向けて折れる。体部上半の内外に横ナデ、下半外面にヘラ削りを与える。胎土は明褐色できめ細かく、白色針状物質等を含む。焼成良好。3一口径13cm、底径6.6cm、器高5.3cm。器面が荒れているため調整の詳細は不明であるが、口縁部内外面に横ナデ、体部に指頭圧痕を残す。外面の全面と内面体部上半に赤彩の痕跡がみられる。胎土は肌色できめが細かく、白色針状物質を含む。焼成良好。4一外面口縁直下に凹落状のくびれが形成される。内面器壁、および外面口縁部に横ナデ、外面体部には横位のヘラ削りが施される。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。焼成良好。5一復元口径13.6cm、同底径9cm、器高3.5cm(以上近似値)。口縁部が微妙にくびれ尖り気味の端部を持つ。内面～外面口縁部に横ナデを与え、体部下半に指頭圧痕を残す。器面は荒れているが外面は若干の赤味を帯びる。胎土はややきめが粗く、白色針状物質を含む。焼成良好。

6一口縁部片。口縁端部若干外反する。内外面に横ナデ。胎土は灰～肌色を呈し、砂質できわめてきめが粗く、雲母と美しい光沢ある微粒子を多く含む。焼成良好。7一口縁部。内面端部直下に浅い凹帯が廻る。胎土は砂質できめが粗く、灰黄色を呈する。焼成良好。

8一口縁～体部片。口縁部は外反する。胎土は灰黒色できめが粗く、白色針状物質を含む。

本住居址は、出土遺物から8世紀中葉に比定される。

#### d. 4号住居址 (図32)

第3地点西端にあり、3号住居址及び擡立柱建物1に切られている。これも東側のみしか検出していない。確認面は、上面が削られているため、茶褐色砂質土である。壁は直線状で、壁高は現況で20cm前後である。壁溝は見られない。東壁際床面下には、長さ288cm、幅60cm、深さ(床面から)25cmの、舟底形をした長大な土壙が検出された。床面は不明瞭で、硬い部分は認められなかった。覆土は暗褐色粘質土で、下層が上層に比べて粘性が強い。床下土壙の覆土は暗青灰色砂質土で、出土遺物は大半がここから出た。

主軸方位N-25°-E。

#### 遺物 (図34)

図示したものはすべて床下土壙から出土した。1～5が七師器環、6が同小型甕、7が須恵器環、8が同甕である。

1一口縁～体部。口径14.2cm。全体に内凹する体部で、口縁部のみ外反し、端部直下の外面に凹線を有する。内面と外面口縁部に横ナデ、外面体部下半にヘラ削りを施す。胎土は黄褐色で、砂粒等を含み、きめはやや粗い。焼成良好。2一口縁～体部下半片。これも全体に内凹し、口縁部がやや外反する。内面と外面口縁部に横ナデを与える。体部は指頭成形の後、外面をヘラ削り。胎土は暗黄褐色を呈する。きめは普通。焼成良好。3一口縁～底部。復元径13cm、底径8.4cm、器高4.2cm(いずれも近似値)。底部は丸味を帯び、体部は全体に内凹し、口縁部はやや薄手に仕上げる。内面～外面口縁部は横ナデされ、外面の体部から底部にかけてヘラ削りが与えられる。胎土は明褐色できめ細か。焼成良好。内外面の口縁直下に、黒色の付着物が帯状に認められる。4一口縁～体部下半片。復元口径13.3cm(近似値)。体部上半から口縁部にかけて外反し、口縁端部のみ内傾する。内面と外面体部上半が横ナデ、外面体部下半がヘラ削りされる。胎土は赤褐色で緻密。白色針状物質を含む。焼成良好。

5一体部下半片。復元底径7.3cm。内面に放射状の暗文が見られる。外面は底部までヘラ削り。外

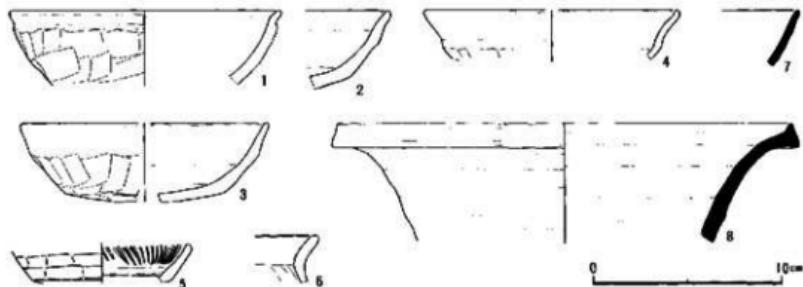


図34 4号住居址出土遺物

面は赤彩されている。胎土は灰白色で、夾雜物を含まずきわめて精緻である。他の上部器とは様相を異にしており、搬入品である可能性がある。焼成良好。

6 小型甕口縁部片。「く」の字に折れ、口縁端を丸く收める。内外面の口縁部を横ナデ。胎土は暗褐色で、砂粒を多く含み、きめが粗い。焼成は普通。

7 一口縁～体部上半片。体部はやや内側気味。胎土は、胎芯で淡褐色、器表近くで灰色を呈し、緻密で夾雜物を含まない。焼成良好。

8 一口縁～頸部片。復元口径24cm。喇叭状に開き、口縁部は縁帶状に上下につまみ出される。胎土は灰色を呈し、岩石質でややきめが粗く、針状物質を多く含む。焼成良好。

本住居址は、出土遺物の諸相から8世紀前半に比定される。

#### e. 挖立柱建物 1

第3地点で検出した。柱間が不安定ではあるが、類似の柱穴が並んでいるのでいちおう抽出しておいた。4号住居址と切り合うが本址の方が新しい。また掘立柱建物2とも重複しているが、切り

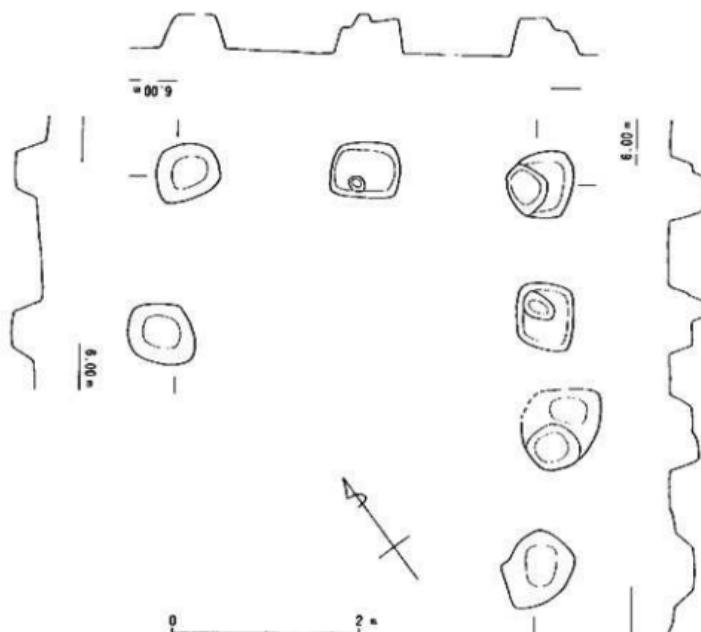


図35 掘立柱建物

合った柱穴がなく、先後関係は不明である。確認面は砂層上面。

南側は擾乱層等に削り取られて不明であるが、桁行（南北）3間、梁間2間、490cm×440cm程の現況規模を持ち、柱間は芯心で桁行120cm～150cm、梁度180cm程である。

柱穴平面形は概ね楕円乃至隅丸長方形で、径70～90cm、確認面からの深さ30～40cm程度である。

主軸方位N-37°-E。

#### 遺物

本址柱穴からの出土遺物はなかった。

#### f. 据立柱建物2（図36）

第3地点北側にあるが、さらに1間分北に伸びる可能性がある。据立柱建物1と重複するが、先述の如く、切り合った柱穴がないため新旧の判定はできなかった。これも確認面は砂層漸移層上面である。

現況で桁行（南北）2間×梁間1間、370cm×260cm程の規模を持ち、柱間は芯心で175cm×150cm前後である。

柱穴平面形は概して隅丸方形が多く、径38cm～68cm、深さは確認面から30～40cm辺りに収まっている。

主軸方位N-45°-E。

#### 遺物（図37）

建物北西の柱穴15から上飾器獸足1点が出土した。上部は不明である。現況で、長さ10.4cm、脚部幅3.3cm、接地部分の幅5.5cmを測る。手捏ねの後、ヘラ削りを施す。踵の部分は断面薙研形に抉られている。胎土は肌色で、上下端のみ明褐色に焼け、きめはやや粗く、砂粒・白色針状物質を含む。

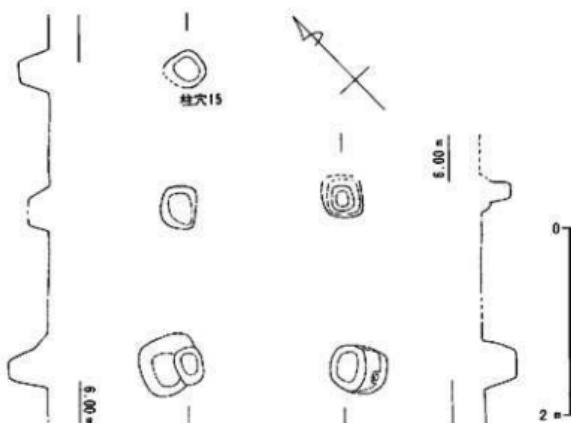


図36 据立柱建物2

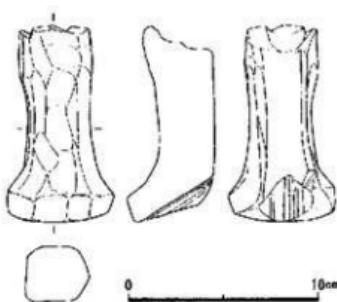


図37 据立柱建物2（柱穴15）出土遺物

含む。焼成良好。

#### g. 柱穴25出土遺物

1 一隻口縁～肩部片。復元口径20cm。やや開き気味の「コ」の字形をした口縁部を持ち、頸部に指頭圧痕を残し、肩部以下にヘラ削り、口縁～内面頸部にかけて横ナデを与える。胎土は暗褐色～明褐色で、砂粒・白色針状物質を含み、きめがやや粗い。焼成良好。

2 長胴一隻口縁部片。端部に沈線が残る。胎土は明褐色を呈し、砂粒を多く含んで粗い。焼成良好。

3 一いわゆる上師質土器の口縁～底部。復元口径11.4cm、同底径6.2cm、器高4.5cm。胎土は明褐色で、砂粒等を多く含み、きめが粗い。焼成良好。

この一群の土器は平安時代中期以降に比定されよう。

#### h. 遺構外採集遺物（図39）

包含層中から出土したものの他、中世遺構や攢乱壙中から採集したものも、一括してここに含めた。

1～9が上師器坏、10・11が同台付窯、12～14が窯、15～17がいわゆる土師質土器、18～22が領憲器坏、23が同窯、24が灰釉陶器である。

1 一復元口径11.9cm、底径6.5cm、器高3.8cm。口縁部がやや外傾し、外底面中央部が窪む。器面が荒れて調整は不明瞭であるが、部分的に指頭による凹凸が残る。口縁部横ナデ。胎土は砂質で、夾雜物を多く含み、きわめて粗い。淡褐色を呈する。焼成良好。2 一復元口径11.9cm、底径7.5cm、器高3.6cm。全体に内縁気味。内面～外面口縁部に横ナデ、体部～底部にヘラ削りを与える。胎土は暗褐色で、きめが荒く、砂質。焼成良好。3 一復元口径12.5cm、同底径7.8cm、器高3.4cm（いずれも近似値）。内面に指頭圧痕を留め、外面部～底部はヘラ削りされる。口縁部のナデは不明瞭。胎土はきめ細かで粉っぽく、肌色を呈する。焼成は普通。4 一復元口径11.4cm、同底径6.1cm、器高3.3cm（いずれも近似値）。尖った口縁端部を持つ。外面部下半はヘラ削り。口縁部の横ナデはやや不明瞭。胎土はややきめが粗く、気孔も多い。黄褐色を呈する。焼成良好。5 一口径11cm、底径6cm、器高3.8cm。直線的な器壁で、口縁直下でややくびれる。指頭で押された後、口縁部に横ナデ、外面部～底部にヘラ削りを施す。胎土は黄褐色で、やや気孔を含み、きめが粗いが非常に堅い。焼

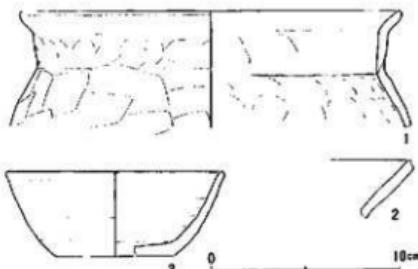


図38 柱穴25出土遺物

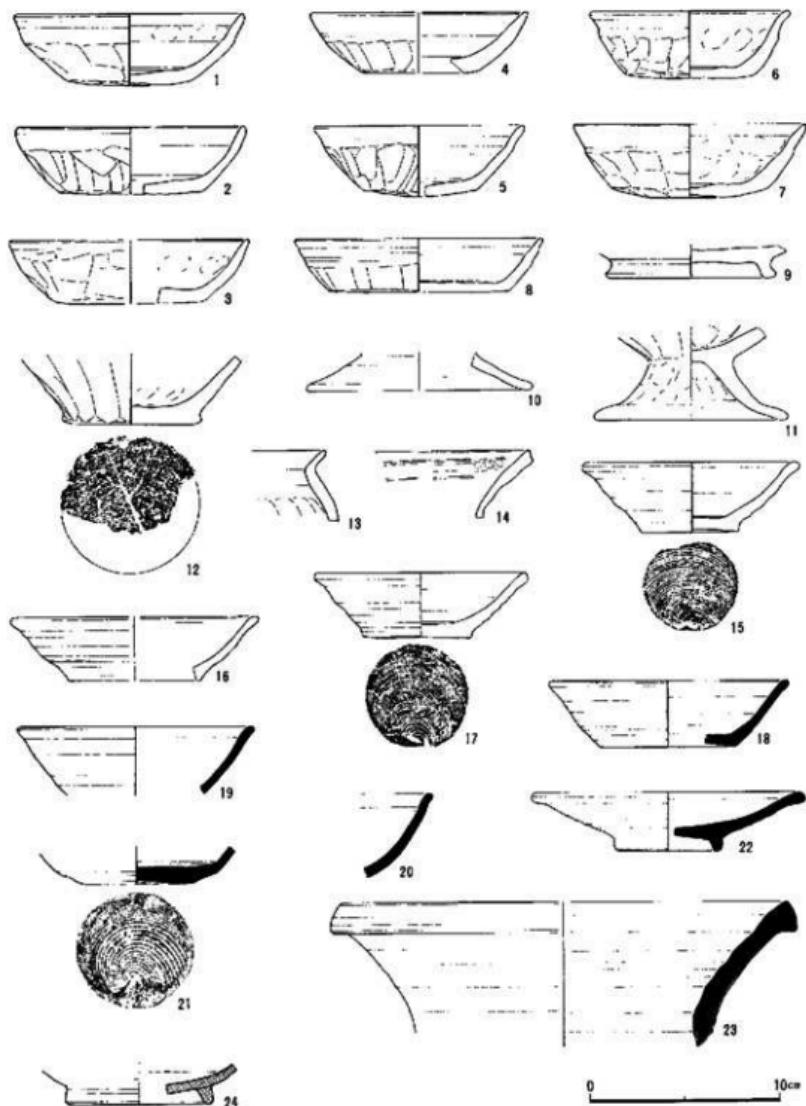


图39 造礁外采集遗物

成良好。

以上五点の土器は、概ね平安時代初頭～前半期に比定されよう。

6・一口径10.4cm、底径6.7cm、器高3.6cm。内面にはほほ二段の指頭圧痕を残し、口縁部に横ナデ、外面部部～底部にヘラ削りを行なう。胎土は肌色で、夾雜物をあまり含まずきめが細かい。焼成は普通。7・復元口徑12.1cm、同底径8.1cm、器高4cm。口縁直下が微妙にくびれ、尖り氣味の端部を持つ。内面に二段の指頭圧痕を残し、口縁部に横ナデ、外面部部下半～底部をヘラ削りする。底面中央部は内外ともに溝み、濃い造りになっている。胎土はきめ細かで粒っぽく、明褐色を呈する。焼成良好。

6・7の二点は奈良時代末～平安時代初頭に位置づけられる。

8・復元口徑12.9cm、同底径9.5cm、器高2.9cm。内面～外面部部上半に横ナデ、外面部部下半～底部をヘラ削りする。胎土はかなりきめ細かで、明褐色を呈して堅い。焼成さわめて良好。8世紀前半（奈良時代中期）に比定されよう。

9・高台を有する。底径9cm。外面は体部から外底面まで赤彩される。内底面にナデ、外底面に回転ヘラ削りを行なう。胎土は砂質で粗く、白色針状物質を含み、灰褐～黄褐色を呈する。焼成良好。

10・脚部片。脚端部復元径11.8cm（近似値）。胎土は暗褐色できめが細かい。焼成は普通。11・体部下半～脚部。脚端部径10.2cm。脚部外面に指頭圧痕を残し、体部下半にヘラ削り、脚端部に横ナデを与える。胎土は明褐色で、これもきめが粗く砂質に近い。焼成良好。

12・底部片。底径7.3cm。外底面に本葉模を留める。胎土は砂粒を多く含んできめが非常に粗く灰～灰褐色を呈する。焼成良好。

13・小型窓口縁部片。体部内面に指頭圧痕を留めるが、外面は器面が荒れており調査は不明。胎土は、砂粒を多く含み、きめが粗く、灰黒～淡褐色を呈する。焼成良好。

14・長窓窓口縁部片。端部に浅い凹帯が廻る。外面は指おさえの後横ナデ、内面には刷毛目状の条痕が残る。胎土は粗く、砂粒を多く含み、きめが粗い。焼成良好。

15・口徑11.2cm、底径5.1cm、器高3.7cm。口縁部若干肥厚して外反氣味になる。底部回転糸切り。胎土はきめがやや細かく、砂粒をあまり含まない。火だすき状の焼きムラが生じ、黄褐～暗褐色を呈する。焼成良好。16・復元口徑13cm、同底径7cm、器高3.5cm（いずれも近似値）。これも口縁部が僅かに外反する。胎土は黄褐色できめが粗い。焼成良好。17・口徑11cm、底径5.7cm、器高3.4cm。口縁はやや肥厚氣味で、上方に向って尖る。底部回転糸切り。胎土にはこれも15同様火だすき状の焼きムラが見られ、黄褐～赤褐色を呈し、きめはやや粗いが堅い。焼成良好。

15・16・17の三点の土器は10世紀中葉（平安時代中頃）に位置づけられよう。

18・復元口徑12.4cm、同底径7.2cm、器高3.5cm。口縁部は僅かに外反する。胎土はきめが粗く砂粒を含む。焼成不良のため茶褐～黒褐色と、色調にムラが生じている。19・復元口徑12.3cm。胎土は灰黒色で非常にきめが粗い。焼成良好。20・口縁部が微妙に外反する。胎土はやや細かく灰

色を呈する。焼成は普通。

21—底径 6 cm。底部回転糸切りの後、外縁にヘラ削りを与える。器壁は体部下半で上方に向けて彎曲する。胎土は灰色できめが細かいが、若干の砂粒を含む。焼成良好。

22—高台が付く。復元口径 14 cm、同底径 15.6 cm、器高 3.1 cm。口縁部は肥厚して端部を丸く收める。胎土はきめが粗く、岩石質で灰黒色を呈する。内面に灰白色の降灰が全面にかかる。焼成良好。

23—復元口径 23.4 cm(近似値)。口縁端部は上方に向って尖り、下方にややつまみ出される。胎土は灰色で岩石質に近く、きめが粗い。焼成良好。

24—一体部下半～底部部。復元底径 7.8 cm。内面の器壁に灰粒がかかり、外底面に回転糸切痕が残る。胎土は灰白色を呈し、砂粒を含み、ややきめが粗い。0・53系式に属する。焼成良好。

## 2. 繩文時代の遺物（図40）

市街地の調査でも、縩文時代の遺物は度々発見されている。ここでも中世の土壤覆土中から石錐一点が出土した。長さ 7.2 cm、幅 6 cm、厚さ 2.5 cm の玄武岩製。重量 155 g。

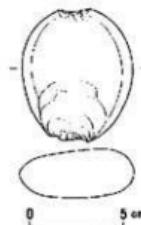


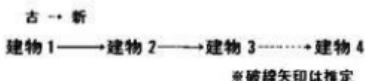
図40 石錐

## 第四章 調査のまとめ

### 1. 中世

#### 遺構について

殆んどを同一面上で検出したため、切合い関係のないものについては、新旧の判断がつきかね、また建物と溝・井戸等の配置関係についても、調査範囲の狭さもあって明確にすることはできなかつた。しかし掘立柱建物4棟に関しては、いずれも重なり合つておらず、柱穴同士の切合いも認められたので、第三章の記述に従つて図式的に整理すると、新旧関係は次の如くになる。



これらの建物と、溝・上塙22等確かな方向性を持つ遺構の軸方位は次の通りである。

建物1 N-58°-E	溝1 N-60°-E
建物2 N-58°-E	溝2 N-60°-E
建物3 N-60°-E	土塙22 N-60°-E
建物4 N-58°-E	土丹版築面東辺 N-60°-E 前後

多少の誤差を考慮にいれても、ほぼ一定の方向性が保たれているのは間違いない。つまりこれら諸遺構は、次々と前代の方向性を踏襲して造り替えられており、街並の大きな改変は認められない。ある期間内——都市計画・地割の存続期間内——に取まると考えられる。それがいつの頃であったかは次の遺物の項で若干言及するが、概ね鎌倉時代と考えて大過なかろう。

次に、以上の諸遺構の方位を、若宮大路や近隣の遺構の方位と対比させてみたい。若宮大路の方位はN 34°-E (便宜上磁北で計測、真北ではN 27.5°-E)、鎌倉時代の遺構である藏屋敷遺跡第1調査区1~3号溝はN-35°-E (報告書から筆者計測)である。これで見ると後者は若宮大路には平行しており、大路を基軸にした街割りの規制下にあることが判る。しかし、本地点の諸遺構は、若宮大路の方位と大幅に(24°~26°)ずれているので、本地点に限って言えば若宮大路を軸にした街割り構成の規制外にあると言いうことができよう。藏屋敷遺跡(若宮大路から約110m)と本地点(若宮大路から約140m)との間に、或いは規制の境界が存在する可能性もある。藏屋敷遺跡の報告書では、若宮大路から約130m距った藏屋敷東遺跡に、若宮大路を軸とした区画のはば西端を求めておられるが、若宮大路の西約250mの諏訪東遺跡では既に大幅なずれが認められるので、藏屋敷

東造跡の辺りは、確かに妥当な位置であるかも知れない。但し、この点に関しては、鶴岡八幡宮からの距離によって異なることも考えられるので、今後より多くの調査例で検討されるべきである。

建物1～4を持つ屋敷地の、東側限界は溝1・2等によりほぼ明らかであるが、北側のそれは不明確である。ただ井戸近辺に柱穴が少ないので、土壙22を溝1に対応する溝の南端と考えれば、この付近に限界を想定することはできよう。

ところで、鎌倉市街地の発掘調査をすると、大抵の遺跡で、黒褐～暗青灰色でしまりが強く、遺物や小土丹塊を少量しか含まない覆土を持つ溝が1～2条検出される。多くは深めで、逆台形の断面を呈し、層位的には最も古い一群に属する。筆者の実見の限りでは、北条泰時・時頼邸宮ノ下一丁目371番-1地点第II面東内溝・小町二丁目345番-2地点遺跡溝3があり、間接的な知見では藏里敷遺跡第1地点1号溝・2号溝C・3号溝などが該当すると思われる。これらの遺構からは、多くの場合、白磁端反腕・青磁割花文碗・同模描文(同安窯系)・占式のかわらけ等、概ね13世紀前半期の遺物が散発的に出土する。本地点では土壙22にこれら諸遺構と同様の様相が看取できるが、今後、鎌倉時代前半の街並を復元するに際して、この一群の遺構に注目しておく必要があろう。

#### 遺物について

本地点の遺物には一括性の認められるものが少なく、包含層も後代の削平によって薄くなってしまい、辛うじて上・下二枚に分層できたに過ぎない。そこで、ここでは上部包含層・下部包含層、および主な遺構の大雑把な年代観を提示するにとどめたい。

上部包含層出土遺物は、図27-9の渥美のような比較的古い時期のものから、同一16の瀬戸のようない、14世紀後半以降のものまでを含んでおり、年代に大きな拡がりがあると思われる。舶載陶磁器に限っても、おそらく13世紀代に属するもの(図27-1)から14世紀前半～中葉に至るものまでが見られる。かわらけは量が少なく、年代を比定するのは難かしいが、概ね14世紀代のものと思われる。この一群は、包含層であるためか混乱しているが、舶載陶磁器等からみて、中心はほぼ14世紀前半辺りではなかろうか。

下部包含層出土遺物は、青磁の主体が龍泉窯系割花文碗と同安窯系の皿にあり、国产品では渥美・常滑が主体を成して瀬戸が見られない。常滑の號には縁帯は形成されず、上方につまみ出されるだけである。かわらけを見れば、手捏ね成形は大型(図28-21)・小型(同22)ともやや厚手で体部下半に浅い棱を持つもので、ロクロ成形は斜め上方に小さく楔形に伸びる器壁を持つものである。こういった諸相は、鎌倉では13世紀前半～中葉に比定される。

井戸1出土遺物には渥美・常滑・かわらけの他、板卓脚芯が含まれている。常滑は縁帯を持たず、上縁部に凸帯が形成されるもので、かわらけはロクロ成形のものが浅い貧弱な器壁の小皿(図24-4)、手捏ね成形のものが体部に棱を持たないもの(同5)である。この一群は13世紀中葉に属しているよう。

井戸2出土遺物は、古式の様態を持つ常滑(図25-3)から瀬戸鉢し皿(同5)までを含んでい

る。遺物量が少なく、年代の比定は困難であるが、やや新しい要素が認められるので、大きく14世紀代としておきたい。

**井戸3出土遺物**も多くなく、年代を決定づける要素を欠いているが、青磁割花文碗(図26-1)や常滑口縁(同-3)の形態、かわらけ(同-4)等からみて、概ね13世紀後半~14世紀前半に收まろう。

**土壙22出土遺物**には、青磁蓮弁文碗・瀬戸・かわらけなどがある。うちかわらけはいずれもロクロ成形の小皿で、小さな器壁のものばかり(図23-5~7)であり、青磁は蓮弁の幅が広い。この一群はおそらく13世紀後半代に比定されよう。

**土壙22出土遺物**は、図示し得た二点とも龍泉窯系割花文の青磁である。これは、前項(遺構の項)でも触れた通り、鎌倉時代前半の出土傾向を示していると言え、市街地の他遺跡においても、大抵、層序上中世でも古い時期に属している。すなわち13世紀中葉以前の年代が与えられる。

### 全体的な年代観

以上の通り、本遺跡は、遺構の連続性こそ認められるが、遺構に伴なう一括遺物等、年代を比定する材料に乏しい。しかし、土壙22等によって提示される規格性が、掘立柱の諸建物によって守られている事実を踏まえれば、土壙22の年代観によって建物群の年代をもばば想定することができる。また溝2を、上塙22及び溝1によって示される地割の改変と考えても(遺物がなく年代が不明なので、前代のものもある可能性もあるが)、軸にまったく差がなく、連続性を否定できない。こういった点と、出土遺物の全体的な傾向とから勘案すると、本地点の中世遺構群は13世紀~14世紀前半、つまり鎌倉時代に集中的に営なされたものであると言えよう。

### 註

- 1 横部実喜他「成塚敷遺跡」 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会 1984年2月
- 2 上林美男「遺構の特徴について」 註1前掲書第VI章第2節(2)
- 3 調査主任斎木秀雄氏の御教示、および註1前掲書第193図(214頁)による。
- 4 馬渕和雄「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下-1丁目371番-1 地点発掘調査報告書」 鎌倉市教育委員会 1985年8月
- 5 馬渕和雄「小町二丁目345番-2 地点遺跡」 小町二丁目345番-2 地点遺跡発掘調査図 1985年3月

## 2. 奈良・平安時代

本地点の奈良・平安時代遺構は、擾乱層や中世遺構に埋されてはいたが、4軒の竪穴住居址と2棟の掘立柱建物の他、柱穴も多数検出して、この付近に該期の遺構が多く存在することが判った。

遺物からみて本遺跡で最も占いものは(石錐を除いて)、8世紀前半に位置づけられ(図39-8および4号住居址出土の一群)、最も新しいものは10世紀中葉に属していると思われる(図39-22等)。

詳細については、近辺の調査例の増加を待たねばならないが、第1章で触れた如く、本地点は鎌倉都街に比定される御成小学校用地内遺跡の東側前面に相当するので、本地点の8世紀後半～9世紀前半の遺物は、これに呼応するものと見えられよう。

また、鎌倉では總体に10世紀前後の資料が少なく、10世紀後半～11世紀前半に漸増傾向にある、<sup>註6</sup>という意見もあるが、本地点にもかなりあてはまるようと思われる。このことが御成小学校用地内で検出された、10世紀代のものと覚しい基壇状遺構とどう関わるか、今後の課題であろう。

### 註

6 水井正彦「奈良・平安時代」 註1前掲書第VI章第1節4

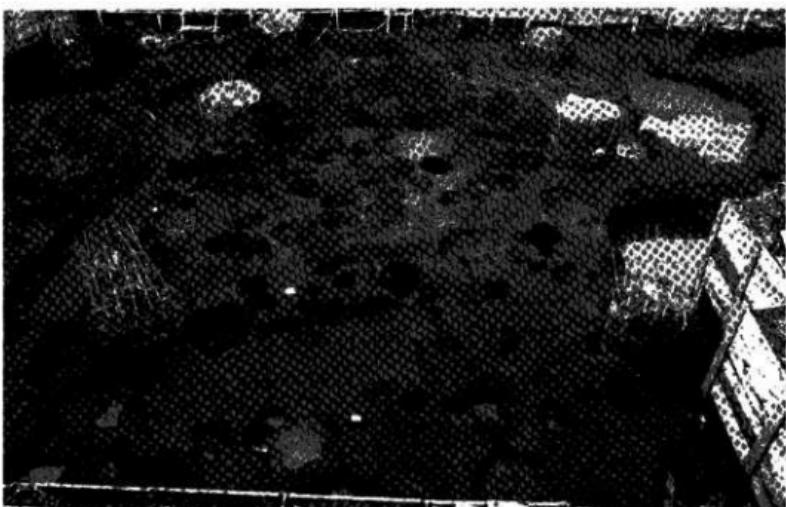


1. 南半部全景（東から）

2. 北半部全景（東から）

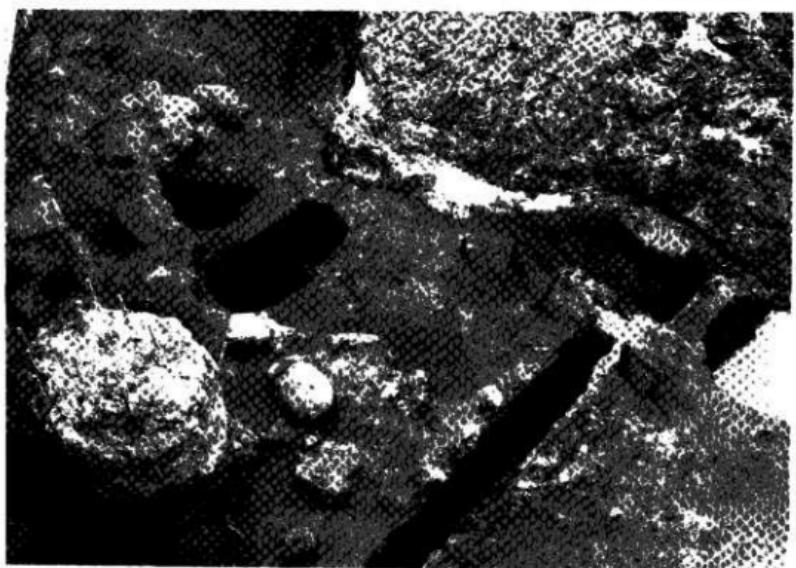


図版 2



1. 全景(西から)

2. 東南隅土丹版築面(東から)



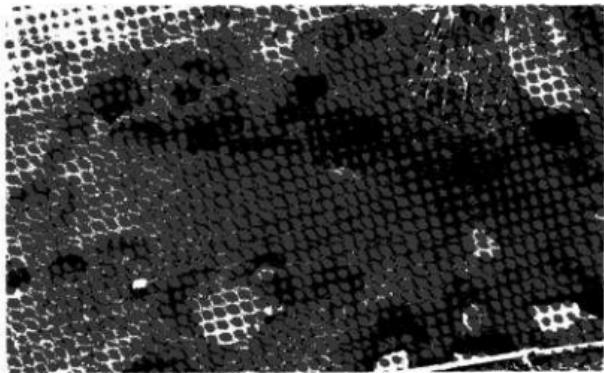


1. 南南部西雲南造構検出状況（北から）



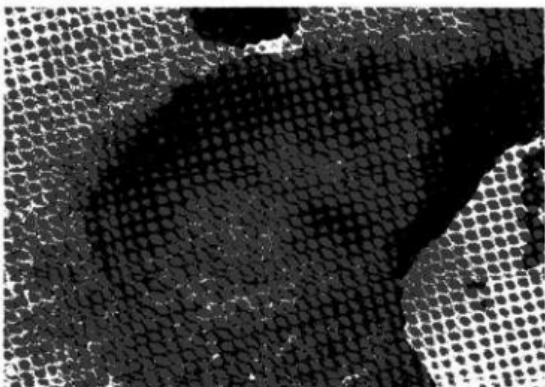
2. 北部造構検出状況（東から）

図版 4

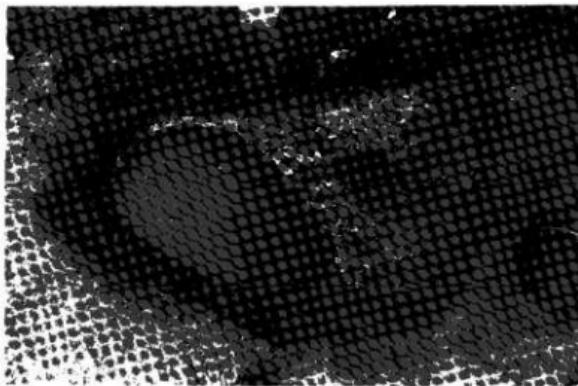


1. 土壠 2 (西から)

2. 土壠 7 (東から)



3. 土壠 18 (東から)





1. 溝 1 (北から)

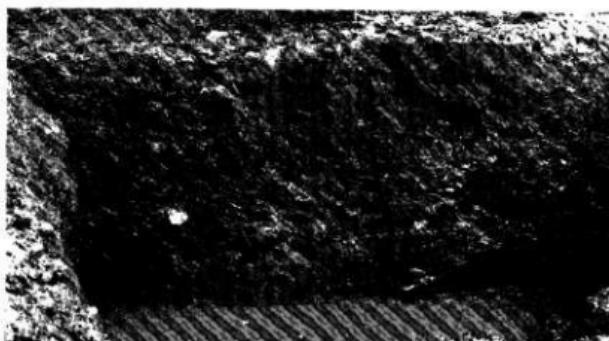
2. 溝 2 (北から)



図版 6



1. 井戸 1 (西から)



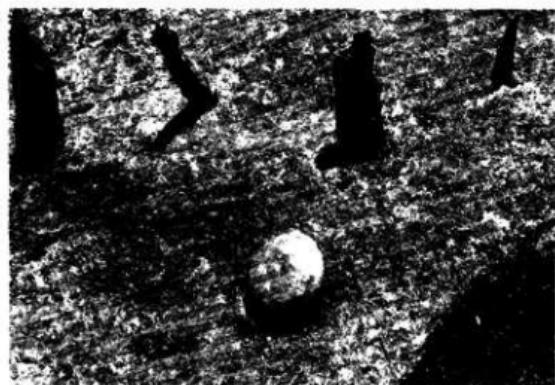
2. 井戸 2 土層断面  
(西から)



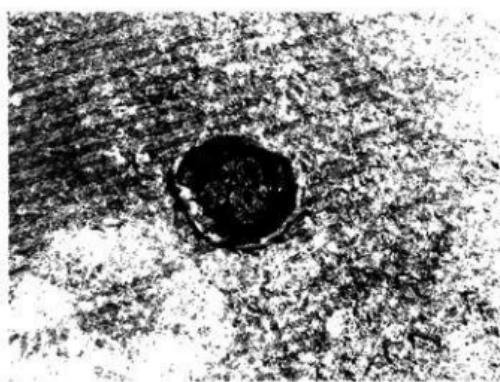
3. 井戸 3 (東から)



1. 青磁(図28-4)出土状況

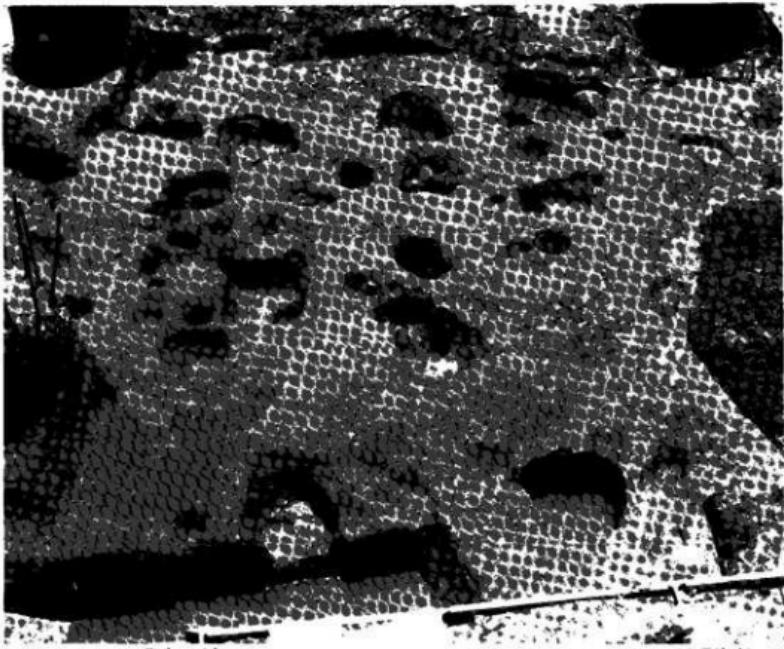


2. かわらけ(図28-21)出土状況



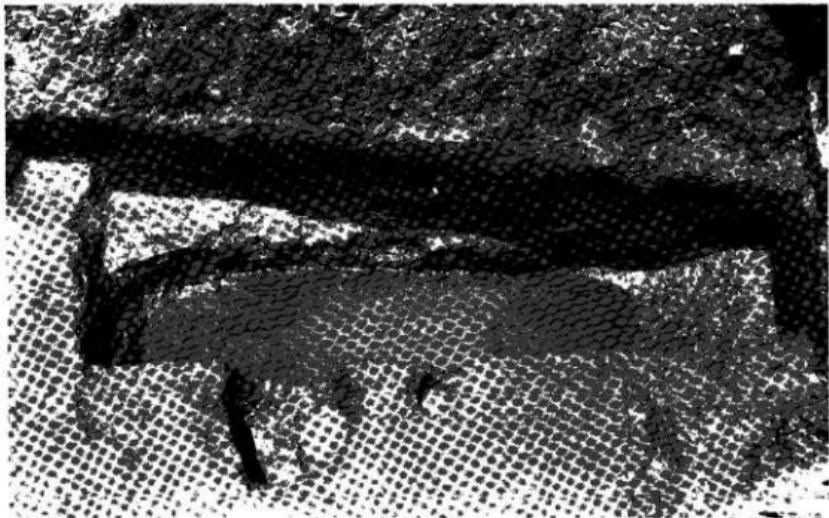
3. 清焼(図28-24)出土状況

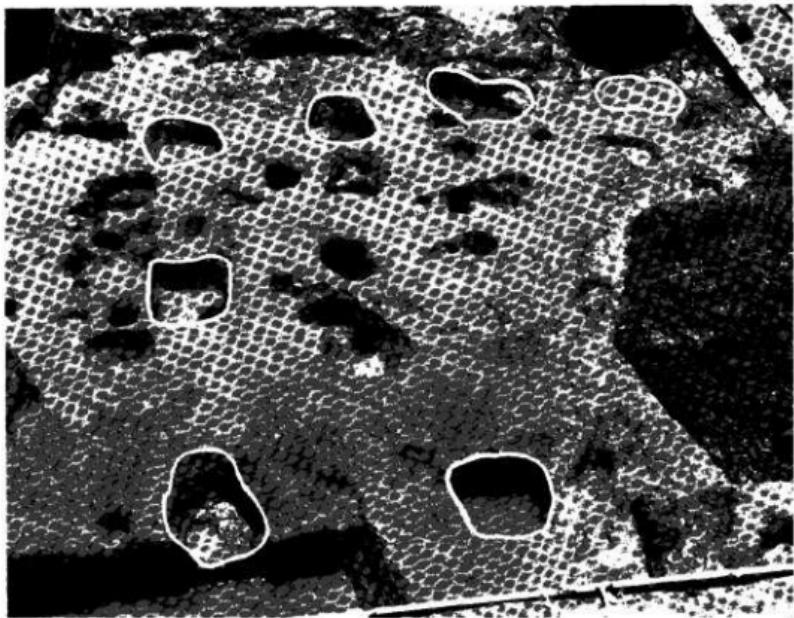
図版 8



1. 古代第3地点全景 (西から)

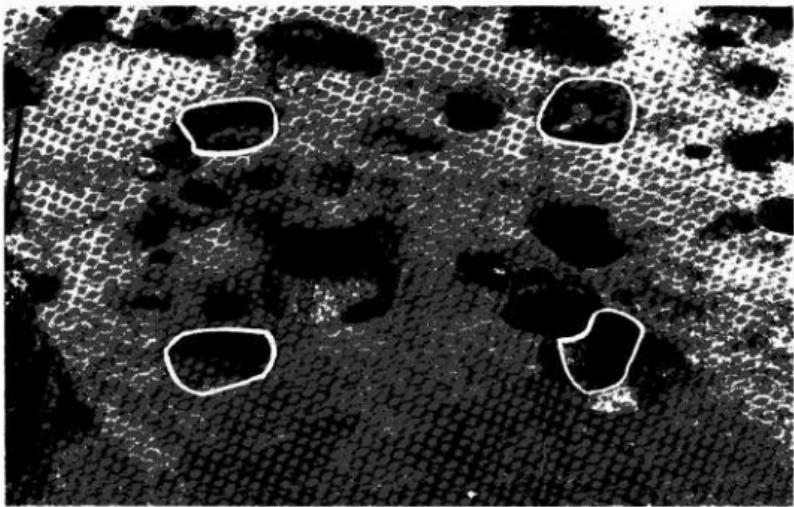
2. 3・4号住居址 (東から)





1. 振立柱建物 1 (西から)

2. 振立柱建物 2 (西から)

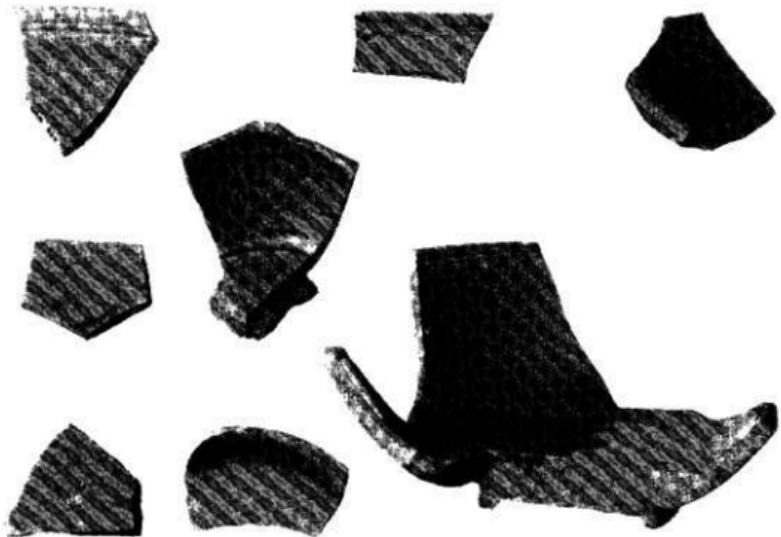


図版10



1. 青磁（雲卉文・無文）

2. 同上（刻花文）



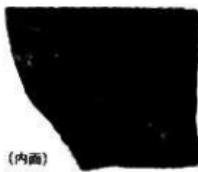
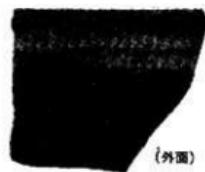


1. 黑磁

2. 白磁



3. 青白磁



5. 高麗青磁

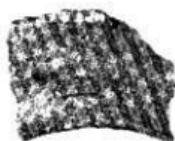
4. 青釉

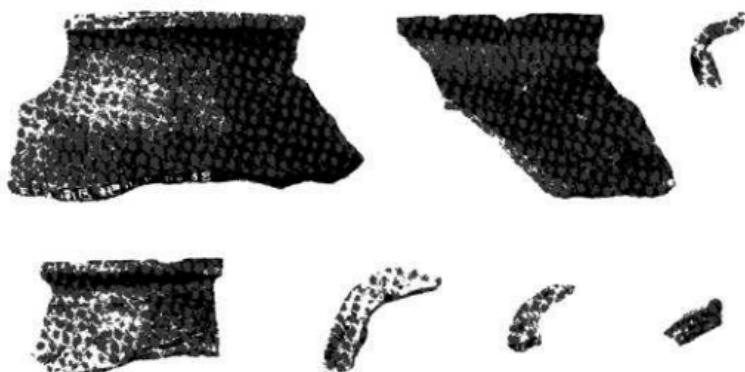


1. 深丸（甕）

2. 同（捏ね鉢）

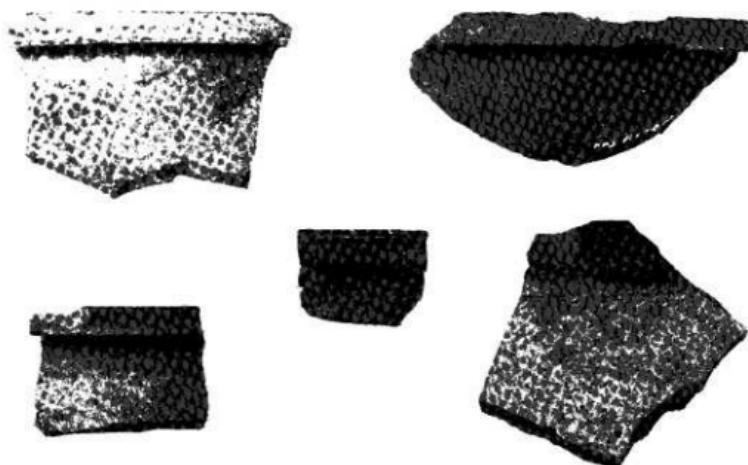
3. 山茶碗窓系捏ね鉢





1. 常淮(壳)

2. 同上(壳)



図版14



2. 湾戸

1. 常滑（捏ね鉢）



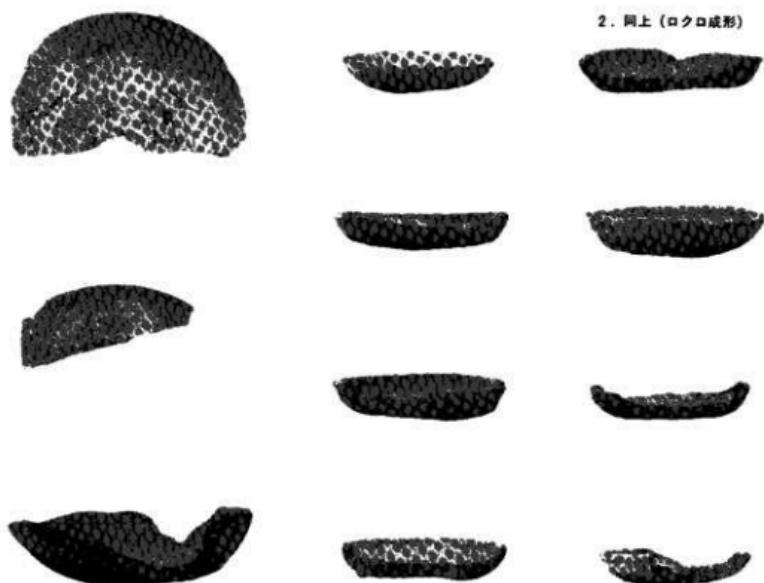
3. 山茶碗



4. 瓦質鉢器・その他

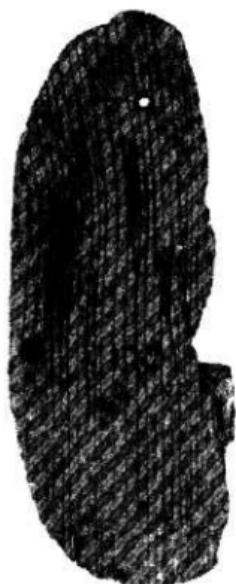


1. かわらけ（手捏ね成形）

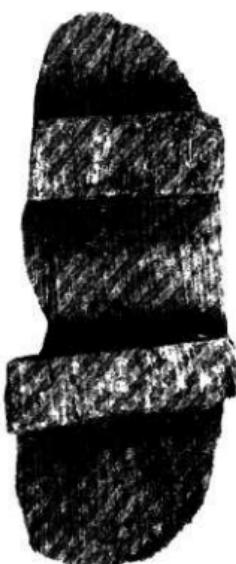


2. 同上（ロクロ成形）

图版16



1. 足印

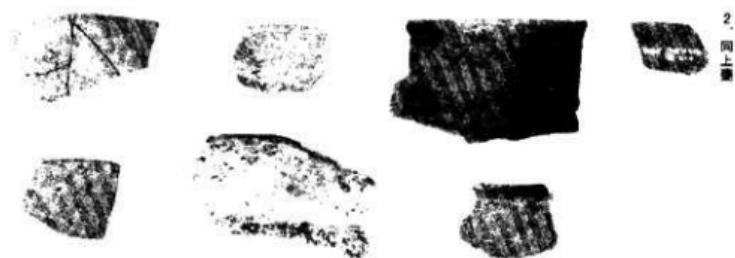
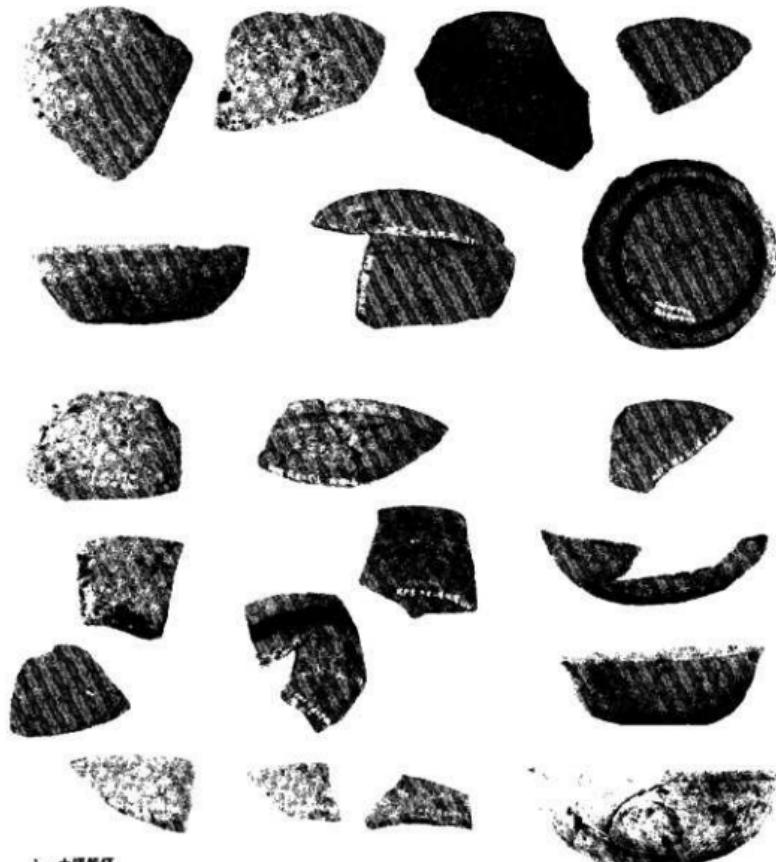


2. 板革痕

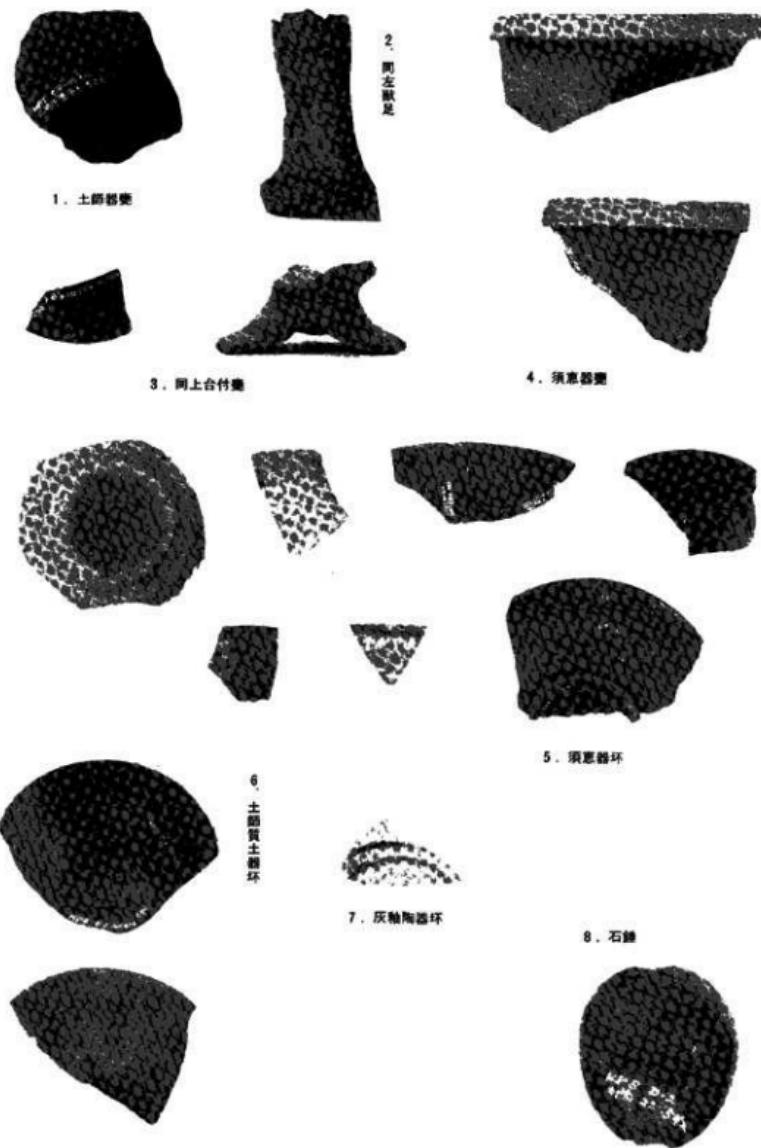


3. 漆器痕





图版18



## 2. 北条泰時・時頼邸跡

雪ノ下一丁目374番4地点

### 例 言

1. 本書は鎌倉市宮ノ下一丁目374番2における山本武子のアパート新築工事に伴う発掘調査の記録である。
2. 本書の執筆は玉林美男が行った。
3. 現地調査には玉林美男・田代郁夫があたった。
4. 資料整理・報告書作成は玉林美男・菊川英政・浜口康があたった。
5. 調査体制は以下のとおり。

担当者 玉林美男（鎌倉市教育委員会文化財保護課）

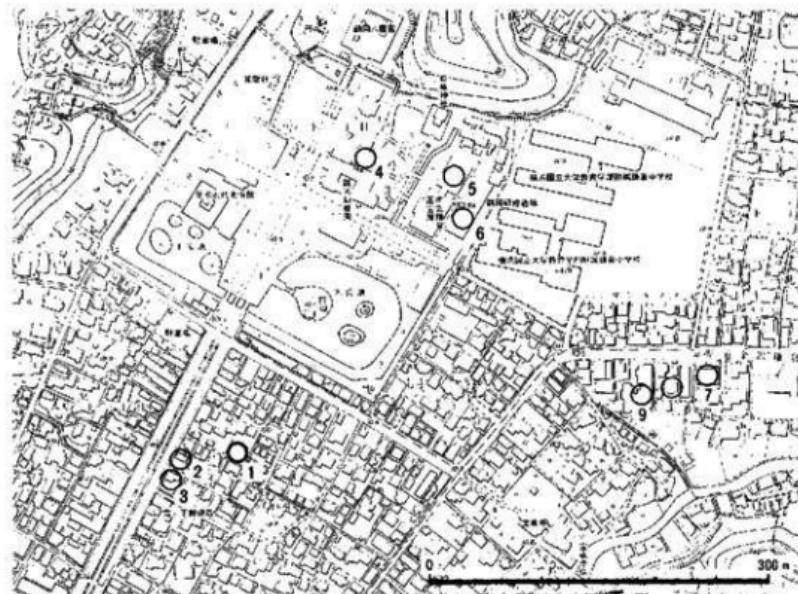
調査員 田代郁夫  
菊川英政  
浜口 康

6. 出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

# 第一章 歴史的環境

当遺跡についてはすでに2回の発掘調査が行われている。いずれも若宮大路に面した部分であつたため、若宮大路に平行する溝やその中に置かれた枠穴を有する角材・溝と平行するピット列等、若宮大路と何らかの関連を思わせる遺構が検出されている。<sup>注1</sup>

北条泰時は、第二代執権であり、治天の君の権を奪った義時を繼いで鎌倉幕府の政権を執った。その邸はいくつかあった様であり、また年代によっても移動があるようである。秀義鏡元仁元年<sup>注2</sup>（1224）六月二七日条には武州鎌倉亭（正家）が小町西北に在り、廓内に閑左近大夫将監実忠、尾藤左近将監景綱宅が在ったことが記されている。嘉祐元年（1225）御所が宇都宮辻子に移されるが、翌二年12月13日、邸の廓内に在った尾藤左近将監（景綱）家が失火により焼亡し、平三郎左衛門尉（盛綱）家、清右衛門志家、弾正忠（季氏）家、大和左衛門尉家、近藤刑部丞家が延焼した。尾藤



1. 若ノ下一丁目374番-2（調査地） 4. 鶴岡八幡宮境内遺跡（真会院用地） 7. 小林邸内遺跡  
2. 若ノ下一丁目372番-7地点 5. 鶴岡八幡宮境内遺跡（同上） 8. 南御門遺跡  
3. 若ノ下一丁目371番 1地点 6. 鶴岡八幡宮境内遺跡（研修道場用地） 9. # B地点

図1 調査地点位置図

氏家は政所前に在った。嘉承二年（1236）8月4日、新造の若宮幕府に将軍頼経が移るに際し、泰時邸から車で移徒の儀を行っている。同年12月19日、御所北方に新造した亭に泰時自身が移っているが、亭の南門東脇には毛藤太郎宅、西脇には平（長崎）左衛門尉宅・大田次郎宅・南角には源坊兵衛入道（盛重・蓮仏）宅、北土門東脇には万年右馬允宅、西脇には安東左衛門尉（忠家か）宅、南条左衛門尉（時貞か）宅が在った。この後武州鎌倉亭（正家）は北条経時（吾妻鏡寛元二年（1245）6月27日条）・重時（吾妻鏡宝治元年（1247）7月17日条）・時頼（吾妻鏡建長三年（1251）10月8日条（？）・同元年（1254）6月15日条）へと引継がれて行っている。

嘉承二年に行われた将軍家の幕府移徒は、泰時邸から行われているが、泰時邸自体も造営中であったことは、同年12月19日、泰時自身が新造した亭に移っていることから明らかである。一方、将軍家御所であった小山朝政邸（車大路にあった）もまだ半作で門がないという状況であった。若宮大路東側では北端と南端で同時に邸の造営が行われている訳であり、何か意図的なものが感じられる。御所もわずか10年余で造営が行われていることは、あるいは町並の整備に伴うものであるかもしれない。特に6月6日に築地始が行われていることは御所の移動あるいは区画変更を示唆しているかのごとき感があり興味深い。

北条泰時邸は北条氏宗家の鎌倉における正家として取りあつかわれ、伝世されているのであり、御所（幕府）以上に、町制の中心と考えられる鶴岡八幡宮寺に近接して存在することは、いかにも北条氏の権威を示すようで興味深い。

1 北条泰時、時頼邸跡発掘調査団「北条泰時・時頼邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1  
所収、昭和60年3月鎌倉市教育委員会

北条泰時、時頼邸跡発掘調査団「北条泰時・時頼邸」昭和60年8月 鎌倉市教育委員会

2 貢達人「北条氏亭址考」金沢文庫研究紀要第18号 昭和46年3月 神奈川県立金沢文庫

3 吾妻鏡の記事については高柳光寿「一街家人その住居」『鎌倉市史』総説編所収 昭和47年 吉川弘文館によった。

## 第二章 調査の経過

昭和60年5月15日、予定地について3ヶ所の坪掘を行い、土層の堆積状況、遺構の様相を把握した。この結果西側は搅乱が激しく、根切底まで遺構が存在しないことが判明した。一方他の箇所では、地表下60cm程の所に玉砂利を混じた版築面があり、良好な地形面であることが判明した。このため調査に先立ち表土を重機で除去し、根切部分について発掘調査を実施することにした。表上除去については事業者の協力を得た。5月27日に発掘調査を開始したが、表土が遺構面直上まで取られていたため、その面で一度精査し、その後根切底まで掘下げることとした。また調査区東側は一面に搅乱層が存在していたため、調査区から除外した。調査は6月7日まで実施した。調査の結果、ほぼ調査区全域に玉石の地形面が在り、北端に東西に伸びる溝、西端に南北に伸びるpil列を検出した。

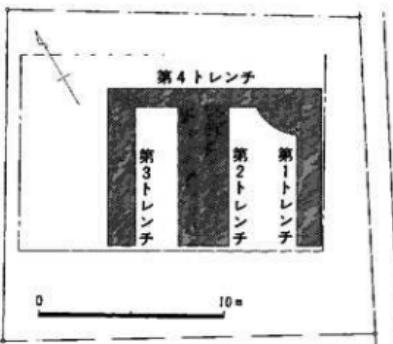


図2 調査区設定図

1	1. 表土層
2	2. 明茶褐色土
3	3. 搅乱色土(玉砂利・海砂を多量に含む) 第1面
4	4. 搅乱褐色土(かぶらけ片を少量含む)
5	5. 明茶褐色土(かぶらけ片を少量含む) 第2面
6	6. 黒褐色土(玉砂利・海砂を多量に含む) 第3面
7	7. 海砂層(かぶらけ細片を少量含む)
8	8. 千枚板塗層 第4面
9	9. 上井面堅層 第5面

図3 土層説明図 (1/40)

### 第三章 検出遺構

#### 1. (玉砂利) 地形面

調査区のはば全城で確認した。調査区北側では溝(?)で区切られ、それ以北は不明である。西側は第3トレンチ(3T.P.)のピット列以西では明確ではないが、無いと言っても良い位である。地形面は5面以上あるが、根切底との関係で第5面までしか確認していない。第1~3面は玉砂利・海砂を多量に含む暗黒褐色上で構成される非常に特徴的な面で、しまりも良い。第2面上にはかわらけを敷きつめ、転圧した地形面があり、炭水化物を非常に多く含んでいた。あるいは火災の跡かもしれない。4・5面は土丹(軟質泥岩)による地形面で、4面は比較的小さな土丹を用いた良質の地形面であるが、5面は大形の土丹による地形で、上面はよくたたき締めされていた。4面上には海砂が一面に18~28cmの厚さで敷かれていた。

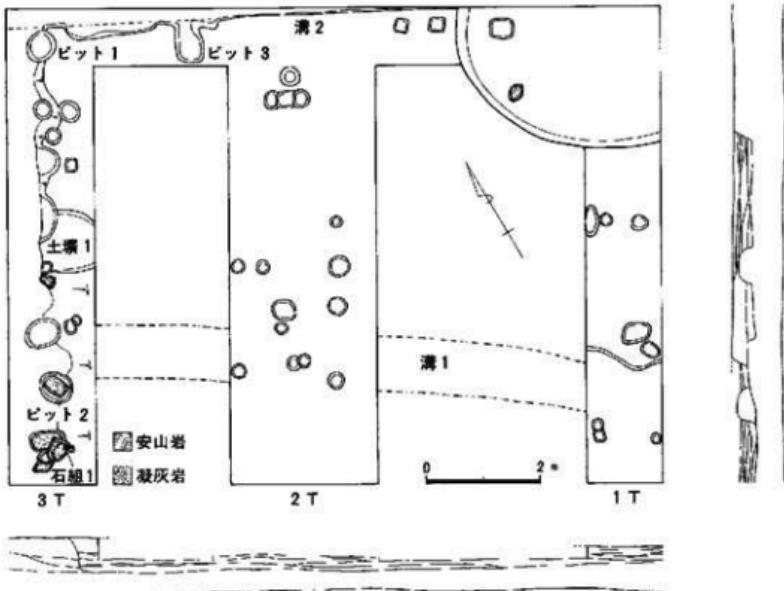


図4 検出遺構平面図及び土層断面図

## 2. 溝 1

第1面上にわずかに検出された幅60cm～1m、深さ30cm程の東西に走る素掘の溝である。側板・杭は存在しなかった。溝中から図6の瀬戸灰釉壺が出上していることから、近世のものと考えられる。

## 3. 溝 2

調査区北端で発見された深さ10cmの東西に走る素掘の溝である。溝の大部分は調査区域外であるため幅は不明である。側板・杭等は発見されていないが、側壁はほぼ垂直に立ち上がっている。第4トレンチ西端、ピット1と3の間は長さ2m10cm程、幅員が10～20cm程広くなっている。あるいは土壌であるかもしれない。

## 4. 第3トレンチピット列

第3トレンチ内で検出したピット列で、ピット列以西は溝状になっている。ピットは1辺25cm程の方形のものないしは不整円形のものと直経50cm程の不整円形のものとかあるが、名を区別した中では明瞭に列を確認できない。しかし第3トレンチの南北ピット列を境に版築が切れており、このピット列が玉砂利や地形面とは異なる区画になる事は明らかであろう。ピット2は中に1辺30cm×40cmの錐倉石（凝灰岩）切石がすえられている。石組1はピット又は土壌の箇所中に投げ込まれたものと考えられる。

## 5. 第2トレンチピット群

直径20～28cmの比較的小さな杭跡を思わせるようなピット群である。

北端にピットが東西に接している列状になったピット群がある。中央が方形で、両側が不正円形を呈し、東西軸を同じくして接している。南北端は38cm程で、東から幅38cm、38cm、28cmを測るが、中央のものは、もとは45cm程あったと推測される。

東端には一列に並ぶピットが4つあるが、柱間は北から80cm、70cm、130cmと不整いである。

この外トレンチ中央両側にも東西に並ぶかと思われるピットがあるが並びが不明瞭である。

## 第四章 出土遺物

出土遺物の大半がかわらけである。特に第2面上にはかわらけを敷きつめて地形した層があったが、ほとんどが細片になっており、図示し得なかった。

### 1. 第1面上包含層出土遺物（図5）

1. 早島式土器の底部である。高台は付高台で右まわりに親指と人差指でおさえている。器厚は4mm底径は4cm、高台の高さは外面で5mmを測る。

2. 口縁が直線的に外反する浅いかわらけである。唇厚6mmを測り均一である。底部には糸切痕がある。口径8.0cm、底径6.2cm、高さ1.4cmを測る。

3. 脚下半に窪みを持つ浅い手づくねのかわらけである。器厚は底部中央が5.5mmと薄いが、周辺は7.5mmとやや厚くなっている。口径9.0cm、高さ1.6cmを測る。

4. 片口を持つ浅いかわらけである。底部からやや外反し、胴中央部から内湾気味に聞く。底部は静止糸切痕がある。器厚は底部が9.5mm、側壁で5.5mmを測る。口径9.0cm、底径5.7cm、高さ1.9cmを測る。

5. 内湾気味に大きく聞く杯形のかわらけで、器厚は4~6mmと均等である。口径13.7cm、底径7.8cm、高さ3.6cmを測る。

### 2. 溝1出土遺物（図6）

瀬戸の灰釉壺である。脚下まで施釉されている。高台最大径5.4cm、胴部大径10.2cmを測る。瀬戸・美濃の連房式登窯期第Ⅲ期（1700年代前後）に比定されるか。

### 3. 遺構外出上遺物（図7）

1. 伊万里染付碗である。底面が1.05cmと厚く。素地もやや黒く。

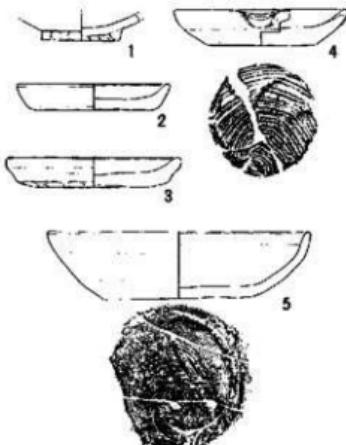


図5 第1面上包含層出土遺物（1/3）



図6 溝1出土遺物（1/3）

具須も黒い。底径3.5cmを測る1690年代～<sup>江戸時代</sup>1750年代の製品とされている。表土中出土。

2. 直線的に大きく開く浅いかわらけで、器厚は底部で6.5mm～7.5mmを測るが、中央がやや凹んでいる。側壁は4.5を測る。口徑8.7cm、底径6.5cm、高さ1.7cmを測る。西側搅乱出土。

3. 直線的に大きく開くが、口縁部がやや内湾する浅いかわらけである。器厚は底部で9mm、側壁6.5mmを測りやや厚い。口徑8.5cm、底径6.2cm、高さ1.7cmを測る。西側搅乱出土。

4. 内湾気味に大きく開く杯形のかわらけで、屈曲部がやや肥厚し、器厚は7～9mmで内凹した感じがある。口徑12cm、底径8cm、高さ3cmを測る。西側搅乱出土。

#### 注

1 「北海道から沖縄まで、国内出土の肥前陶磁、古墳津・伊万里の流通をさぐる」図953 S59.10.佐賀県立九州陶磁文化館

#### 4. 第1トレンチ・第3面上包含層出土遺物。(図8)

1. 丸味を持って内湾気味に開き、口縁がほぼ直立するやや深いかわらけである。器厚は底部中央付近で4.5mmであるが、側壁で7.5mmを測り、底部から側壁に移るに従って器厚を増している。口徑7.6cm、底径5.7cm、高さ1.8cmを測る。

2. 図7-2に類似する直線的に大きく開く浅いかわらけである。器厚は底部で7mm、側壁5mmを測り、底部は均一であるが側壁は口縁に向って薄くなっている。口徑8.5cm、底径4.1cm、高さ1.7cmを測る。

3. 内湾気味に大きく開く深い杯形のかわらけで、屈曲部がやや肥厚し、内凹した感じがある。器厚は底部で6mm、側壁7～9.5mmを測り、底部の方が薄い。口徑12.6cm、底径7.8cm、高さ3.6cmを測る。

4. 角釘の断欠である。先端5cm程の所で折れ曲がっており、長さ14cmを測るが頭部を失している。断面は長方形で、図示した箇所では8mm×4mm、10.5mm×5mmを測る。

#### 5. 第1トレンチ・第5面上出土遺物(図9)

須恵質の平瓦片である。厚さ2.2cm～2.4cmを測り、ほぼ均一である。焼成は良好であるが軽質で

ある。側端は鋸前りされ、整形されている。上、下面には撚糸による整形痕が明瞭に残されており、一枚造りであることを示している。

#### 6. ピット 1 出土遺物 (図10)

1. 口縁部が直線的に開く浅いかわらけで、底部は器厚8 mmで均一であり、口縁はしだいに窄くなる。口径7.7cm、底径6.3cm、高さ1.5mmを測る。

2. 口縁部が直線的に開く浅いかわらけであるが、底部の器厚が2.5~4 mmと薄く、特に中央部が窪んでいる。側壁は器厚5 mmを測り厚い。口径8.7cm、底径6.8cm、高さ1.6cmを測る。

3. 底部から外反気味に開き、腹部で内湾する浅いかわらけである。底面はやや深み、厚さ5 mmとやや薄く、周囲は6.5mmを測り均一である。側面肩曲部は、7.5mmを測りやや厚くなっている。

4. 3と同形態のかわらけであるが、器厚は底部中央で7 mm、浅囲が8 mmで窪は少い。側壁も6 mmと薄いつくりである。口径9.1cm、底径6.9cm高さ1.9cmを測る。

5. 内湾して開く丸味の強い深い杯形のかわらけである。器厚は底部で9.5mmを測り、側壁は6 mm程で、先端に行くに従い、しだいに細くなっている。口径10.6cm、底径5.7cm、高さ3.4cmを測る。

6. 内湾して開く杯形のかわらけである。器厚は底径で8.5mm、側壁で6~7 mmで、先端に行くに従い、しだいに細くなっている。口径11.7cm、底径7.6cm、高さ2.9cmを測る。

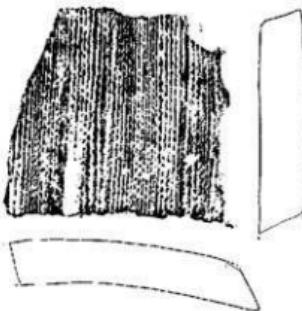


図9 第1トレンチ・第5面上  
出土遺物 (1/3)

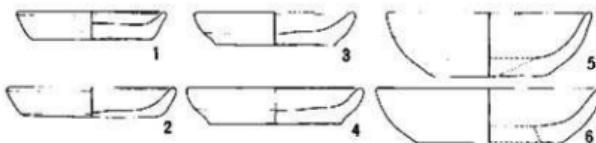


図10 ピット1出土遺物 (1/3)

#### 7. 土壙1出土遺物 (図11)

1. 内湾気味に開く杯形のかわらけである。器厚は底部、側壁共に5 mmを測り均一である。口径7.5cm、底径5 cm、高さ1.5cmを測る。

2. 直線的に開き、途中で屈曲して内湾する杯形のかわらけである。器厚は底部で9 mmを測り、底部脇では7 mmを測るが、屈曲部はやや肥厚して8 mmを測る。口径13cm、底径8 cm、高さ3.3cmを測る。

3. 内湾して開く、丸味の強い深い杯形のかわらけである。全体に薄い作りで、器厚は底部で6.5mm、側壁中央で5.5mmを測り、口縁に向ってしだいに薄くなっている。口径13.4cm、底径7.8cm、高さ4cmを測る。

4. 図10-3・4と類似するかわらけであるが、屈曲の度合がややきつい。器厚は底部、側壁共6mmを測りほぼ均一であるが、底部中央がやや凹んでいる。口径6.9cm、底径5.2cm、高さ1.4cmを測る。

5・6. 側壁下半まで指頭痕を残す大形の手づくねのかわらけである。器厚は9mmを測りほぼ均一であるが、口縁下はなでにより凹んでいる。5は口径12.1cm、高さ3.3cm、6は口径14.3cm、高さ3.4cmを測る。

#### 8. 石組1周辺出土遺物（図12）

1. 直線的に開き、口縁部が僅かに内湾する杯形のかわらけである。器厚は底部で8mm、側壁で7mmを測り、ほぼ均一である。口径11cm、底径7.3cm、高さ2.7cmを測る。

2. 側壁下半まで指頭痕を残す手づくねのかわらけである。器厚は10.5mmを測りほぼ均一であるが、口縁下はなでにより凹み、口縁に向ってしだいに細くなっている。口径11.3cm、高さ3.5cmを測る。

#### 9. ピット3出土遺物（図13）

内湾しながら開く深い杯形のかわらけである。器厚は底部4.5mm、側壁3.5mmを測り、薄く均一である。口径10.9cm、底径7cm、高さ3.3cmを測る。口縁部にはタルが付着している。灯明皿として利用されたものであろう。

#### 10. 溝2出土遺物

1. 内底面に割花文を描く龍泉窯の青磁碗底部である。素地はやや黄味がかった青灰色で釉は青紫色を呈する。高台径6.1cmを

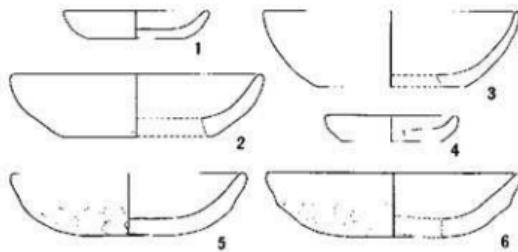


図11 土壌1出土遺物（1/3）

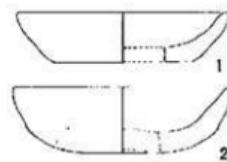


図12 石組1周辺出土遺物（1/3）



図13 ピット3出土遺物（1/3）

測る。

2. 内湾して開く丸味の強い強いかわらけである。器厚は底部で8mm、側壁で6.5mmを測り、ほぼ均等である。口縁部はしだいに薄くなっている。口径7.5cm、底径4.4cm、高さ1.9cmを測る。

3. 直線的に開く浅いかわらけである。器厚は底部、側壁共4.5cmを測り均一である。口唇部は外側に向って丸められている。口径8.2cm、底径6.6cm、高さ1.5cmを測る。

4. 内湾して開く杯形のかわらけである。器厚は底部で9mm、側壁で7mmを測り、先端に行くに従い細くなるが、ほぼ均等である。口径11.1cm、底径6.2cm、高さ3.4cmを測る。

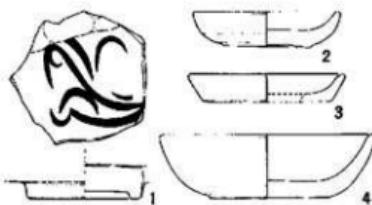


図14 溝2出土遺物 (1/3)

## 第五章 ま と め

当遺跡は、国指定史跡鶴岡八幡宮・政所・国指定史跡若宮入路・小引大路・若宮幕府・宇津宮辻子幕府に開まれた重要地区に当り、北条氏の館が存在したと考えられている。今回の調査では玉砂利・海砂を敷いた良好な地形面が発見されたが、当初、これは道路跡ではないかと推定して調査を行った。しかし復員が8.5mm以上と広すぎること、西端に南北に並ぶピット列が発見されたため他の遺構を考えざるを得なくなった。地形面の上に海砂・玉砂利を敷く例は長谷寺観音堂改築時の調査で確認されているが、長谷寺の例では玉砂利は多くは出土していないかった。この場合は田観音堂の中であるが、あるいはさらに古い観音堂の前面又は後背部に当るのかも知れない。市立御成小学校校庭の発掘調査の内、北谷の武家屋敷では、建物と建物の間に玉砂利が敷かれている部分があった。<sup>注1</sup> また国指定史跡永福寺跡の調査では、建物前面に玉砂利を敷きつめてあったことが確認されている。当遺跡の場合は、調査区西端にピット列があり、それ以西には認められなかったことから、想定の外に当る部分であるかも知れない。そうした場合、いずれもかなり規模の大きい建築物の間の空間に当ることから、当遺跡の場合も、調査区の周辺には近接して大規模な建築物の存在が想定されるのではないかだろうか。あるいはまた苑池等の存在が想定されるかもしれない。

出土遺物はかわらけが大部分である。出土品の年代は大略13C中葉～14C後半の中に含まれるものと思われ、明らかに15Cに入る製品は全く含まれていない。図8第1トレンチ・3面上層出土遺物は鎌倉第V期、図10ピット1出土遺物は鎌倉第IV期、図11土壙1出土遺物は3か鎌倉第V期の製品に比定され、混入と考えられるが、他は第III・IV期に比定される。図12石組1層邊出土遺物は鎌倉第III期、図13ピット3出土遺物は鎌倉第V期、図14溝2出土遺物は鎌倉第III・IV期に比定される。実年代は鎌倉第III期が13C中葉～後葉、IV期が13C末～14C前葉、V期は14C中葉～終末に比定されている。<sup>注2</sup> 以上のことから玉砂利の地形面が使用された時期は主に鎌倉第III・IV期に比定することができよう。第III期は13C中葉～後葉に比定されているから、想像をたくましくすれば嘉承二年（1236）、北条泰時邸が新造された際、築造されたのかも知れない。

この地で再び遺物が出土するのは図7・1の伊万里染付鍋である。1690年代～1750年代の製品に比定される。17C後半～18C初頭の製品は山内で少しづつ発見されてきており、この時期が近世における鎌倉の復興期であるのかも知れない。

### 注

1 昭和59年4月・5月発掘調査

2 河野真知郎氏の御教示による。昭和60年8月、実見

3 河野真知郎「(3) 鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古第21号』シンポジウム「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」所収 昭和61年2月 神奈川考古同人会

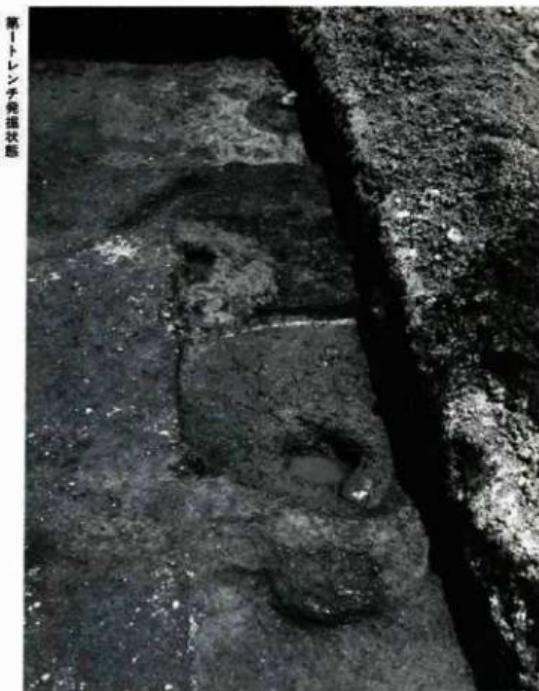
図版1



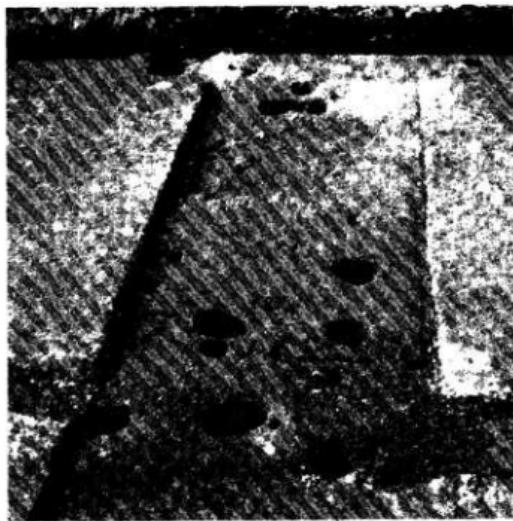
第1面検出状態と溝1

トレンチ発掘状態





図版 3



第3トレンチ完成状態



伊万里焼、青磁碗、早島式土器、漁戸壺、釘、瓦

図版 5



かわらけ

### 3. 名越ヶ谷遺跡

大町三丁目1367番4地点

## 例　　言

1. 本書は鎌倉市大町三丁目1367番4における齊藤茂との専用住宅新築工事に伴う発掘調査の記録である。
2. 本書の執筆は玉林美男が行った。
3. 現地調査は玉林美男・福田誠・原広志があたった。
4. 資料整理・報告書作成は玉林美男・福田誠・菊川英政・浜口康があたった。
5. 調査体制は以下のとおり  
担当者　　玉林美男（鎌倉市教育委員会文化財保護課）  
調査員　　福田　誠（鎌倉市教育委員会文化財保護課嘱託）  
　　　　　　菊川英政  
　　　　　　原　広志  
　　　　　　浜口　康
6. 出上品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

# 第一章 歴史的環境

名越ヶ谷遺跡は、鎌倉市大町五丁目に存在する中世遺跡である。中央部に東西に逆川が流れ、その両岸に谷の出口から奥へと道が通っている。字は名越ヶ谷・赤門・西ヶ谷・釣迦堂・黄金矢倉・ムヂナヶ谷・花ヶ谷・山ノ神・松葉谷である。

「名越」は旧東海道が鎌倉から逗子へ向ける鉄道の両側に存在し、鎌倉の境をなす地域としては、東の極楽寺・大仏坂下の長谷・坂ノ下地区と共に最も重要な場所の一つである。この鎌倉側「名越」には北条氏のうち名越氏、三善氏等の有力街家人の館や名越山王堂・慈惠寺・長善寺・新善光寺等<sup>井1</sup>の有力寺院があり、新善光寺は鎌倉大仏造営耗船の派遣について力があったことが知られている。また日蓮上人の活動拠点でもあり、妙法寺・安国論寺・長勝寺等がその法灯を伝えている。当該地における文献史的研究は松毛宣方<sup>井2</sup>・石井道南氏<sup>井3</sup>が詳しく行っているので、それを参照して頂きたい。鎌倉側の旧名越の範囲は鎌倉市大町三丁目～七丁目、材木座二丁目、四丁目に及び、あるいは同六丁目もその範囲に入るかもしれない。国道134号線の名越隧道から登る道（字名越坂に在る）が国指定史跡名越切通に直に接続しているため、この道が「名越坂」と考えられているが、両名越を結ぶ道は当遺跡の中央を通り、名越大谷からムヂナヶ谷をぬけて尾根道に至り、法性寺（お猿畑）あるいは国指定史跡名越切通の坂道に至る道がある。また尾根道を少し北上すれば足利市久本、岩殿寺に下る道もある。いずれもすぐに合流して沼間へと続いている。名越入谷と名越坂の中間にある安国論寺奥の日朗上人茶毘所からは尾根道が法性寺まで続いている。名越草庵焼打に際し、日蓮上人が猿に案内されてお猿畑まで追げのびたと言い伝えられており、信者はこの道を通ってお猿畑まで巡礼している。また名越入谷奥の黄金矢倉からも尾根道に登る道があつた様である。このように、名越から鎌倉の外へ続く道は一つでなく、所謂七<sup>井4</sup>という言葉に影響され、それ以外の道が全く無いかのごとく幻覚を持つが、道は数多く在るのが本末の姿であろう。とはいっても中心となる道は当然在るはずであるし、吾妻鏡天福元年（1233）八月十八日条では、前浜での殺人事件に際し「名越坂」以下の路を固め、「名越邊」で容疑者を崩えているから、「名越坂」と呼ばれる道があつたことは事実である。これが現在の字「名越坂」を通る道であり、国指定史跡名越切通であるかは、道周辺の遺跡の変遷を探りながら慎重に検討を加えていく必要性があるのではないだろうか。

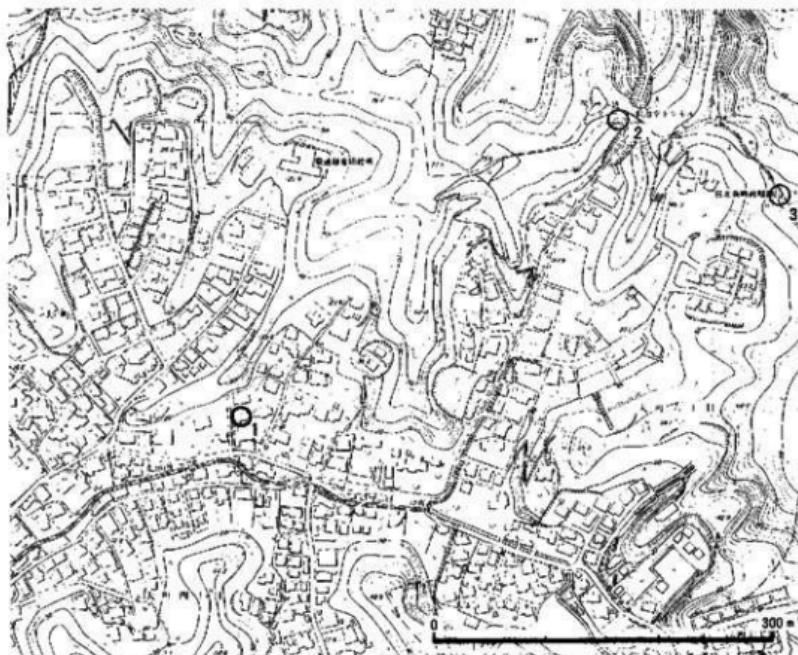
一方、名越入谷から釣迦堂口に入れば、釣迦堂の切通（トンネル）をぬけて釣迦堂ヶ谷に至り、武藏国六浦莊あるいは大倉へと続く六浦道に出る。

これらの道については近年の大三輪潔彦氏の研究により、田車大路が一直線に「名越坂」に向って伸びている可能性が出来た。一方、車大路の一本北側の道は安国論寺へ、大町大路は名越入谷へ向って伸びている可能性がある。大三輪氏の推論をとるとすれば、大町大路・車大路・両者の間

の道がいずれも名越に統一していることになり、各峰道の存在はさらに重要なものになってくると思われる。

名越大谷には北条時政名越山荘推定地、三善善信邸推定地(名越文庫推定地)、山王堂跡、花ヶ谷慈恩寺跡の他、山王ヶ谷、駅遊堂口、黄金矢倉、ムジナヶ谷、安国論寺境内にやぐら群が存在する。そのうち駅遊堂中には駅遊堂トンネル上やぐら群、店系やぐら、日月やぐらのやぐら群、ムジナヶ谷には浅間山南山源やぐら群が在る。いずれも数十基を数え、道に面するやぐらとしては「名越坂」の名越坂古墓よりも大きな群である。

北条時政名越山荘推定地からは大型青磁碗が三点出土。(衣張山出土とあるもの)しており、その内面に石灰分が大量に付着していることから藏骨器かと推定されるが、縦合出土の中国陶磁の中では最も優良なものである<sup>注6</sup>(文化庁保管)。また三善善信邸推定地には東西に長く、中島を持ち、安山岩を配した堂前池形式の池跡があり山腹と池とに囲まれた少し高くなった平地に名越文庫跡が推定<sup>注7</sup>されているが、現在は埋立られ、宅地になっている。地元ではモメンジ、円応寺等と呼称していた。



1. 大町二丁目1367 4(調査地)

2. 駅遊堂口やぐら群

3. 伝・北条時政邸跡

図1 調査地点位置図

当推定地西側の大町四丁目1736番4の車庫造成に伴う調査では、北条泰時、時頼跡等で検出されている柱穴のある角材がすえられた状態で出土した例がある。<sup>8)</sup>

山王堂ヶ谷には山王堂跡があり、高さ一尺五寸程の鉢形の石垣が残っていた。昭和10年4月28日の発掘調査では谷最奥の一段高い所に広さ約二畝の平池があり、その東北部に南北七間・東西十間程の方形の土壇があった。土壇上は地表下二・三寸のところ及び土壇周辺に瓦の層があり、ここからは巴文軒丸瓦、均等唐草文軒平瓦・鬼瓦等が出土している。報文では室町期としているが、鎌倉中期頃のものと考えられる。また周辺やぐらからは花菱文のひき手鉤がある茶臼が出土している。<sup>9)</sup>この山王堂は重要文化財山王靈験記に少し話が出て来ており、当時かなり有名な堂であったらしい。<sup>10)</sup>

このように名越は鎌倉の東側の交通路の要衝の一つであり、名越大谷はその中にあって、三浦・六浦方面への交通の要衝として、また有力御家人邸宅、社寺が在り、また都市民が集中する場所として字名越坂と共に重要な位置を占めていたのではないだろうか。今後さらなる研究が望まれる所である。

#### 注

- 1) 森克己「鎌倉入仏と日本貿易」『日本文化交流の諸問題』所収
- 2) 松尾宣方「I 漢詩をとりまく歴史的環境」『長勝寺遺跡』所収 昭和53年10月 かまくら春秋社
- 3) 石井進「坂と境」『日本民俗文化大系 第2卷 洗泊と定着』所収 昭和59年3月 小学館 にまとめられている。
- 4) 高柳光寿「鎌倉市史 総説編」昭和34年10月 吉川弘文館
- 5) 大三輪出彦「中世都市鎌倉の地割制試論」『佛教藝術』164号所収 昭和61年1月 每日新聞社
- 6) 「日本出土の中国陶磁」昭和53年3月 東京国立博物館
- 7) 「第一回 灰勝寺・名越山王堂跡・長勝寺他」鎌倉 史蹟めぐり会記録 1 昭和47年7月20日 鎌倉文化研究会
- 8) 「北条泰時・時頼跡」鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 1 昭和60年3月 鎌倉市教育委員会  
「北条泰時・時頼跡」雪ノ下 1丁目371-1 地点発掘調査報告書 昭和60年8月 北条泰時・時頼跡  
発掘調査団編 鎌倉市教育委員会
- 9) 「第29回 名越山王堂跡発掘」志一編著 注7前掲書所収
- 10) 入田整一「鎌倉名越の山王堂について」『鎌倉』 第5巻第2号 昭和14年3月 鎌倉文化研究会

## 第二章 調査の経過

昭和60年4月17日～19日にかけて、予定地について3箇所の坪掘を行い、土層の堆積状況、遺構の様相の把握を行った。この結果、地下室以外の場所については、当該工事による影響はないと判断し、地下室部分についてのみ発掘調査を実施することになった。坪掘の結果、現地表下約80cmの所に上丹地形面があり、以下に炭化物を間層にはさむ地形面があると推定されたため、表土を重機で除去してから発掘調査を行うこととした。表土除去については事業者の協力を得た。調査は8月15日に開始し、上層の遺構を調査したが、盛土、切土がくり返し行われており、炭化物層等も中途でなくなってしまう状況で、遺構を明確にしなし得なかった。このため事業者の協力を得、9月17日～19日まで重機を用いて埋土を除去し、下層遺構の調査を行った。この結果獨立柱建物、廐跡等を検出し、9月28日発掘調査を終了した。



図2 調査区設定図

### 第三章 検出遺構

#### 1. 標準堆積土層（図3）

地表下83cmに第1面がある。地形は第5層で8cm程の厚さがある土壌層である。地表下1m 8cm~22cmの所に厚さ2~4cmの炭化物層があるが、部分的に認められるだけで、広がりが明確ではない。この炭化物層に関する地形は第7層と想定されるが判然としない。これが第2面である。第3面は地表下1m 95cm~2m 7cmにある第16層上面であろうが、地形面上からでは遺構の確認が困難であったので第17層（地山・第4面）上面で行った。地山上面は地表下2m 22cm~32cmである。（以上は標準土層上の深さである。）

第1面及び第2面の土層は標準上層が認められるのは調査区の東半分程で、西側は全く異った堆積を示していたが、調査区中央に擾乱層・堆積層が当たったため、相互のつながりを把握することができなかった。このため第1~3面を上層の遺構、4面を下層の遺構としてあつかった。

#### 2. 上層の遺構

調査区南側にピットが群集する。ピットは直径30cm、深さ30~40cm程のものが主である。特に規則性は見出せないが、東西方向の方向性は指摘できるかもしれない。土壌状の落込もあるが、壁が明瞭でない。地行面としても非常につかみづらく、ほとんどの部分が火災に伴って削平を受けているようである。下層遺構確認中検出された井戸跡と考えられる大形土壙は上層の遺構である。これは1辺3m 10cmを測る圓錐形丸方形で、壁面はほぼ垂直であるが、壁・底面が非常に軟弱で作業中身動きがとれなくなる程であったため、調査を中止した。

#### 3. 下層の遺構（図4）

第4面、地山の黒褐色粘土上面で確認した遺構である。ピット、掘立柱建物跡、堀跡がある。

##### 1. 掘立柱建物跡

東西2間以上・南北3間以上の建物である。調査区中央部に建物西端が在る。柱間は東西方向が



図3 土層説明図 (1/40)

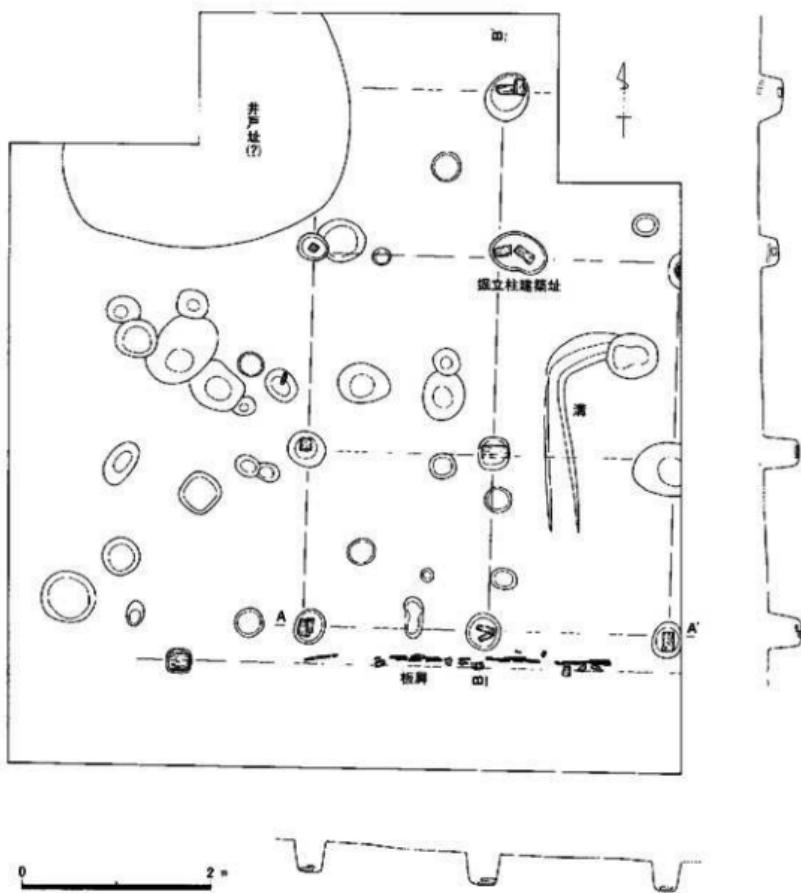


図4 掘出遺構平面図及び断面図

南北から1.9m、2.1m、1.8mを測り一定でない。柱穴覆土は青色小上丹を若干含む黒褐色粘質土である。柱穴は直徑30cm~50cmの不整円形で、深さ18cm~35cmを測り、各々礎板を持つが、調査区東端の中央の柱穴は礎板を持たない。建物の向きは不明であるが、軸線はほぼ正南北を示している。

建物周辺は地山が南東に傾斜しているため、16層（暗茶褐色粘質土）で地形が行われ、地ならしが行われていたが、これも水平ではなく、地山同様の傾斜が認められた。

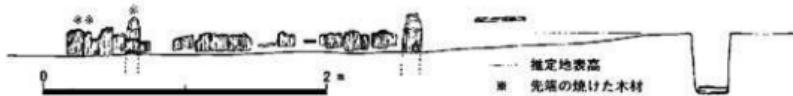


図5 板塀立面図

## 2. 塀跡（図4、図5）

掘立柱建物の南側25cmの所に、建物に平行して長さ2m50cmに渡って発見された。塀は杭・縦板・横木から成っている。杭は2本発見された。柱間は芯々で197cmを測り、西側の杭は10cm×5cm、東側の杭は9×10cmの角材であり、縦板列の両側に配されていた。縦板は幅9cm～14cm、厚さ1cm程度の板で、幅11cm程のもののが多かった。横木は2cm角程度で、長さ36cm分を確認したが、地山から20cm程度浮いた位置であった。この位置はIE地表（地形面）位の位置に当る。横木・杭の先端は焼けているものがあることから火災にあったことがわかる。

西側の杭から芯々で210cm西に、1辺25cm、深さ43cmを測る、礎板を持つ隅丸方形のピットが存在する。このピットから西壁まで185cmで、この間に対応するピットは存在しない。このピットも塀の一部と考え、門柱のようなものを想定したい。

## 3. 溝（図4）

調査区東端、掘立柱建物跡の中で検出された素掘の溝で、L字形に曲っている。幅20cm～35cm、深さ6～10cmで長さは東西50cm、南北160cmを測る。東端はピットに切られ、南端は傾斜により消滅している。覆土は軟質の黒褐色粘質土であり、木製品・腐植物等が多く出土した。

## 第四章 出 土 遺 物

遺物は大略上層（1・2面）の遺物と下層（4面）の遺物に分かれる。大部分が上層の遺物である。

### 1. 上層の遺物

#### 1. 中国陶磁（図6-1~22）

##### A 青磁（図6-1~10）

1~5は鎬蓮弁文碗である。1~3は直線的に開くが、4は口唇部がわずかに外反している。3は炭化物層中、4は炭化物層下出土。

6は割花文系碗の口縁と思われる。炭化物層上出土。

7・8は無文の佔系の碗である。8の見込には貼付文の痕跡がある。炭化物層上出土。

9・10は大型の盤の口縁であり、10の外側面にはわずかに運介の痕跡がある。

##### B 白磁（図6-11~15）

11~14はいずれも口縁が外反する口禿の皿である。図示していないが、口縁が直行するものも1片存る。

##### C 青白磁（図6-16~21）

16は型づくりの輪花小皿である。内側面に鎬文を配し、花弁状になっている。

17は無文（？）の小皿である。

18は小壺の口縁で、外側面に鎬文を配している。口唇部は施釉後、鋭く削られている。

19は梅瓶の胴部かと思われる。炭化物層上出土。

20・21は合子の蓋である。20は外面上に牡丹文を、21は外側面に鎬文・中央円圈内に草花文を型で浮き出させている。20は炭化物層上出土。

##### D 褐釉（図6-22）

22は褐釉大甕（壺）の底部である。外側面に褐釉が刷毛塗されている。炭化物層の上下で同一個体が出土している。

この外、灰器小壺の破片が出土している。

#### 2. 山茶碗（図6-23~35）

23は常滑系山茶碗である。

24~26は東濃系山茶碗である。24は炭化物層下出土。

他に2個体分の瀬戸系山茶碗片が出土している。

#### 3. 瀬戸窯の製品（図6-27~35、図7-36~42）

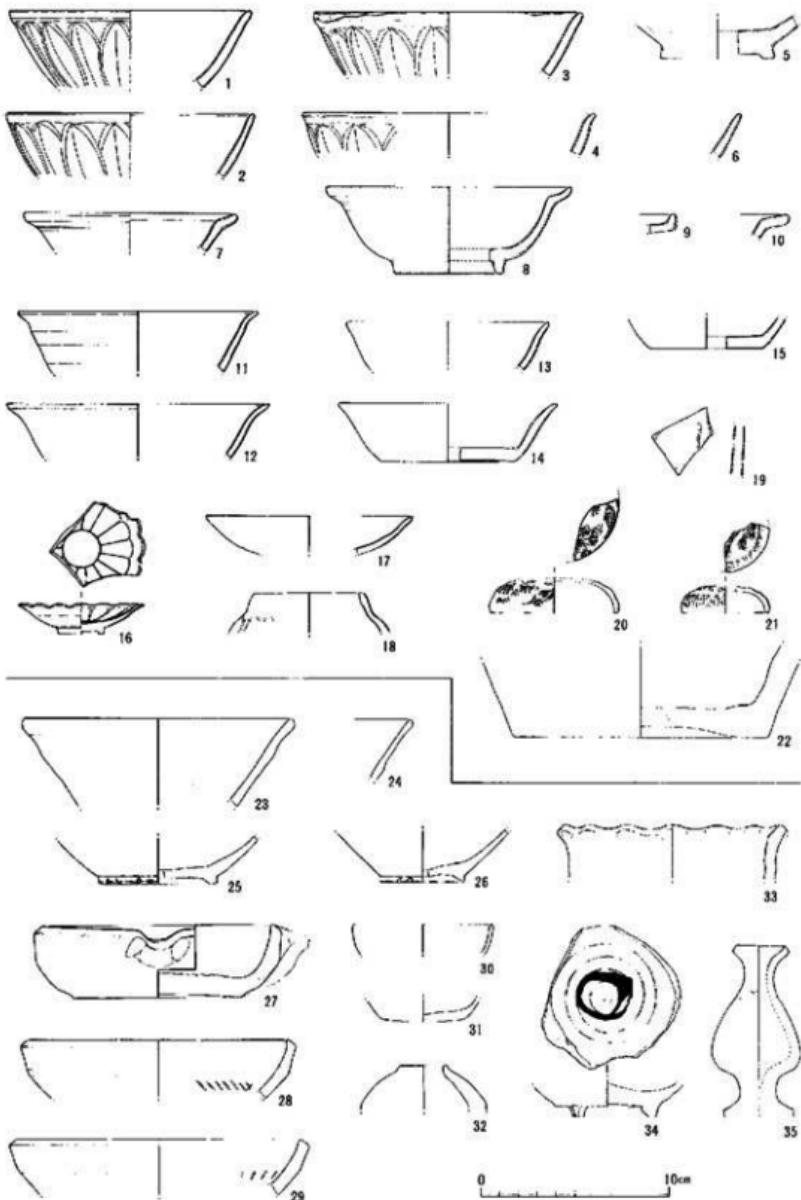


図6 船載陶磁器・美濃・瀬戸

27~29はおろし皿である。口縁は直立に近く、口唇部も方形に近い。このタイプのものは嘉慶三年(1324)銘地輪下から出土した例がある。<sup>註1</sup>

30・31は瀬戸の人子である。30は炭化物層上、31は炭化物層下出土。

32は灰釉小壺又は水滴の口縁部である。

33は花瓶・香炉・楳木鉢等の口縁である。側面には菊の印花がある。黒褐釉が厚くかけられているが、大部分緑色に発色している。

34年は香炉の底部である。灰釉がわずかにとぶのみで無釉である。内底面に墨で丸が描かれている。

35は灰釉の小形仏花瓶である。口縁を半分程欠くだけで完器に近い。

36は大形の灰釉盤である。

37も36と同形の盤の底部であろう。

38は灰釉の鉢(?)であろうか。

39は銅線釉のような感じの灰釉がかかった洗である。口縁はほぼ直立するが、口唇部形態は笠・韋松期位のものである。

40は灰釉四耳壺である。所謂13Cのタイプであるが、二次焼成のためか釉がかすれて剥落している。炭化物質の上下から一個体分が出土。

41・42は同一個体と思われる灰釉瓶子である。炭化物層下から上層まで出土。

この他3個体以上の瓶子又は四耳壺の破片が出土している。

#### 4. 土製品(図7-50~53)

50は早島式土器である。やや焦味がかった灰褐色を呈する。

51は手づくねの白かわらけである。畿内のものと思われる。

52、伊勢系上蓋である。小砂利を多く含む。他に2点出土しているが1点は炭化物層下出土で器厚は厚い。

53は上蓋である。素地は砂目で内面に箇調整痕を明瞭に残している。他に1点炭化物層下から出土している。

#### 5. かわらけ(図8-54~69、71~85)

いずれも系切底である。器形は大略以下の三種に分けられる。

1類 底が大きく側面が丸味を持ち、やや厚手の浅い器形である。

54~61・66・67・69・71は小形の皿状のものである。54・57・60・69・71は炭化物層出土。56・58は炭化物層上出土。

81・82・84~89・91は大形のものである。88・89は炭化物層出土。81は炭化物層上、87は炭化物層下出土。

2類 底が小さく、側面がきれいな丸味を持つ、薄手でやや深目の器形である。

72~77は小形の皿状のものである。77は炭化物層出土。

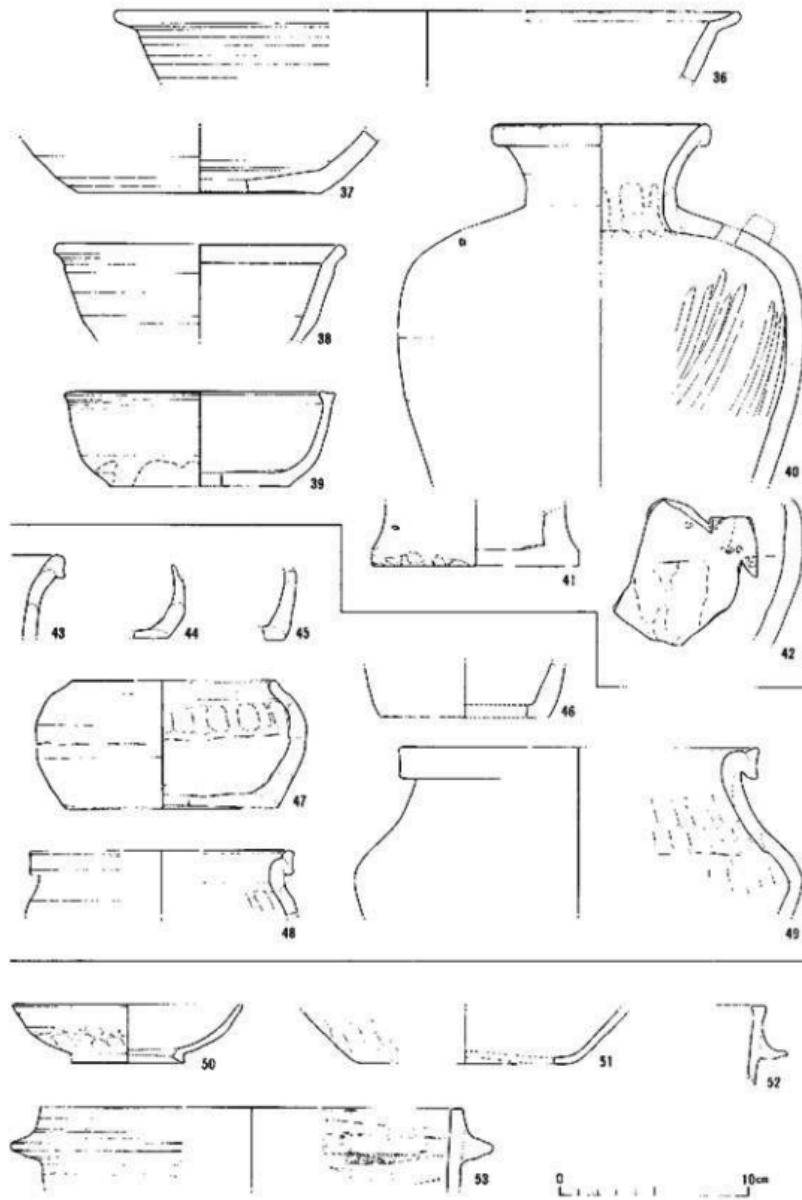


図7 潤戸・常滑(壺類)・土製品

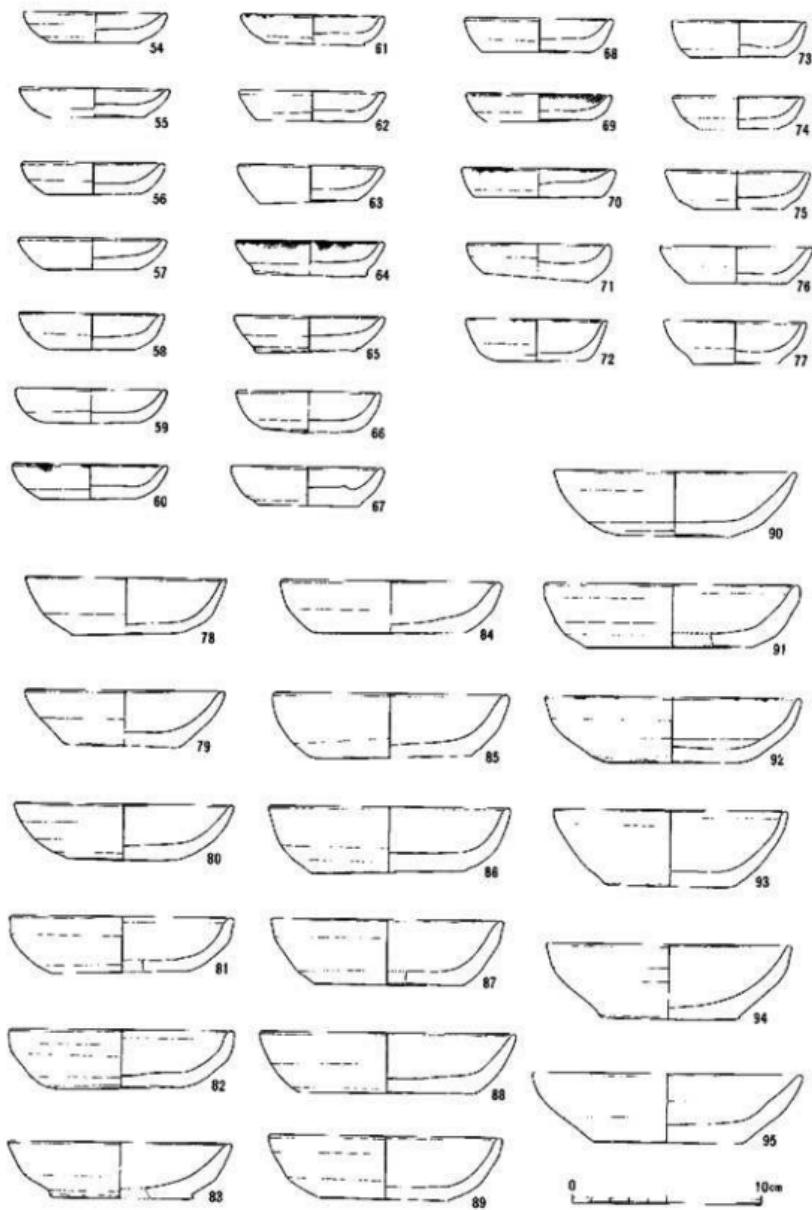


図 8 かわらけ

78はやや大き目の小皿である。炭化物層下出土。

80・90・93は大きさが異なるがやや大き目のものである。93は炭化物層上出土。

3類 底が小さく、やや直線的に開き、胴中はで内湾する。少し深目の器形である。

79はやや小形のものである。

83・92・94・95は大形のものである。92は薄いものである。

4類 直線的に開く浅い器形である。

62～65・68が該当する。小皿形のものしか無い。62は炭化物層、68は炭化物層下出土。

かわらけ法量表

(単位:mm)

NO	口径	底径	器高	底部 器厚	側壁 器厚	類別	NO	口径	底径	器高	底部 器厚	側壁 器厚	類別
54	74	47	16	7	6	1	75	75	46	20.5	5.5	4.5	2
55	73	50	16	6	5	1	76	79	53	20	5.5	5.5	2
56	73	51	17	5.5	6	1	77	74	55	23	6.5	5	2
57	76	48	17	6	5	1	78	105	57	30	5	4	2
58	76	46	19.5	7	6	1	79	104	59	29.5	7.5	6	3
59	78	50	18.5	6	5	1	80	104	57	30	7.5	6	2
60	81	51	19	7.5	5	1	81	106	73	29.5	6.5	6.5	1
61	74	52	16	6	4	1	82	107	65	31	6	6.5	1
62	75	57	16	6	4.5	4	83	106	25	30	9	3	
63	75	52	19.5	6	4	4	84	114	79	28	5	8	1
64	77	58	18	7.5	4	4	85	122	81	34	7	8.5	1
65	78	52	19	7.5	4.5	4	86	125	80	35	9.5	7	1
66	74	48	22	6.5	5	1	87	121	78	35	7	7	1
67	78	53	21	10	6	1	88	134	92	32	7	7	1
68	76	57	18	6.5	5	4	89	121	69	34	6.5	6	1
69	75	54	14.5	5	5	1	90	127	60	34	6.5	7	2
70	78	67	15.5	7	7.5		91	132	87	33		10	1
71	78	55	18	8	7.5	1	92	133	70	35	8.5	6	3
72	73	46	22.5	4.5	3.5	2	93	122	68	40	8	5	2
73	69	50	19.5	6.5	4.5	2	94	128	73	40	6.5	7.5	3
74	68	42	17.5	5.5	4.5	2	95	141	77	37	9.5	9	3

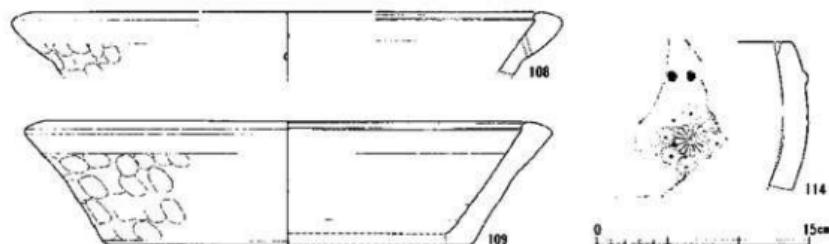
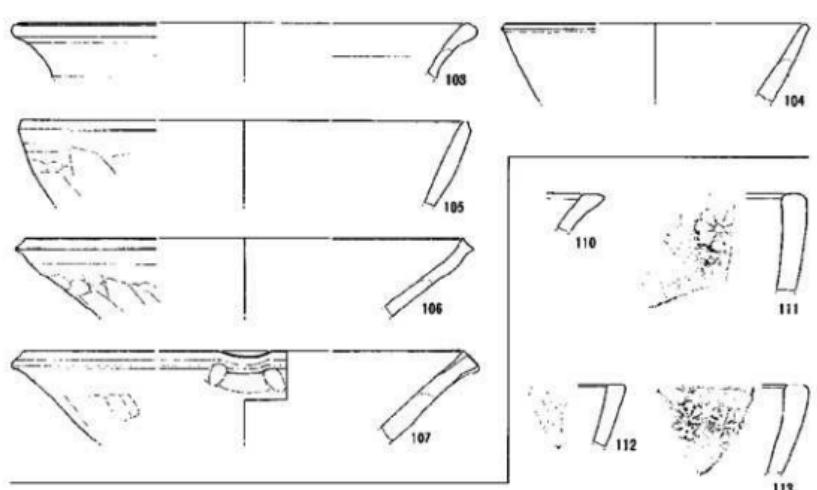
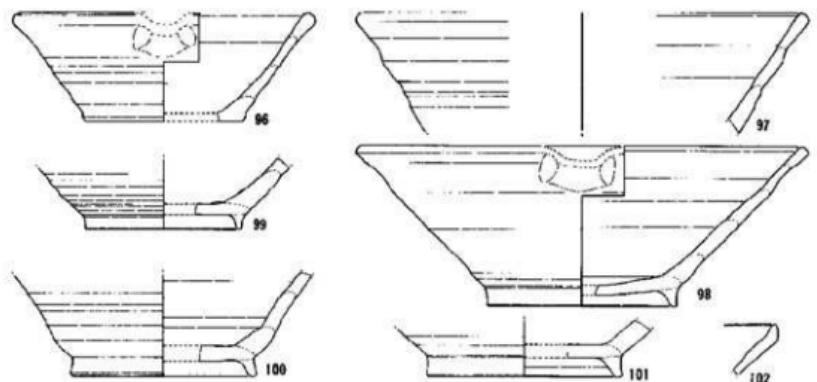


図9 山茶碗窓（捏鉢）・常滑（捏鉢）・東播系（捏鉢）・土製品

## 6. 火鉢 (図9—108~114)

108~110は直線的に大きく開く無文の火鉢である。110は炭化物層出土。口唇部内側の突起が少い。  
111~113は大型の菊花の印花を配し、口縁がほぼ直立する火鉢である。

114は口縁下に雷文状の方形渦巻文帯、その下に珠文帯を配し、胴中央に菊花印花文を配する。炭化物層下出土。

## 7. 捏鉢 (図9—96~107)

### A 山茶碗窓系 (図9—96~101, 103)

口縁部が肥厚し、口唇部に一条の沈線が巡るものである。

96は高台を持たない。炭化物層出土。

98~101は高台を持つ。98は炭化物層下から上層にわたって出土。99, 103は炭化物層下出土。

### B 束縛系 (図9—102)

102は口縁部が内側に折れ、口縁外縁部は黒くなっている。

### C 常滑窓 (図9—104~107)

104・105は口縁に向って器厚が薄くなるが、106・107は器厚にはば一定で口縁部が四角く広がっている。104は炭化物層、107は炭化物層下出土。

## 8. 常滑 (図7—43~49, 図10—115~122)

43は三筋壺系の壺の口縁である。上層の他、同一個体の破片が炭化物層下から出土している。

44~46は片口壺の底部と思われる。44は炭化物層上出土。

48・49は小形の甕である。48は炭化物層下出土。

47は盤であるが片口がつく可能性もある。

115~120・122は甕である。116・118・119・121は常滑窓第III期、115・117・120は同第IV期に比定されよう。116・117は炭化物層下出土。

121は壺である。常滑窓第IV期に比定されよう。

## 9. 石製品 (図10—126~128)

126は方硯である。枯板岩製。炭化物層下出土。この他、炭化物層上から方硯が1点出土している。

127~128は砾石である。双方共中砥で、128は炭化物層下出土。この他、厚さ5mm程の仕上砥が4点出土している。その内3点は炭化物層上出土である。また荒砥の小片が1点出土している。滑石小片2点が出土しているが、滑石釜の出土は無い。

## 10. 鉄製品 (図10—130~133)

130は三角形の環である。用途不明

131は円盤状の中央につまみ状の残欠である。裏側には漆喰がぬられている。あるいは墨入品かもしれない。用途不明。

132は釘の残欠である。

133はクサビ状の製品である。返しに打痕がある。

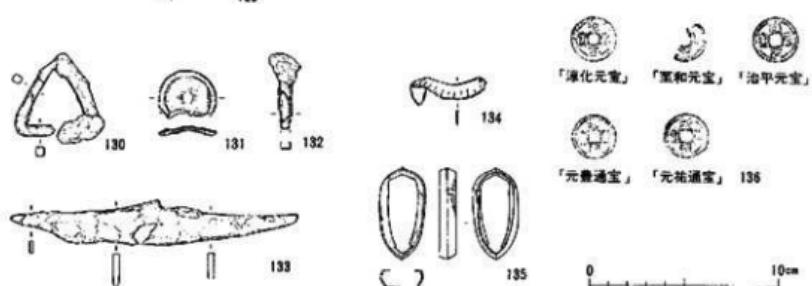
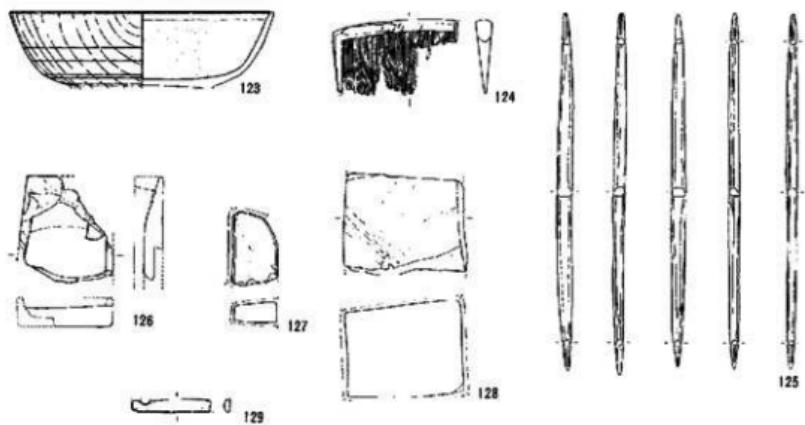
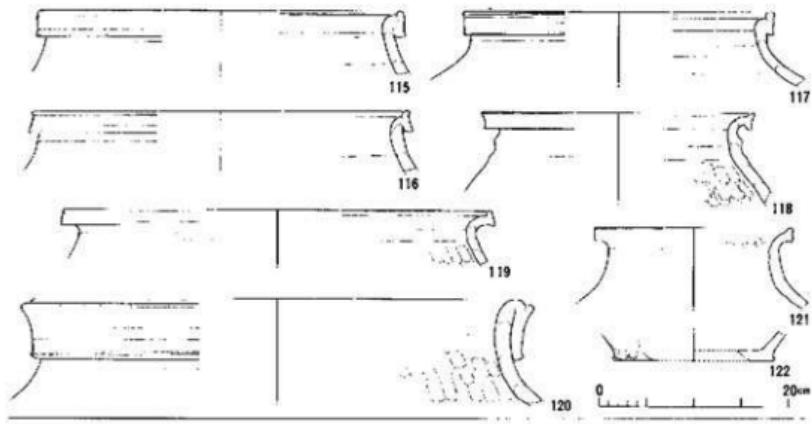


图10 常滑(面)・木、石、骨、金属製品

この他釘残欠、鉄滓が出土している。

#### 11. 銅製品（図10—134～136）

134は菊花状の花弁を刻した上に鍍金を施したものである。鍛造品である。

135は野太刀の鞘口である。

136は銅鏡である。至和元宝のみ炭化物層下から出土している。

#### 12. その他の遺物

獸骨が若干出土しているが、遺存状態は良くない。大にかまれたかと思われる焼の痕が多数残るものもある。また火葬骨片が炭化物層下から1点出土している。

この外、平瓦・龜山窯蓋等が出土している。

### 2. 下層の遺物

#### 1. かわらけ（図8—70）

溝の西側で発見された。出土したかわらけはこの1点のみである。口縁にタールの付着があり、灯明皿と思われる。

#### 2. 漆器（図10—123）

黒漆塗の浅い碗である。漆はうすく全面に塗られており、木目の凹凸が表面から観察できる。横木取り技法である。かわらけに近接して出土。

#### 3. 木製品（図10—124・125）

124はすき櫛である。溝出土。

125ははしである。溝出土。この他はしづは溝から数多く出土している。

この他、木片が若干出土している。

#### 4. 骨製品（図10—129）

129は笄の断欠である。溝出土。

### 注

1 多宝律寺発掘調査団「多宝律寺遺跡第7次発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会 昭和52年

## 第五章 まとめ

当遺跡は名越の大谷のはば中央に位置し、有力武士の館あるいは庶民の生宅等が存在したと考えられている。今回の調査では、上面は火災後の削平等によりうまく把握できなかつたが、出土品は非常に豊富であった。

下層では掘立柱建物に板塀が併設されている状況が明らかになった。この建物は板塀西端の柱穴以内が入口と考えれば西向の建物になるかもしれない。建物と板塀が非常に近隣していることから、目隠塀と考えられ、同一敷地内の区画と考えられる。

板塀は信貴山縁起(1)、一遍聖絵(2)、粉河寺縁起(3)、春日権現験記(4)、幕繪絵詞(5)、<sup>注1</sup>等の絵巻にみられる。絵巻は「日本常民生活絵引」を用いたので、以下その通し番号を用いる。(1)では85に縦木に横棟の板塀が描かれている。(2)では260(第7巻 四条京極駅遊堂の情景)、273(第11巻 兵庫光明福寺前の情景)、279(第9巻 如一上人茶毘の情景)に縦板の塀が描かれている。(3)では325(河内の表者の家の情景)、(4)では581・613、(5)では797(第5巻 大谷禅室前の情景)、799(第5巻 大谷廟堂のうちの情景)にみられる。いずれも下端は土に埋もれており、横木を釘でとめているが、横木は区画した内側につく。また柱も同様である。のことから当遺跡で検出した塀と建物との関係は、建物の方が塀で区画された区域の外と考えられよう。すると主屋は調査区の南側にならうか。

絵巻でみるとかぎり、板塀は庶民の建物では用いられていない。武士や公家、長者の館や寺院等にみられる。庶民の場合は農村では簡単な垣が用いられているが、都市では垣は用いられていない。

以上のことから、下層の建物跡と板塀は武士クラスの館の内部にある建築物であり、主要建物は調査区以南にあると推定される。

遺跡の時期は下層の遺物、特にかわらけが鎌倉第III期に属すると考えられ、漆器も古い様相を示しているのに対し、上層はかわらけの1類が第IV期、2類~4類が第V期のものと考えられるが、層位的には分けることができなかった。実年代は第III期が13C中葉~後葉、第IV期は13C末~14C前葉、第V期は14C中葉~終末(あるいは15C初頭)に比定されている。他の陶磁器の年代も大略同様である。

出土遺物の中では、銅製の軋口が注目されよう。四尺余りの野太刀のものと考えられ、南北朝期<sup>注2</sup>に比定されるといふ。また黒漆碗は鎌倉第III期に属する資料としては貴重な資料である。下層出土の陶磁器はかわらけ1点のみであり、時期決定の確証に欠くくらいはあるが、漆器、かわらけとも完器に近いものであり、大過ないものと思われる。

最後に火鉢について少し述べておきたい。詳しくは調べてはいないが、絵巻に表れた火鉢は、絵師草紙等にみられる円形の菊花文の印花があるものがほとんどである。これは床に置かれ、移動用

の炉として用いられている。このため足がつけられている。この他、幕場絵図には方形の火壺がある。これには持ち運びができるものであろう。三十四番職人歌合に招かれた火鉢壳は前者と後者を持つている。これに対し、信貴山縁起にはいろいろの中にも火所が別に描かれている(日本常民絵引<sup>66</sup>。以下番号のみ記す)。また曲物の火桶の中に火入れが入ったもの(83)もある。さらに北野天神縁起にはまき絵の火鉢の中心に火所がある(118)。これらの例から、それ単体として主に煮沸用に用いられるものと、火櫃(鉢)の中に入れて火所として用いられるものとがありそうである。絵巻の例からみると、前者は外側面に装飾を持つ菊花文等の印花のある一群であり、後者のいろり、火鉢等の火所となっているものは、陶磁器で考えるならば、無文の平鉢形のものであろう。後者が火鉢として単独で用いられることについて否定するものではないが、こうした用途の差が両者が並存する理由の一つではないだろうか。

#### 注

- 1 「新版絵巻物による日本常民生活絵引」 渡澤敬三 神奈川大学日本常民文化研究所編 昭和59年8月 平凡社
- 2 小山 徹氏の御教示による。

図版1



第2面検出状態（西から）

同上（北から）





第2面遗物出土状態

第2面遗物出土状態



図版 3



第4面検出状態

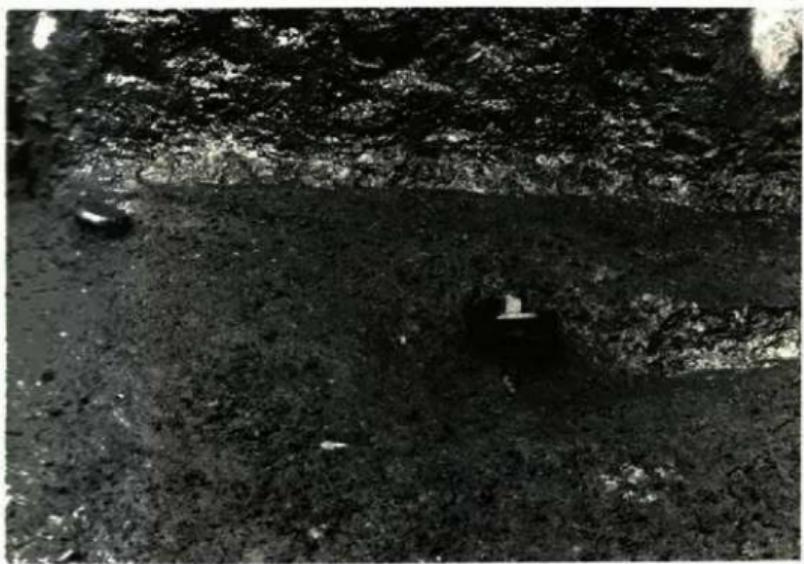
板屏検出状態（西から）





板戸検出状態（北から）

漆器碗検出状態



図版 5



中国陶磁・古窯戸・山茶碗



土蓋・土製品・火金・銅製品

図版 7



こね鉢・常滑



かわらけ・龜山



下層出土・かわらけ・漆器碗・はし

---

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 2

昭和60年度発掘調査報告

発行日 昭和 61 年 3 月

編 著 鎌倉市教育委員会

発 行

印 刷 中川印刷株式会社

---